

654
56



654-56
1200501571087

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9

Ruler: 1 2 3 4 5 6 7 8 inches / 1 2 3 4 5 6 7 8 cm

内務省
4.6.22

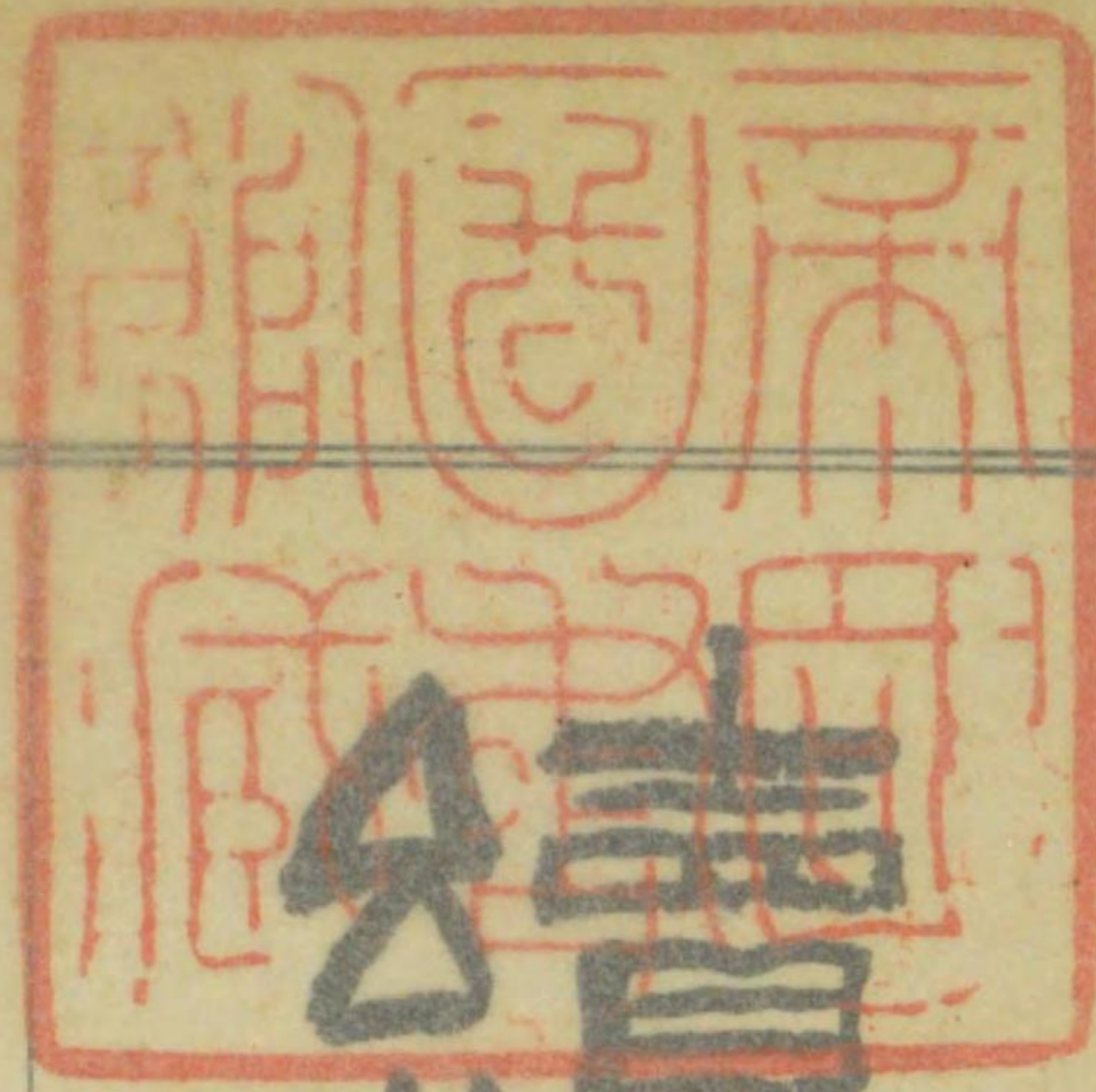
395



文庫
2524
存



654
56

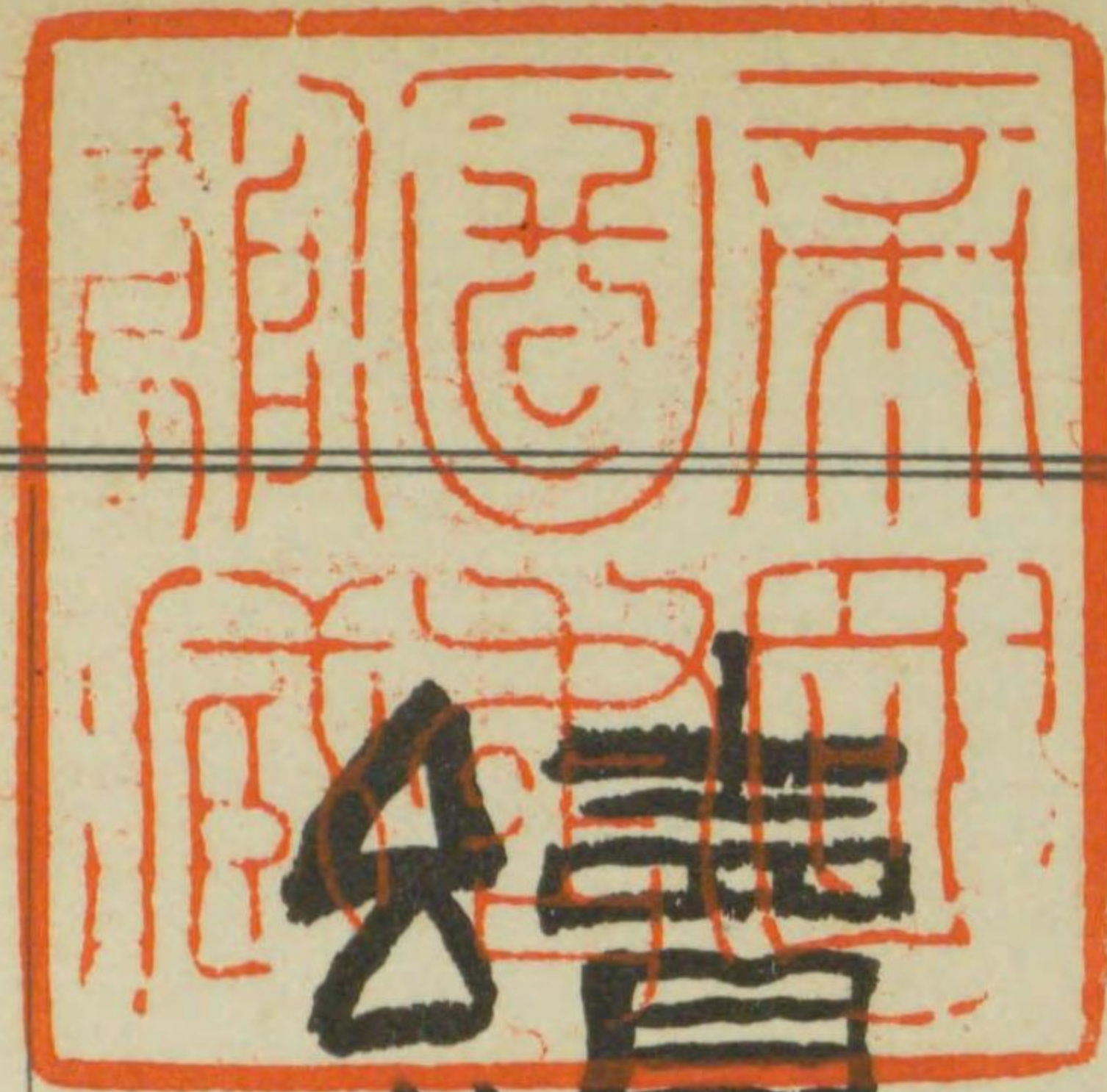


續國譯漢文大成

經子史部
第十一卷
資治通鑑
第十一卷



654
56

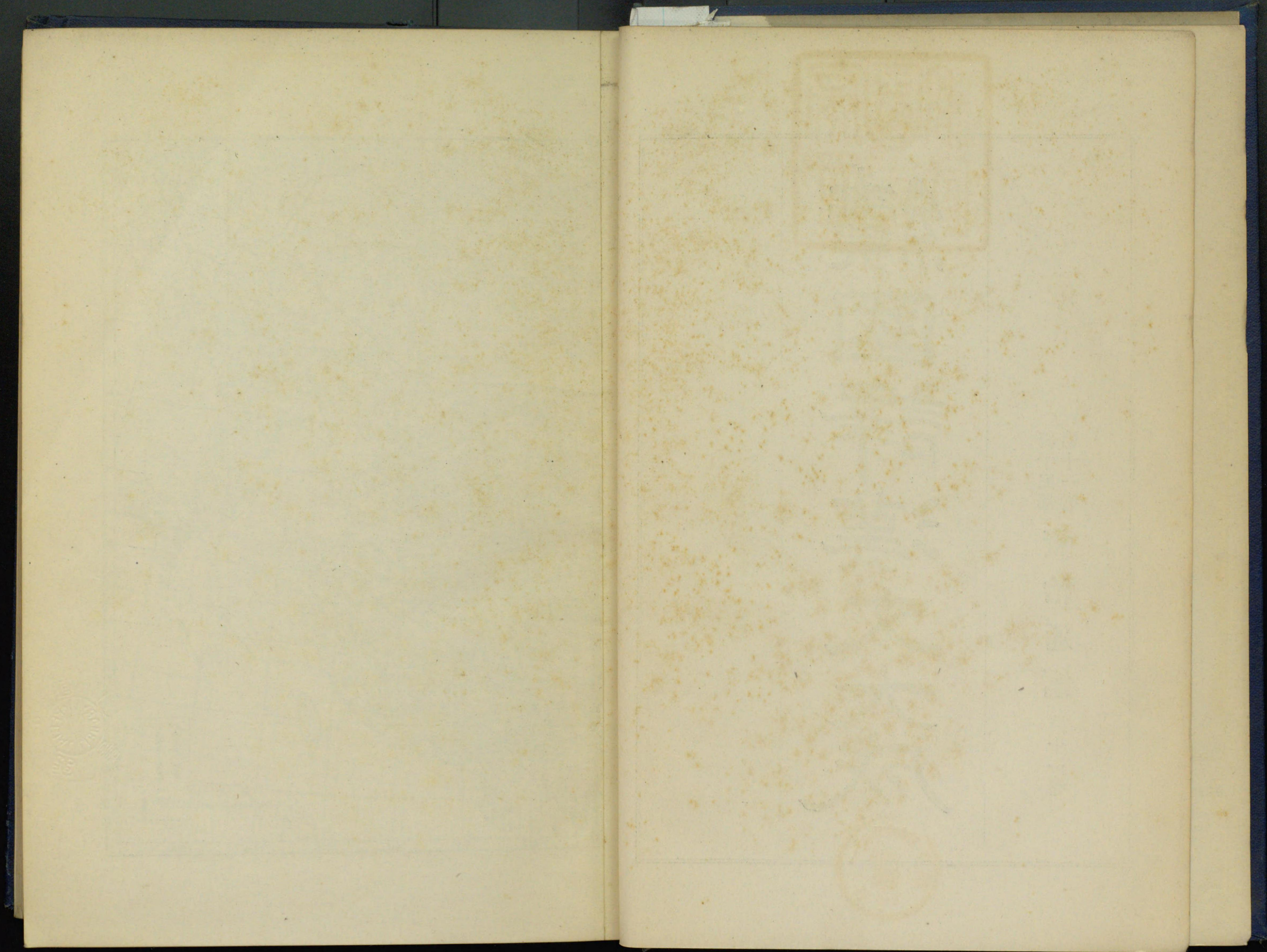


續國譯漢文大成

經子史部
第十一卷

資治通鑑
第十一卷





654
56

目次

國譯資治通鑑第十一……………一七九

卷の第一百八十五 唐紀一
高祖 武德元年……………一

卷の第一百八十六 唐紀二
高祖 武德元年……………三九

卷の第一百八十七 唐紀三
高祖 武德二年……………七三

卷の第一百八十八 唐紀四
高祖 武德二年より四年に至る……………一二

卷の第一百八十九 唐紀五
高祖 武德四年……………一四七

卷の第一百九十 唐紀六
高祖 武德五年より七年に至る……………一八五

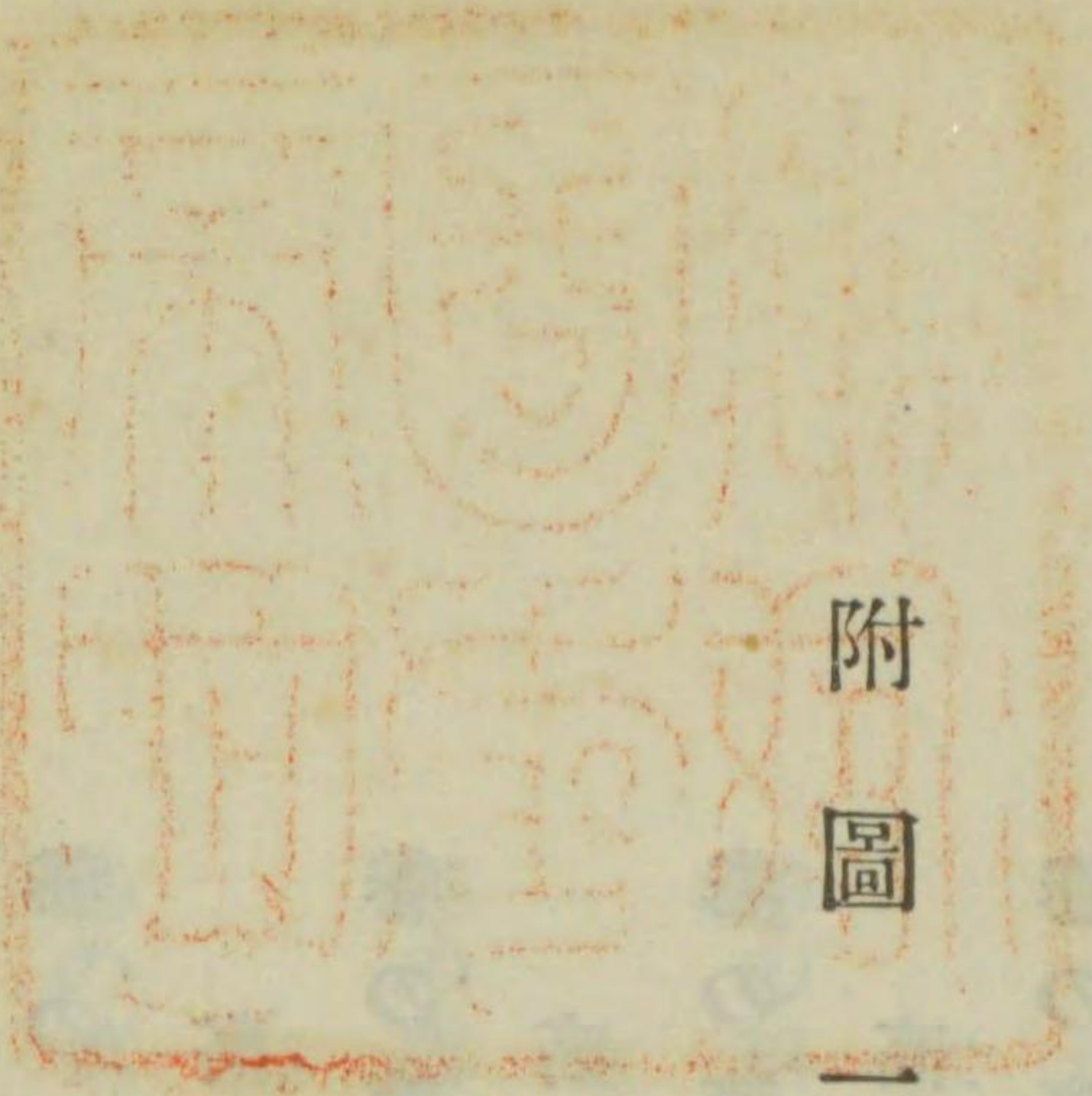
目次……………一

卷の第一百九十一	唐紀七	武德七年より 九年に至る	三三三
高祖			
卷の第一百九十二	唐紀八	武德九年	二六一
高祖			
太宗		貞觀元年より 二年に至る	二七一
卷の第一百九十三	唐紀九	貞觀二年より 五年に至る	三〇一
太宗			
卷の第一百九十四	唐紀十	貞觀六年より 十一年に至る	三三九
太宗			
卷の第一百九十五	唐紀十一	貞觀十一年より 十四年に至る	三七九
太宗			
卷の第一百九十六	唐紀十二	貞觀十五年より 十七年に至る	四一七
太宗			
卷の第一百九十七	唐紀十三	貞觀十七年より 十九年に至る	四五二
太宗			

卷の第一百九十八	唐紀十四	貞觀十九年より 二十二年に至る	四八五
太宗			
卷の第一百九十九	唐紀十五	貞觀二十二年より 二十三年に至る	五二
太宗			
高宗		永徽元年より 六年に至る	五三六
卷の第二百	唐紀十六	永徽六年	五六一
高宗		顯慶元年より 五年に至る	
卷の第二百零一	唐紀十七	龍朔元年より 三年に至る	六〇一
高宗		麟德元年より 二年に至る	
卷の第二百零二	唐紀十八	乾封元年より 二年に至る	六四一
高宗		總章元年より 二年に至る	
卷の第二百零三	唐紀十九	咸亨元年 儀鳳元年より 三年に至る	六八一
高宗		調露元年 永隆元年 開耀元年	六四一
則天后		永淳元年 弘道元年	六八一
高宗		垂拱元年より 二年に至る	六九三

資治通鑑自卷第一百八十五至卷第二百三(原文)……………一八三

附圖一葉(唐代圖)……………卷首



國譯資治通鑑第十一

文學博士 加藤 繁 譯并註
公田連太郎

卷の 一百八十五

唐紀一

高祖神堯大聖光孝皇帝の上



武德元年、春正月丁未朔、隋の恭帝、唐王に詔し、劍履して殿に上り、贊拜するに名いはざらしむ。唐王既に長安に克ち、書を以て諸郡縣に諭す。是に於て東は商洛より、南は巴蜀を盡し、郡縣の長吏及び盜賊の渠帥・氏羌の酋長、争うて子弟を遣はし、入見して降らんと請ふ。有司復書すること、日に百を以て數ふ。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德元年

【一】高祖。諱は淵、字は叔德。本、隴西成紀の人、七世の祖嵩、西涼に王たり、是を涼の武昭王と爲す。曾孫熙に至りて武川に家す。熙の孫虎、周の文帝に從ひ、始めて長安に家す。
【二】武德元年。是年五月、隋の禪を受け、始めて改元す。西紀六一八年。
【三】商洛。縣の名、上洛郡に屬す。今の陝西省關中道商縣の東八十五里に在り。

王世充、既に東都の兵を得、進みて李密を洛北に撃ち、之を敗り、遂に鞏北に屯す。辛酉、世充、諸軍に命じ、各、浮橋を造り、洛を度りて密を撃たしむ。橋先づ成る者先づ進み、前後、一ならず。虎賁郎將王辯、密の外柵を破る。密の營中、驚擾して將に潰えんとす。世充、知らず、角を鳴らし、衆を收む。密因つて敢死士を帥めて之に乗ず。世充大に敗れ、橋を争うて溺死する者萬餘人。王辯、死し、世充僅に自ら免る。洛北の諸軍皆潰ゆ。世充敢て東都に入らず、北して河陽に趣く。是夜、疾風寒雨、軍士、水を涉りて沾濕し、道路に凍死する者、又、萬を以て數ふ。世充獨り千人と與に河陽に至り、自ら獄に繋がれて罪を請ふ。越王侗、使を遣はして之を赦し、召して東都に還らしめ、金帛、美女を賜ひ、以て其意を安んず。世充、亡散を收拾し、復た萬餘人を得、含嘉城に屯し、敢て復た出でず。密、勝に乗じ進みて金墉城に據り、其門堞廬舍を修めて之に居る。鉦鼓の聲、東都に聞ゆ。未だ幾くならずして、兵三十餘萬を擁して北邙に陳し、南のかた上春門に逼る。乙丑、金紫光祿大夫段達、民部尚書韋津、兵を出して之を拒ぐ。達、密の兵の盛なるを望見し、懼れて先づ還る。密、兵を縱ちて之に乗ず。軍遂に潰ゆ。韋津、死す。是に於て假師、柏谷及び河陽の都尉獨孤武都、檢校河内郡丞柳燮、職方郎柳績等、各、所部を擧げて密に降る。竇建德、朱粲、孟海公、徐圓朗等、竝に使を遣はし、表を奉りて勸進す。密の官屬裴仁基等、亦上表し、位號を正

- 【四】鞏北。鞏縣の北。
- 【五】含嘉城。蓋し都城の北に在り。舊唐書王世充傳によれば含嘉倉城なり。
- 【六】職方郎。隋の制、職方郎は兵部尚書に屬す。

さんと請ふ。密曰はく、「東都未だ平がず。此を議す可からず」と。戊辰、唐王、世子建成を以て左元帥と爲し、秦公世民を右元帥と爲し。諸軍十餘萬人を督して東都を救はしむ。東都、食に乏し。太府卿元文都等、城を守りて公糧を食はざる者を募り、散官二品を進む。是に於て、商賈、象を執りて朝する者、勝けて數ふ可からず。二月己卯、唐王、太常卿鄭元璫を遣はし、兵を將ゐて商洛に出で、南陽を徇へしめ、左領軍府の司馬、安陸の馬元規をして、安陸及び荆襄を徇へしむ。李密、房彥藻、鄭頰等を遣はし、東して黎陽に出で、道を分ちて州縣を招慰せしむ。梁郡の太守楊汪を以て、上柱國・宋州總管と爲し。又、手書を以て之に與へて曰はく、「昔、雍丘に在りて、曾て相追捕す。鉤を射、袂を斬ること、敢て庶幾せざらんや」と。汪、使を遣はし、往來して意を通せしむ。密も亦羈縻して之を待つ。彥藻、書を以て竇建德を招き、來りて密に見えしむ。建德、復書し、辭を卑しくし禮を厚くし、託するに羅藝が南侵するを以て

- 【七】象は象笏なり。西魏以來、五品以上は通じて象牙を用ふ。
- 【八】南陽。煬帝、鄧州を改めて南陽郡と爲す。
- 【九】安陸。煬帝、安州を改めて安陸郡と爲す。
- 【一〇】荆州は南郡。襄州は襄陽郡。
- 【一一】梁郡。煬帝、宋州を改めて梁郡と爲す。
- 【一二】昔雍丘云云。事、一百八十三卷大業十二年に見ゆ。
- 【一三】鉤を射る。管仲、齊の桓公を射、帶鉤に中つ。桓公、之を用ひて以て相とす。
- 【一四】袂を斬る。晉の寺人披、公子重耳を伐ち、其袂を斬る。文公、怨みす。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德元年

し、北垂を捍禦せんと請ふ。彥藻還りて、衛州に至る。賊帥王德仁、邀へて之を殺す。德仁、衆數萬有り。林慮山に據り、四出して抄掠し、數州の患を爲す。

三月己酉、齊王元吉を以て鎮北將軍・太原道行軍元帥と爲し、十五郡の諸軍事を都督せしめ、便宜を以て事に從ふを聽す。

隋の煬帝、江都に至り、荒淫益甚だしく、宮中に百餘房を爲り、各供張を盛にし、實つるに美人を以てし、日に一房をして主人と爲らしむ。江都の郡丞趙元楷、酒饌を供するを掌る。帝、蕭后及び幸姫と、

歷就して宴飲し、酒卮、口を離れず。從姫千餘人、亦常に醉ふ。然れども帝、天下の危亂するを見、意亦擾擾として、自ら安んぜず。朝を退けば則ち幅巾短衣し、杖を策きて歩遊し、徧く臺館を歴、夜に非ざれば止めず。

汲汲として景を顧み、唯だ足らざらんことを恐る。帝、自ら占候卜相を曉り、好みて吳語を爲す。嘗て夜置酒し、天文を仰ぎ視、蕭后に謂つて曰はく、『外間、大に人有りて、儂を圖る。然れども儂は、長城公と爲るを失はず、卿は、沈后爲るを失はじ。且く共に樂飲せんのみ』と。因つて滿を引きて沈醉す。又嘗て鏡を引きて自ら照し、顧みて蕭后に謂つて曰はく、『好頭頸、誰か當に之を斫るべき』と。后驚き、故を問ふ。帝笑つて曰はく、

『貴賤苦樂、更迭して之を爲す。亦復た何ぞ傷まん』と。帝、中原の已に亂るを見、北に歸るに心無し。丹楊に都し、江東に保據せんと欲し、羣臣に命じて之を廷議せしむ。内史侍郎虞世基等、皆以て善しと爲す。右候衛大將軍李才、極めて不可を陳べ、『請ふ、車駕、長安に還らん』といふ。世基と忿争して出づ。門下錄事、衡水の李桐客曰はく、『江東卑濕にして、土地險狭なり。内、萬乘を奉じ、外、三軍に給せば、民、命に堪へじ。亦恐らくは終に散亂せんのみ』と。御史、桐客を劾す、『朝政を謗毀す』と。是に於て公卿皆意に阿りて言ふ、『江東の民、幸を望むこと已に久し。陛下、江を過ぎ、撫して之に臨まば、此れ、大禹の事なり』と。乃ち命じて丹楊宮を治めしめ、將に徙りて之に都せんとす。時に江都、糧盡き、從駕の驍果は、多く關中の人なり。久しく客となりて郷里を思ひ、帝が西する意無きを見、多く、叛きて歸らんことを謀る。郎將竇賢、遂に所部を帥りて西に走る。帝、騎を遣はし、追うて之を斬らしむ。而れども亡ぐる者猶ほ止まず。帝、之を思ふ。虎賁郎將扶風の司馬德戡、素より帝に寵有り。帝、驍果を領して東城に屯せしむ。德戡、善き所の虎賁郎將元禮、直閣裴虔通と謀りて曰はく、『今、驍果、人人、亡げんと欲す。我、之を言はんと欲すれども、恐らくは事に先だちて誅を受けん。言は

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德元年

五

【一五】 衛州は隋、汲郡と爲す。今の河南省河北道汲縣。
【一六】 林慮山、魏郡林慮縣（今の河南省河北道林縣）に在り。
【一七】 大業十二年、煬帝、江都に至る。
【一八】 吳人率れ自ら稱して儂と曰ふ。
【一九】 長城公、陳叔寶をいふ。
【二〇】 沈后、叔寶の後沈氏。

【二一】 丹楊、帝、蔣州を改めて丹楊郡と爲す。蓋建康に都せんと欲するなり。
【二二】 隋の制、門下省に、錄事、通事令史各、六人を置く。
【二三】 衡水縣、信都郡に屬す。本、漢の桃縣。開皇十六年、信都の北界、武邑の西界、下博の南界を分ちて置く。
【二四】 禹、南に巡狩して諸侯を會稽に會す。
【二五】 煬帝の制、左右監門府に、直閣各、六人有り、正五品。

すして後に於て事發れば、亦、族滅を免れじ。奈何せん。又聞く、關内淪没し、李孝常、華陰を以て叛けりと。上、其二弟を囚へ、之を殺さんと欲す。我が輩の家屬は皆西に在り。能く此慮無からんや」と。二人皆懼れて曰はく、「然らば則ち計將に安くに出でんとする」と。德載曰はく、「驍果若し亡げなば、之を俱に去らんに若かじ」と。二人皆曰はく、「善し」と。因つて轉た相招引す。内史舍人元敏・虎牙郎將趙行樞・鷹揚郎將孟秉・符璽郎牛方裕・直長許弘仁・薛世良・城門郎唐奉義・醫正張愷・勳侍楊士覽等、皆之と謀を同じくし、日夜相結約し、廣坐に於て明かに叛計を論じ、畏避する所無し。宮人有り蕭后に白して曰はく、「外間、人人、反せんと欲す」と。后曰はく、「汝が之を奏するに任す」と。宮人、帝に言ふ。帝大に怒り、以爲へらく言ふべき所に非ずと。之を斬る。其後、宮人復た后に白す。后曰はく、「天下の事、一朝にして此に至る。救ふ可き者無し。何ぞ之を言ふを用ひん。徒らに帝をして憂へしめんのみ」と。是より、復た言ふ者無し。趙行樞、將作少監宇文智及と素より厚し。楊士覽は智及の甥なり。二人、謀を以て智及に告ぐ。智及大に喜ぶ。德載等、三月望日を以て黨を結びて西に通れんことを期す。智及曰はく、「主上、無道なりと雖も、威令尙ほ行はる。卿等亡げ去らば、正に竇賢の如く死を取らんのみ。今、天、實に

【二】事、前卷前年に見ゆ。
 【三】隋初、門下省は城門・尙食・尙藥・符璽・御府・殿内等の六局を統べ、各、直長あり。煬帝、城門・尙食・尙藥・御府等の五局を以て殿内省に隸し、符璽監を改めて郎と爲す。城門に校尉を置く。後又校尉を改めて城門郎と爲す。又、司醫・醫佐等の官を置く、醫正は即ち司醫なるべし。勳侍は三侍の一なり。

隋を喪し、英雄並び起り、心を同じくして叛く者、已に數萬人なり。因つて大事を行はば、此れ帝王の業なり」と。德載等、之を然りとす。行樞・薛世良・智及の兄右屯衛將軍許公化及を以て主と爲さんと請ふ。結約既に定まり、乃ち化及に告ぐ。化及、性驚怯にして、之を聞き、色を變じ汗を流す。既にして之に従ふ。德載、許弘仁・張愷をして、備身府に入り、識る所の者に告げて云はしむ、「陛下、驍果が叛かんと欲するを聞き、多く毒酒を醗し、享會に因りて盡く之を燒殺し、獨り南人と與に此に留まらんと欲す」と。驍果皆懼れ、轉た相告語し、反謀益々急なり。乙卯、德載悉く驍果の軍吏を召し、諭すに爲す所を以てす。皆曰はく、「唯だ將軍の命のままにせん」と。是日、風霾晝昏し。晡後、德載、御厩の馬を盜み、潜に兵刃を厲ぐ。是夕、元禮・裴虔通、閣下に直し、専ら殿内を主る。唐奉義、城門を閉づるを主る。虔通と相知り、諸門、皆、鍵を下さず。三更に至り、德載、東城に於て兵を集め、數萬人を得、火を擧げて城外と相應す。帝、火を望見し、且つ外の誼罵するを聞き、「何事ぞ」と問ふ。虔通對へて曰はく、「草坊、火を失し、外人共に之を救ふのみ」と。時に内外隔絶し、帝、以て然りと爲す。智及、孟秉と與に、城外に於て千餘人を集め、候衛虎賁馮普樂を劫して、兵を布き衢巷を分守せしむ。燕王儉、變有るを覺り、夜、芳林門の側の水竇を穿ちて入り、玄武門に至り、詭

【二】帝、左右領左右府を改めて左右備身府と爲す。
 【三】鍾。土を雨らすなり。
 【三】城外。江都宮城の外を謂ふ。
 【三】左右候衛は晝夜巡察するを主る、故に之を劫す。普樂は蓋し虎賁郎將なり。
 【三】儉は元德太子昭の子、代王侑の弟。

り奏して曰はく、「臣猝に風に中り、命、俄頃懸る。請ふ面辭するを得ん」と。裴虔通等、以て聞せず、之を執囚す。丙辰、天未だ明けず。德載、虔通に兵を授け、以て諸門の衛士に代らしむ。虔通、門より、數百騎を將ゐて成象殿に至る。宿衛の者、「賊有り」と傳呼す。虔通乃ち還りて諸門を閉ぢ、獨り東門を開き、殿内の宿衛の者を驅り、出でしむ。皆仗を投じて走る。右屯衛將軍獨孤盛、虔通に謂つて曰はく、「何物の兵ぞ。勢太だ異なり」と。虔通曰はく、「事勢已に然り。將軍の事に預らず。將軍、慎みて・動く母れ」と。盛大に罵りて曰はく、「老賊、是れ何物の語ぞ」と。甲を被るに及ばず、左右十餘人と拒ぎ戦ひ、亂兵の殺す所と爲る。盛は、楷の弟なり。千牛獨孤開遠、殿内の兵數百人を帥ゐ、玄覽門に詣り、閤を叩きて請うて曰はく、「兵仗尙ほ全く、猶ほ・賊を破るに堪ふ。陛下若し出でて戰に臨まば、人情自ら定まらん。然らずんば禍今至らん」と。竟に・應ふる者無し。軍士稍散ず。賊、開遠を執ふ。義として之を釋す。是より先、帝、驍健なる官奴數百人を選びて玄武門に置き、之を給使と謂ひ、以て非常に備ふ。待遇優厚にして、宮人を以て之に賜ふに至る。司宮魏氏、帝の信する所たり。化及等、之に結び、内應を爲さしむ。是日、魏氏、詔を矯め、悉く・給使が外に出づるを聽す。倉猝の際、制するに一人の在る者無し。德載等兵を引き、玄武門より入る。帝、亂を聞き、服を易へて西閤に逃る。虔通、元禮と與に、兵を進めて左閤を排す。魏氏、之を啓く。遂に永巷に入る。「陛下は安に在るか」と問ふ。美人有り出でて之を指さす。校尉令狐行達、刀を抜きて直に進む。帝、窻扉に映じ、行達に謂つて曰はく、「汝、我を殺さんと欲するか」と。對へて曰はく、「臣、敢てせず。但だ陛下を奉じて西に還らんと欲するのみ」と。因つて帝を扶けて閤を下る。虔通は、本、帝が晉王たりし時の親信の左右なり。帝、之を見、謂つて曰はく、「卿は我が故人に非ずや。何を恨みて反する」と。對へて曰はく、「臣、敢て反せず。但だ將士、歸らんことを思ふ。陛下を奉じて京師に還らんと欲するのみ」と。帝曰はく、「朕方に・歸らんと欲す。正に・上江の米船未だ至らざるが爲めなり。今、汝と與に歸らんのみ」と。虔通因つて兵を勅して之を守り、且に至る。孟秉、甲騎を以て化及を迎ふ。化及・戰栗して、言ふ能はず。人、來りて之に調する者有れば、但だ首を俛れて鞍に據り、罪過と稱す。化及、城門に至る。德載迎へ調し、引きて朝堂に入れ、號して丞相と爲す。裴虔通、帝に謂つて曰はく、「百官悉く朝堂に在り。陛下須く親ら出でて慰勞すべし」と。其從騎を進め、帝に逼りて之に乗らしむ。帝、其鞍勒の弊れたるを嫌ひ、更に・新しき者に易へ、乃ちこれに乗る。虔通、轡を執り、刀を挟みて宮門を出づ。賊徒喜び諜ぎて地を動かす。化及・揚言して曰はく、「何ぞ此物を持して出づるを用ひん。丞かに還りて・手を與へよ」と。帝、「世基は何に在るか」

【三】 獨孤楷は一百七十九卷文帝の仁壽二年に見ゆ。
 【四】 煬帝の制、千牛十六人、千牛刀を執るを掌り、左右府に屬領す。開遠は獨孤后の兄の子。
 【五】 司宮。蓋し尙宮の職。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德元年

と問ふ。賊黨馬文學曰はく、「已に首を梟けたり」と。是に於て帝を引きて還りて寢殿に至る。虔通・徳戡等、白刃を抜きて侍立す。帝・歎じて曰はく、「我何の罪ありて此に至れる」と。文學曰はく、「陛下、宗廟を違棄し、巡遊して息まず、外は征討を勤め、内は奢淫を極め、丁壯をして矢刃に盡き、女弱をして溝壑に填せしめ、四民、業を喪ひ、盜賊蠡起し、専ら佞諛に任じ、非を飾り諫めを拒む。何ぞ罪無しと謂ふや」と。帝曰はく、「我實に百姓に負けり。爾を輩に至りては、榮祿兼ね極まれり。何ぞ乃ち是の如くなる。今日の事、孰か首と爲る」と。徳戡曰はく、「溥天、同じく怨む。何ぞ一人に止まらん」と。化及、又、封徳彝をして帝の罪を數へしむ。帝曰はく、「卿は乃ち士人なり。何爲れぞ亦爾」と。徳彝・赧然として退く。帝の愛子趙王杲、年十二、帝の側に在り、號慟して・已まず。虔通、之を斬る。血、御服に濺ぐ。賊、帝を弑せんと欲す。帝曰はく、「天子の死するには、自ら法有り。何ぞ加ふるに鋒刃を以てするを得ん。鳩酒を取り來れ」と。文學等、許さず。令狐行達をして、帝を頓して・坐せしむ。帝自ら練巾を解きて行達に授く。縊りて之を殺す。初め帝、自ら・必ず難に及ばんことを知り、常に覺を以て毒藥を貯へて自ら隨へ、幸する所の諸姬に謂つて曰はく、「若し賊至らば、汝が曹當に先づ之を飲むべし。然る後我飲まん」と。亂に及びて、顧みて藥を索む。左右皆逃れ散じ、竟に・得る能はず。蕭后、宮人と與に、漆牀板を撤して小棺を爲り、趙王杲と、同じく西院の流珠堂に殯す。帝、巡幸する毎に、常に蜀王秀を以て自ら隨へ、驍果營に囚ふ。化及、帝を弑し、

秀を奉じて之を立てんと欲す。衆議、可かず。乃ち秀及び其七男を殺す。又、齊王暕及び其二子并せて燕王儉を殺す。隋氏の宗室・外戚、少長と無く皆死す。唯だ 秦王浩、素より智及と往來し、且つ計を以て之を全くす。齊王暕、素より 愛を帝に失ひ、恒に相猜忌す。帝、亂を聞き、蕭后を顧みて曰はく、「阿孩に非ざるを得んや」と。化及、人をして第に就きて暕を誅せしむ。暕、帝之を收めしむと謂ひて曰はく、「詔使且く兒を緩くせよ。兒、國家に負かず」と。賊曳きて街中に至りて之を斬る。暕、竟に・殺す者の誰たるかを知らず。父子、死に至るまで、相明かにせず。又、内史侍郎虞世基・御史大夫裴蘊・左翊衛大將軍來護兒・祕書監袁充・右翊衛將軍宇文文協・千牛宇文晶・梁公蕭銍等及び其子を殺す。銍は 琮の弟の子なり。難の將に作らんとするや、江陽の長 張惠紹、馳せて裴蘊に告ぐ。蘊、惠紹と謀り、詔を矯め、郭下の兵を發し、化及等を收め、門を叩きて帝を援けんとす。議定まり、虞世基に報せしむ。世基、反を告ぐる者の實ならざるを疑ひ、抑へて・許さず。須臾にして難作る。蘊・歎じて曰はく、「謀、播郎に及び、竟に人の事を誤る」と。虞世基の宗人假、世基の子符璽郎熙に謂つて曰はく、「事勢已に然り。吾將に卿を濟うて南に度らんとす。同じく死すとも何の益あらん」と。熙曰はく、「父を棄て君に背き、生を何地に求めん。尊の懷に

- 【四一】 秦王浩。秦王俊の子。
- 【四二】 暕が愛を失へる事。一百八十一卷大業四年に始まる。
- 【四三】 阿孩。暕の小子。
- 【四四】 蕭琮は故の梁主琮なり。
- 【四五】 江陽縣は江都郡を帶ぶ。舊の廣陵なり。大業の初、名を更む。
- 【四六】 播郎。虞世基の少字。
- 【四七】 尊。汲を謂ふ。

感ず。此より【四八】「決せん」と。世基の弟世南、世基を抱きて號泣し、代らんと請ふ。化及、許さず。黃門侍郎裴矩、必ず將に亂有らんとするを知り、厮役と雖も、皆之を厚遇し、又、策を建て、驍果の爲めに婦を娶る。亂作るに及び、賊皆曰はく、「裴黃門の罪に非ず」と。既にして化及至る。矩迎へて馬首に拜す。故に免るを得たり。化及、蘇威が朝政に預らざるを以て、亦之を免す。威、名位素より重く、往きて化及に參す。化及、衆を集めて之を見、曲に殊禮を加ふ。百官悉く朝堂に詣りて賀す。給事郎許善心、獨り至らず。許弘仁馳せて之に告げて曰はく、「天子已に崩じ、宇文將軍、政を攝し、闔朝の文武咸集まる。天道人事、自ら代終有り。何ぞ叔に預りて、低回すること此の若き」と。善心怒り、肯て行かず。弘仁反り走りて馬に上り、泣きて去る。化及、人を遣はし家に就きて擒へて朝堂に至らしむ。既にして之を釋す。善心、舞蹈せずして出づ。化及怒りて曰はく、「此人大に氣を負ふ」と。復た命じて擒へ還りて之を殺す。其母范氏、年九十二。柩を撫して哭せずして曰はく、「能く國難に死せり。吾、子有り」と。困臥して食はず、十餘日にして卒す。唐王が關に入るや、【四九】張季珣の弟仲琰、上洛の令たり。吏民を帥ゐて拒ぎ守る。部下、之を殺して以て降る。宇文化及の亂に、仲琰の弟琮、【五〇】千牛左右たり。化及、之を殺す。兄弟三人、皆、國難に死す。時人、之に愧づ。化及、自ら大丞相と稱し、百揆を

【四八】 決。訣なり。

【四九】 張季珣が節に死する事、前卷前年に見ゆ。

【五〇】 上洛縣は、隋、上洛郡を帶ぶ。今の陝西省關中道商縣。

【五一】 隋の制、左右府に千牛左右。司射左右有り。

總べ、皇后の令を以て秦王浩を立てて帝と爲し、別宮に居き、詔を發し敕書を畫せしむるのみ。仍ほ兵を以て之を監守す。化及、弟智及を以て左僕射と爲し、士及を内史令と爲し、裴矩を右僕射と爲す。

乙卯、秦公世民を徙して趙公と爲す。

戊辰、隋の恭帝、詔して、十郡を以て唐國に益し、仍ほ唐王を以て相國と爲し、百揆を總べしめ、唐國に丞相以下の官を置き、又、九錫を加ふ。王、僚屬に謂つて曰はく、「此れ詔諛の者の爲す所なるのみ。孤、大政を乗り、而して自ら寵錫を加ふるは、可ならんや。必ず若し魏晉の迹に循はば、彼は皆繁文僞飾にして、天を欺き人を罔ふ。其實を考ふるに、五霸に及ばず。而して名を求むること、三王に過ぎんと欲す。此れ孤が常に非笑する所にして、竊に亦之を恥づ」と。或るひと曰はく、「歴代の行ふ所、亦何ぞ廢す可けんや」と。王曰はく、「堯舜湯武は、各其時に因り、取與、道を異にし、皆、天に應じ人に順ふ。未だ夏商の末、必ず唐虞の禪に效ふを聞かざるなり。若し少帝をして知る有らしめば、必ず肯て爲さじ。若し其れ知る無くば、孤自ら尊びて節讓するは、平生の素心の爲さざる所なり」と。但だ丞相を改めて相國府と爲し、其九錫の殊禮は、皆、之を有司に歸す。宇文化及、左武衛將軍陳稜を以て江都の太守と爲し、留事を綜領せしむ。壬申、内外に令して戒嚴せしめ、「長安に還らんと欲す」と云ふ。皇后、六宮は、皆、舊式に依りて御營を爲り、營前に別に帳

を立て、化及、事を其中に視、仗衛部伍、皆、乘輿に擬す。江都の人の舟楫を奪ひ、【五三】彭城の水路を取りて西に歸る。【五四】折衝郎將沈光が驍勇なるを以て、給使を將ゐて、【五五】禁内に營せしむ。行きて顯福宮に至る。【五六】虎賁郎將麥孟才・虎牙郎錢傑、光と謀りて曰はく、「吾が儕、先帝の厚恩を受く。今、首を俛れ讎に事へ、其驅帥を受く。何の面目ありて世間に視息せんや。吾、必ず之を殺さんと欲す。死すとも恨むる所無し」と。光泣きて曰はく、「是れ將軍に望む所なり」と。【五七】孟才乃ち、恩舊を糾合し、將ゐる所の數千人を帥ゐ、期するに晨に起きて將に發せんとする時化及を襲ふを以てす。語洩る。化及、夜、腹心と與に、走りて營外に出で、人を留めて司馬德戡等に告げしめ、之を討たしむ。光、營内の誼しきを聞き、事の覺るるを知り、即ち化及の營を襲ふ。空しくして、獲る所無し。内史侍郎元敏に値ふ。數めて之を斬る。德戡、兵を引ゐ、入りて之を圍み、光を殺す。其麾下數百人、皆鬪ひて死し、一も降る者無し。孟才も亦死す。孟才は、鐵杖の子なり。

【五八】武康の沈法興、世、郡の著姓たり。宗族數千家。法興、吳興の太守たり。宇文化及が弑逆せるを聞き、兵を擧げ、化及を討つを以て名と爲す。【五九】

【五三】 彭城。煬帝、徐州を改めて彭城郡と爲す。
 【五四】 煬帝、折衝郎將を置く、正四品。驍果を領するを掌り、領左右府に屬す。
 【五五】 既に御營を立て、御營の内を以て禁内と爲す。
 【五六】 煬帝の制、十二衛府に、衛毎に護軍四人を置き、將軍に副貳するを掌る。尋ぎて護軍を改めて虎賁郎將と爲し、而して虎牙郎將を置きてこれに副とす。虎牙郎將の下に當に將の字有るべし。
 【五七】 恩舊。之と舊恩有る者。
 【五八】 鐵杖。度遼の役に死す。
 【五九】 武康縣、餘杭郡に屬す。
 【六〇】 烏程縣、吳興郡を帶ぶ。時に沈法興、東陽の賊樓世幹を討つ。義寧二年、江都亂る

烏程に至る比ほひ、精卒六萬を得、遂に餘杭・毗陵・丹楊を攻め、皆之を下し、江表の十餘郡に據り、自ら江南道大總管と稱し、制を承けて百官を置く。陳國公竇抗は唐王の妃の兄なり。煬帝、長城を、【六一】靈武に、【六二】行らしむ。唐王が關中を定めしを聞き、癸酉、靈武、【六三】鹽川等數郡を帥ゐて來り降る。夏四月、【六四】稽胡、【六五】富平に寇す。將軍王師仁、擊ちて之を破る。又、五萬餘人、【六六】宜春に寇す。相國府の諮議參軍竇軌、兵を將ゐて之を討ち。【六七】黃欽山に戰ふ。稽胡、高きに乗じて火を縱つ。官軍小しく却く。軌、其部將十四人を斬り、隊中の小枝を抜きて之に代らしめ、兵を勸して復た戰ふ。軌、自ら數百騎を將ゐて、軍後に居り、之に令して曰はく、「鼓聲を聞き、進まざる有る者は、後より之を斬らん」と。既にして之に鼓す。將士、先を爭ひて敵に赴く。稽胡、之を射れども、止むる能はず。遂に大に之を破り、男女二萬口を虜にす。

世子建成等、東都に至り、芳華苑に軍す。東都、門を閉ぢて、出でず。人を遣はして招諭すれども應ぜず。李密、軍を出して之を爭ふ。小しく戰ひて各、引き去る。城中、内應を爲さんと欲する者多し。趙公世民曰はく、「吾新に關中を定め、根本未だ固からず。【六八】（懸軍遠、東

るや、法興、兵を擧げ、宇文化及を討つを名とし、三月、東陽を發し、行くゆく兵を收めて江都に趣き、餘杭を下し、北して烏程に至る。
 【六一】 靈武。煬帝、靈州を改めて靈武郡と爲す。
 【六二】 行。循行なり。
 【六三】 鹽川。煬帝、鹽州を改めて鹽川郡と爲す。
 【六四】 稽胡。一名、步落稽。蓋し匈奴の別種、離石より以西、安定以東方七八百里。
 【六五】 富平縣、京兆郡に屬す。
 【六六】 宜春。當に宜春に作るべし。宜春縣は京兆郡に屬す。
 【六七】 黃欽山。水經注に、清水、雲陽縣の石門山に出で、東南流して黃欽山の西を逕とす。

都を得と雖も、守る能はざらん」と。遂に受けず。戊寅、軍を引きて還る。世民曰はく、「城中、吾が退くを見れば、必ず來りて追躡せん」と。乃ち三伏を〔三七〕三王陵に設け、以て之を待つ。段達果して萬餘人を將ゐて之を追ふ。伏に遇て敗る。世民、北ぐるを逐うて〔三八〕其城下に抵り、四千餘級を斬り、遂に〔三九〕新安・宜陽の二郡を置き、行軍總管史萬寶・盛彥師をして宜陽に鎮せしめ、呂紹宗・任瓌をして兵を將ゐて新安に鎮せしめて還る。

初め〔四〇〕五原の通守 櫟陽の張長遜、中原大に亂るるを以て、郡を擧げて突厥に附く。突厥、以て割利特勒と爲す。郝瑗、薛舉に説く、「梁師都及び突厥と兵を連ね、以て長安を取らん」と。擧、之に従ふ。時に啓民可汗の子咄苾、莫賀咄設と號し、牙を建て五原の北に直る。擧、使を遣はし、莫賀咄設と、入寇せんことを謀る。莫賀咄設、之を許す。唐王、〔四一〕都水監宇文歆をして、莫賀咄設に賂し、且つ爲めに利害を陳べ、其の兵を出すを止めしめ、又、莫賀咄設に説き、張長遜を遣はして入朝せしめ、五原の地を以て之を中國に歸さしむ。莫賀咄設、竝に之に従ふ。己卯、〔四二〕武都・宕渠・五原等の郡皆降る。王即ち長遜を以て五原の太守と爲す。長遜、又、詐りて詔書を爲り、莫賀咄設に與へ、其謀を知るを示す。莫賀

咄設、乃ち擧・師都等を拒み、其使を納れず。

戊戌、世子建成等、長安に還る。

東都の號令、四門を出でず、人、固志無し。朝議郎段世弘等、〔四三〕西師に應せんと謀る。會、西師已に還る。乃ち人を遣はして李密を招かしめ、己亥の夜を以て之を納れんと期す。事覺はる。越王、王世充に命じ、討ちて之を誅せしむ。密、城中已に定まるを聞き、乃ち還る。

宇文化及、衆十餘萬を擁して六宮を據有し、自ら奉養すること、一に煬帝の如く、毎に帳中に於て南面して坐す。人、事を白す者有れば、嘿然として對へず。〔四四〕下牙方に啓狀を取り、唐奉義・牛方裕・薛世良・張愷等と之を參決す。少主浩を以て尙書省に付し、衛士十餘人をして之を守らしめ、〔四五〕令史を遣はし、其畫敕を取らしむ。百官、復た朝參せず。彭城に至り、水路、通せず。復た民の車牛を奪ひて二千兩を得、竝に宮人・珍寶を載せ、

其戈甲戎器は、悉く軍士をして之を負はしむ。道遠く疲劇し、軍士始めて怨む。司馬德戡、竊に趙行樞に謂つて曰はく、「君大に我を謬誤せり。當今、亂を撥ふには、必ず英賢に籍る。化及は庸暗にして、羣小、側に在り。事將に必ず敗れんとす。之を若何せん」と。行樞曰はく、「我等に在るのみ。」

〔三七〕 三王陵。河南縣の西南、柏亭の東北に在り。三王とは或は周の景王・悼王・定王を言ふならん。

〔三八〕 城下。東都城下なり。

〔三九〕 新安。後周、中州及び東垣縣を置く。隋、州を廢して縣名を改む。宜陽。後魏、郡を置く。隋の開皇の初め、廢して縣と爲す。新安と皆、河南郡に屬す。今竝に郡を置く。

〔四〇〕 五原。煬帝、豐州を改めて五原郡と爲す。

〔四一〕 櫟陽縣は京兆郡に屬す。舊、萬年縣、武德元年、名を改む。

〔四三〕 開皇の初、都水臺を立て、使者を置く。大業中、改めて都水監と爲し、使者を改めて監と爲す。

〔四四〕 武都。漢の郡、西魏、武州を置く。煬帝復た郡と爲す。

〔四五〕 宕渠。漢の縣、梁、渠州を置く。煬帝改めて宕渠郡と爲す。

〔四六〕 西師。建成等の師をいふなり。

〔四七〕 下牙。調者の類なるべし。

〔四八〕 隋の門下省に録事・通事令史各十六人有り。

〔四九〕 行樞、建言して、化及を以て主と爲す。

之を廢すること何ぞ難からん」と。初め化及既に政を得、司馬德戡に爵溫國公を賜ひ、光祿大夫を加ふ。其の専ら驍果を統ぶるを以て、心に之を忌む。後數日、化及、諸將を署して士卒を分配し、德戡を以て禮部尙書と爲す。外は美遷を示し、實は其兵柄を奪ふなり。德戡、是に由りて憤怨し、獲る所の賞賜、皆以て智及に賂ふ。智及、之が爲めに言ふ。乃ち之をして後軍萬餘人を將ゐて以て從はしむ。是に於て、德戡、行樞、諸將李本尹、正卿宇文導師等と、後軍を以て襲うて化及を殺し、更に德戡を立てて主と爲さんと謀る。人を遣はして孟海公に詣らしめ、結びて外助と爲さんとす。遷延して未だ發せず。海公の報を待つ。許弘仁、張愷、之を知り、以て化及に告ぐ。化及、宇文士及を遣はし、陽りて遊獵を爲し、後軍に至る。德戡、事の露はるるを知らず、營を出でて迎へ謁す。因つて之を執ふ。化及、之を讓めて曰はく、「公と力を戮せ、共に海内を定め、萬死に出で、今始めて事成る。方に、共に富貴を守らんことを願ふ。公又何ぞ反するや」と。德戡曰はく、「本、昏主を殺ししは、其淫虐に苦しみてなり。足下を推立せるに、又之よりも甚だし。物情に逼られ、已むを得ざるなり」と。化及、之を縊殺し、并せて其支黨十餘人を殺す。孟海公、化及の彊きを畏れ、衆を帥ゐ、牛酒を具へて之を迎ふ。李密、鞏洛に據り、以て化及を拒ぐ。化及、西するを得ず。兵を引きて東都に向ふ。東都の通守王軌、城を以て之に降る。辛丑、李密の將、井陘の王君廓、衆を帥ゐて來り降る。君廓、本、羣盜にして、

【七九】孟海公は曹州に據る。
【八〇】鞏洛。洛水、鞏に至りて河に入る、故に鞏水と曰ふ。
【八一】井陘縣は恒山郡に屬す。

衆數千人有り。賊帥韋寶、鄧豹と、合して虞郷に軍す。唐王と李密と、俱に使を遣はして之を招く。寶、豹、唐王に從はんと欲す。君廓僞りて之と同じ、其の備無きに乗じ、襲ひ撃ちて之を破り、其輜重を奪ひ、李密に奔る。密、之を禮せず。復た來り降る。上柱國に拜し、河内の太守を假す。

【八二】虞郷縣は今の山西省河東道虞郷縣。河東郡に屬す。
【八三】南郡。煬帝、荊州を改めて南郡と爲す。
【八四】江陵は郡を帶ぶ。
【八五】欽州。煬帝、欽州を改めて寧越郡と爲す。長眞が刺史たるは、文帝の命する所なり。
【八六】鬱林郡は梁の定州なり。後改めて南定州と爲す。陳を平げて改めて尹州と爲す。大業の初、改めて鬱州と爲し、尋ぎて改めて郡と爲す。又、

桂州を改めて始安郡と爲す。
【七】馮盎、隋の仁壽の初、潮成の叛獠を平げ、漢陽の太守に拜す。隋亡び、奔りて嶺表に還り、諸郡を據有す。
【八八】蒼梧郡に、梁、成州を置く。開皇の初、改めて封州と爲す。煬帝改めて郡と爲す。高州を改めて高涼郡と爲し、崖州を珠崖郡と爲す。番禺は南海郡治。
【八九】交趾。煬帝、交州を改めて交趾郡と爲す。

蕭銑、皇帝の位に即き、百官を置き、梁室の故事に準ず。其從父琮に諡して孝靖皇帝と爲し、祖巖を河間の忠烈王と爲し、父璿を文憲王と爲し、董景珍等功臣七人を封じて、皆王と爲す。宋王楊道生を遣はし、南郡を撃ちて之を下し、徙りて江陵に都し、園廟を修復す。岑文本を引ききて中書侍郎と爲し、文翰を典らしめ、委ぬるに機密を以てす。又、魯王張繡をして嶺南を徇へしむ。隋の將張鎮周、王仁壽等、之を拒ぐ。既にして煬帝が弒に遇ひしを聞き、皆、銑に降る。欽州の刺史寧長眞、亦、鬱林、始安の地を以て銑に附く。漢陽の太守馮盎、蒼梧、高涼、珠崖、番禺の地を以て、林士弘に附く。銑、士弘、各人を遣はし、交趾の太守丘和を招く。和、從はず。

銑、寧長眞を遣はし、嶺南の兵を帥ゐ、海道より和を攻めしむ。和、出でて之を迎へんと欲す。(五〇) 司法書佐高士廉、和に説きて曰はく、『長眞は、兵數、多しと雖も、懸軍遠く至り、久しきを持する能はじ。城中の勝兵、以て之に當るに足る。奈何ぞ風を望みて制を人に受けんや』と。和、之に従ふ。士廉を以て軍司馬と爲し、水陸諸軍を將ゐて逆へ撃たしめ、之を破る。長眞、僅に身を以て免る。盡く其衆を俘にす。既にして驍果有り、江都より至る。煬帝の凶問を得、亦、郡を以て銑に附く。士廉は、勸の子なり。始安郡丞李襲志は、遷哲の孫なり。隋の末、家財を散じて士を募り、三千人を得、以て郡城に保す。蕭銑、林士弘、曹武徹、迭に來りて之を攻む。皆、克たず。煬帝が弑に遇ひしを聞き、吏民を帥ゐて臨すること三日。或るひと襲志に説きて曰はく、『公は、中州の貴族にして、久しく鄙郡に臨み、華夷悦服す。今、隋室、主無く、海内鼎沸す。公の威恵を以て嶺表に號令せば、尉佗の業、坐して致す可からん』と。襲志怒りて曰はく、『吾世、忠貞を繼ぐ。今、江都、覆ると雖も、宗社尙ほ存す。尉佗は狂僭なり。何ぞ慕ふに足らんや』と。説者を斬らんと欲す。衆乃ち敢て言はず。堅く守ること二年、外、聲援無く、城陥り、銑の虜にする所と爲る。銑、以て工部尙書と爲し、桂州總管を檢校せしむ、是に於て、東は、九江より、西は三峽に抵り、南は交趾を盡し、北は、漢川に距るまで、銑、皆、之を有ち、勝兵四十餘萬。

煬帝の凶問、長安に至る。唐王、之を哭し慟して曰はく、『吾、北面して人に事へ、道を失へども救ふ能はず。敢て哀を忘れんや』と。

五月、山南撫慰使馬元規、朱粲を、冠軍に撃ち、之を破る。

王徳仁、既に、房彦藻を殺す。李密、徐世勣を遣はして之を討つ。徳仁、兵敗る。甲寅、武安の通守袁子幹と、皆來り降る。詔して、徳仁を以て、鄴郡の太守と爲す。

戊午、(一〇) 隋の恭帝、位を唐に禪り、代邸に遜居す。甲子、唐王、皇帝の位に、太極殿に即き、刑部尙書蕭造を遣はして天に南郊に告げしめ、大赦し、(一一) 改元す。(一二) 郡を罷めて州を置き、太守を以て刺史と爲す。五運を推して土徳と爲し、色は黄を尙ぶ。

隋の煬帝の凶問、東都に至る。戊辰、留守官、越王を奉じて皇帝の位に即かしむ。大赦し、皇泰と改元す。是時、朝堂に於て旨を宣し、(一三) 時に金革に鍾るを以て、公私皆即日大祥す。大行を追諡して明皇帝と曰ひ、

【九五】煬帝、江州を改めて九江郡と爲す。

【九六】この漢川は漢水以南の地を謂ふ。漢中の漢川郡に非ず。

【九七】冠軍縣は南陽郡に屬す。

【九八】事、上の二月に見ゆ。

【九九】武安、煬帝、州を改めて武安郡と爲す。

【一〇〇】鄴郡、相州を改めて魏郡と爲す。此れ又、魏郡を改めて鄴郡と爲すなり。

【一〇一】隋、開皇元年、禪を受け、三主三十八年にして亡ぶ。

【一〇二】太極殿、隋の大興殿なり。唐既に禪を受け、改めて太極殿と爲す。

【一〇三】武徳と改元す。

【一〇四】大業二年、州を改めて郡と爲す。

【一〇五】越王侗は元徳太子昭の子なり。

【一〇六】鍾、當るなり。

廟を世祖と號す。元德太子を追尊して成皇帝と曰ひ、廟を世宗と號す。母劉良娣を尊びて皇太后と爲す。段達を以て〔一七〕納言・陳國公と爲し、王世充を納言・鄭國公と爲し、元文都を内史令・魯國公と爲し、皇甫無逸を兵部尚書・杞國公と爲す。又、盧楚を以て〔一八〕内史令と爲し、郭文懿を内史侍郎と爲し、趙長文を黃門侍郎と爲し、共に朝政を掌らしむ。時人、七貴と號す。皇泰主、眉目、畫けるが如く、溫厚仁愛にして、風格儼然たり。

辛未、突厥の始畢可汗、〔一九〕骨咄祿特勤を遣はして來らしむ。之を太極殿に宴し、〔二〇〕九部の樂を奏す。時に中國の人の亂を避くる者、多く突厥に入る。突厥疆盛にして、東は契丹・室韋より、西は吐谷渾・高昌を盡し、諸國皆之に臣たり。控弦百餘萬。帝、初めて起るとき其兵馬を資せしを以て、前後餉遺すること、勝げて紀す可からず。突厥、功を恃みて驕倨なり。使者を遣はして長安に至る毎に、多く暴横なり。帝、之を優容す。

壬申、裴寂・劉文靜等に命じて、律令を修定せしめ、國子・太學・四門生合はせて三百餘員を置き、郡縣の學にも亦各生員を置く。
六月甲戌朔、趙公世民を以て尚書令と爲し、〔二一〕黃臺公瑗を刑部侍郎と爲し、相國府の長史裴寂を右

【一七】隋の制、門下省に納言二人あり。
【一八】隋初、内史省に監令各一人を置く。尋ぎて監を廢し、令二人を置く。
【一九】突厥の官、子弟を特勤と曰ふ。
【二〇】九部の樂。杜佑曰はく、武徳の初め、隋の舊制に因り、九部の樂あり、一宴樂、二清商、三西涼、四扶南、五高麗、六龜茲、七安國、八疎勒、九康國なり。
【二一】黃臺公。縣公。東魏、黃臺縣を潁川に置く。大業の初め廢す。

僕射と爲し、政事を知らしめ、司馬劉文靜を納言司錄と爲し、竇威を内史令と爲し、李綱を禮部尚書と爲し、選事を參掌せしめ、掾殷開山を吏部侍郎と爲し、屬趙慈景を兵部侍郎と爲し、韋義節を禮部侍郎と爲し、主簿陳叔達、〔二二〕博陵の崔民幹を、竝に黃門侍郎と爲し、唐儉を内史侍郎・錄事參軍と爲し、裴晞を〔二三〕尚書左丞と爲す。隋の民部尚書蕭瑀を以て内史令と爲し、禮部尚書竇璡を〔二四〕戸部尚書と爲し、蔣公屈突通を兵部尚書と爲し、長安の令獨孤懷恩を工部尚書と爲す。瑗は上の從子、懷恩は舅の子なり。上、裴寂を待つこと特に厚く、羣臣、與に比を爲す無し。服玩を賞賜すること、勝げて紀す可からず。〔二五〕尚書奉御に命じ、日に御膳を以て寂に賜はしむ。朝を視るに必ず引きて與に坐を同じくし、閣に入れば則ち之を臥内に延き、言、從はざる無く、稱して〔二六〕裴監と爲して名いはず。蕭瑀に委ぬるに庶政を以てし、事、大小と無く、關掌せざるは無し。瑀も亦孜孜として力を盡し、違へるを繩し過てるを擧ぐ。人皆之を憚る。之を毀る者衆けれども、終に自ら理せず。上嘗て敕有り、而して〔二七〕内史、時に宣行せず。上、其の遲きを責む。瑀對へて曰はく、『大業の世、内史、敕を宣するに、或は前後相違し、有司、從ふ所を知らず。其の易きこと前に在り、

其の難きこと後に在り。臣、二省に在ること日久しく、備に其事を見る。今、王業經始し、事、安危に繫る。遠方、疑有らば、恐らくは機會を失はん。故に臣、一敕を受くる毎に、必ず勘審し、前敕と違はざらしめ、始めて敢て宣行す。稽緩の愆は、實に此に由る」と。上曰はく、「卿、心を用ふる」と是の如し。吾復た何ぞ憂へん」と。

初め帝、馬元規を遣はし、山南を慰撫せしむ。南陽の郡丞河東の呂子臧、獨り郡に據りて・從はず。元規、使數輩を遣はして之を諭さしむ。皆、子臧の殺す所と爲る。煬帝が弒に遇ふに及び、子臧、喪を發し禮を成し、然る後、降らんと請ふ。鄧州の刺史に拜し、南郡公に封ず。

大業の律令を廢し、新格を頒つ。上、事を見る毎に、自ら名を稱し、貴臣を引き、榻を同じくして坐す。劉文靜諫めて曰はく、「昔、王導言へる有り、(三)若し太陽俯して萬物に同じくせば、羣生をして何を以て照を仰がしめん」と。今、貴賤、位を失ふは、

常久の道に非ず」と。上曰はく、「昔、漢の光武、嚴子陵と共に寢ね、子陵、足を帝の腹に加へき。今、諸公は皆名徳舊齒、平生の親友なり。宿昔の歡、何ぞ忘る可けんや。公、以て嫌と爲す勿れ」と。戊寅、隋の安陽の令呂珉、相州を以て來り降る。以て相州の刺史と爲す。

【二八】瑀、隋朝に在りて内史侍郎たり、故に然云ふ。
【二九】是年二月、馬元規を遣はす。
【三〇】南陽郡を復た鄧州と爲す。今の湖北省襄陽道襄陽縣の北。
【三一】事、四十卷晉の元帝太興元年に見ゆ。
【三二】後漢書嚴光傳に見ゆ。
【三三】隋の安陽縣、相州を帶ぶ。今の河南省河北道安陽縣。

己卯、四親の廟主を附し、皇高祖瀛州府君を追尊して宣簡公と曰ひ、皇曾祖司空を懿王と曰ひ、皇

祖景王を景皇帝と曰ひ、廟を太祖と號し、祖妣を景烈皇后と曰ひ、皇考元王を元皇帝と曰ひ、廟を世祖と號し、妣獨孤氏を元貞皇后と曰ひ、妃竇氏を追諡して穆皇后と曰ふ。每歲、昊天上帝・皇地祇、神州地祇を祀り、

景帝を以て配し、感生帝明堂は、元帝を以て配す。庚辰、世子建成を立てて皇太子と爲し、趙公世民を秦王と爲し、齊公元吉を齊王と爲し、宗室

黃瓜公白駒を平原王と爲し、蜀公孝基を永安王と爲し、柱國道玄を淮陽王と爲し、長平公叔良を長平王と爲し、鄭公神通を永康王と爲し、安

吉公神符を襄邑王と爲し、柱國德良を新興王と爲し、上柱國博父を隴西王と爲し、上柱國奉慈を渤海王と爲す。孝基・叔良・神符・德良は、帝の從父

弟、博父・奉慈は弟の子、道玄は從父兄の子なり。癸未、薛舉、涇州に寇す。秦王世民を以て元帥と爲し、八總管の兵を將る、以て之を拒がしむ。

【三四】神州地祇。神州・迎州・冀州・戎州・拾州・柱州・營州・咸州・陽州の九州の祇なり。
【三五】感生帝。古者帝王の興るや、必ず五精の氣に感じて以て生ず。隋は火徳を以て王たり、赤熛怒を祀りて感帝と爲す。唐は土徳を以て王たり、含樞紐を祀りて感帝と爲す。
【三六】黃瓜公白駒。蓋し先に黃瓜縣公に封ぜらる。黃瓜縣は蓋し拓拔魏の置く所、上邽の界に在り。
【三七】涇州。復た安定郡を以て涇州と爲す。後魏、涇州を置き、高平に治す。涇水に因りて名と爲す。
【三八】陝州。義寧の初め河南の陝縣を以て弘農郡と爲す。今、陝州と爲す。

を置き、以て數州の兵を統ぶ。

乙酉、隋帝を奉じて鄴國公と爲す。詔して曰はく、「近世以來、時運遷革するや、前代の親族、誅夷せざるは莫し。興亡の效は、豈に伊れ人力ならんや。其れ隋の蔡王智積等の子孫、竝に所司に付し、才を量りて選用せよ」と。

東都、宇文化及が西より來るを聞き、上下震懼す。蓋琮といふ者有り、上疏す、「請ふ、李密に説き、之と勢を合はせ、化及を拒がん」と。元文都、盧楚等に謂つて曰はく、「今、讐恥未だ雪がすして、兵力足らず。若し密の罪を赦し、化及を撃たしめば、兩賊自ら鬪ひ、吾徐ろに其弊を承けん。化及既に破れなば、密の兵も亦疲れん。又、其將士、吾が官賞を利とし、離間す可きこと易からん。密を并せて亦擒にす可からん」と。楚等皆以て然りと爲す。即ち琮を以て通直散騎常侍と爲し、敕書を齎して密に賜はしむ。

丙申、隋の信都の郡丞東萊の麴稜來り降る。冀州の刺史に拜す。丁酉、二〇萬年縣の法曹武城の孫伏伽、上表して以爲はく、「隋、其過を聞くを惡むを以て、天下を亡へ

【二九】隋の信都郡は、唐に入りて冀州と爲り、東萊郡は萊州と爲る。

【三〇】萬年縣。周の明帝二年、長安を分ちて萬年縣と爲し、長安と竝に京城に居る。隋改めて大興縣と爲す。唐、禪を受けて復た萬年と爲し、長安と竝に赤縣と爲す。萬年縣は宜揚坊に治し、朱雀街東五十坊を領し、長安縣は長壽坊に治し、街西五十四坊を領す。法曹。隋の煬帝、縣尉を改めて縣正と爲し、尋ぎて正を改めて戸曹・法曹と爲す。唐復た縣尉と爲す。孫伏伽の萬年法曹は蓋し隋の官なり。武城は縣の名、漢の東武城なり。唐、貝州に屬す。

り。陛下、晉陽に龍飛し、遠近響應し、未だ昔年ならずして帝位に登れり。徒だ之を得るの易きを知り、隋の之を失ふの難からざるを知らざるなり。臣謂ふに、宜しく其覆轍を易へ、務めて下情を盡すべし。凡そ人君の言動は、慎まざる可からず。竊に見るに、陛下、今日位に即き、而して明日、鶴雛を獻する者有り。此れ乃ち少年の事なり。豈に聖主の須ふる所ならんや。又、【三二】百戲散樂は、亡國の淫聲なり。近ごろ太常、民間に於て、婦女の裙襦五百餘襲を借り、以て妓衣に充て、五月五日の玄武門の遊戯に擬す。此れ亦、以て子孫の法と爲す所に非ざるなり。凡そ此の如き類は、悉く宜しく廢罷すべし。善惡の習は、朝夕漸染し、以て人を移し易し。皇太子・諸王の參僚左右は、宜しく謹みて其人を擇ぶべし。其の門風の雍穆なる能はざる有り、人と爲り素行義無く、専ら奢靡を好み、聲色遊獵を以て事と爲す者は、皆之をして親近せしむ可からざるなり。古より今に及ぶまで、骨肉乖離し、以て國を敗り家を亡ぼすに至るは、未だ左右の離間するに因りて然らざるは有らざるなり。願はくは陛下、之を慎め」と。上、表を省て大に悦び、詔を下して褒稱し、擢でて治書侍御史と爲し、帛三百匹を賜ひ、仍ほ遠近ほ頒示す。

【三二】百戲散樂は、齊周隋の以て國を亡ぼせる所なり。

【三三】兼と判とは、皆、正官に非ず。

辛丑、丙史令延安の靖公竇威・薨す。將作大匠竇抗を以て納言を兼ね、黃門侍郎陳叔達をして、納言に判たらしむ。

宇文化及、輜重を

滑臺に留め、王軌を以て刑部尚書と爲し、之を守らしめ、兵を引きて北して

黎陽に趣く。李密の將徐世勣、黎陽に據り、其軍鋒を畏れ、兵を以て西して倉城に保す。化及、河を度

りて黎陽に保し、兵を分ちて世勣を圍む。密、步騎二萬を帥めて、清淇に

壁し、世勣と、烽火を以て相應じ、溝を深くし、壘を高くし、化及と戰はず。化

及、倉城を攻むる毎に、密輒ち兵を引きて以て其後を拵す。密、化及と、(三)水

を隔てて語る。密、之を數めて曰はく、『卿は本匈奴の阜隸、破野頭なる

のみ。父兄子弟、竝に隋の恩を受け、富貴累世、舉朝、二莫し。主上、徳

を失へども、死諫する能はず。反つて弑逆を行ひ、篡奪を規らんと欲す。

(三) 諸葛瞻の忠誠を追はず、乃ち 霍禹の惡逆を爲す。天地の容れざる

所なり。將に何にか之かんと欲する。若し速かに來りて我に歸せば、尙ほ

後嗣を全くするを得可し』と。化及、默然として俯視すること良久しく、目

を瞋らし大言して曰はく、『爾と相殺の事を論ず。何ぞ書語を作すを須ひ

んや』と。密、從者に謂つて曰はく、『化及、庸愚なること此の如く、忽ち

帝王と爲るを圖らんと欲す。吾當に折杖をもて之を驅るべきのみ』と。化及、盛に攻具を修め、以て

倉城に逼る。世勣、城外に於て深溝を掘り、以て固く守る。化及、塹に阻まれ、城下に至るを得ず。

【一三】滑臺。滑州の治所。

【一四】清淇。汲郡の衛縣は、古

の朝歌なり。隋の開皇十六

年、分ちて清淇を置く。大業

の初、廢して衛縣に入る。李

密蓋し故縣に壁するなり。

【一五】水。淇水をいふ。

【一六】破野頭。隋書宇文述傳に、

本姓は破野頭、鮮卑に役屬

す。侯豆歸、其主に從ひて字

文氏と爲ると。

【一七】諸葛瞻。亮の子、蜀の亡

ぶるや、瞻、之に死す。

【一八】霍禹。光の子。漢宣、政

を親らし、禹、大逆を爲さんと

謀り、遂に以て族を滅ぼす。

世勣、塹中に於て地道を爲り、兵を出して之を撃つ。化及大に敗れ、其攻具を焚く。時に密、東都と

相持すること日久しく、又、東のかた化及を拒ぎ、常に・東都の其後を議

せんことを畏る。蓋琮至るを見、大に喜び、遂に上表して・降らんと乞ひ、

化及を討滅して以て罪を贖はんと請ひ、獲る所の 雄武郎將于洪建を送

り、元帥府の記室參軍李儉・上開府徐師譽等を遣はし、入りて皇泰主に見

えしむ。命じて洪建を左掖門外に戮すること、(四) 斛斯政の法の如くせし

む。元文都等、密が降るを以て誠實と爲し、盛に賓館を 宣仁門の東に

飾る。皇泰主、儉等を引見し、儉を以て司農卿と爲し、師譽を尚書右丞と

爲し、導從を具し (四) 鏡吹を列せしむ。館に還れば、玉帛酒饌あり、中使

相望む。密を太尉・尚書令・東南道大行臺・行軍元帥・魏國公に冊拜し、先づ

化及を平げ・然る後入朝して 政を輔けしむ。徐世勣を以て右武侯大將軍

と爲す。仍ほ 詔を下して密の忠款を稱し、且つ曰はく、『其れ兵を用ふ

る機略は、一に魏公の節度を稟げよ』と。元文都、和解を喜び、謂へらく

天下定まる可しと。(五) 上東門に於て、置酒して樂を作し、段達より已下、皆起ちて舞ふ。王世充、色

を作し、(四) 起居侍郎崔長文に謂つて曰はく、『朝廷の官爵、乃ち以て賊に與ふ。其志、何を爲さんと

欲するか。と。文都等も亦、世充が城を以て化及に應せんと欲するを疑ふ。是に由りて隙有り、然れども猶ほ外は相彌縫し、陽に親善を爲す。秋七月、皇泰主、大理卿張權・鴻臚卿崔善福を遣はし、李密に書を賜うて曰はく、「今日以前は、咸共に刷蕩し、使至りて以後、彼此、懷を通ず。七政の重き、公の匡弼に倚ち、九伐の利、公の指揮に委ぬ」と。權等既に至り、密、北面して詔書を拜受す。既に西慮無く、悉く精兵を以て、東して化及を撃つ。密、化及の軍糧且に盡きんとするを知り、因りて偽りて與に和す。化及大に喜び、其兵食を恣にし、密が之を饋らんことを冀ふ。會、密の下に人有り罪を獲、亡げて化及に抵り、具に其情を言ふ。化及、大に怒る。其の食又盡く。乃ち永濟渠を度り、密と童山の下に戦ふ。辰より酉に達す。密、流矢の中る所と爲り、馬より墮ちて悶絶す。左右奔り散じ、追兵且に至らんとす。唯だ秦叔寶、獨り之を捍衛す。密、是に由りて免るるを獲たり。寂寶復た兵を收めて之と力戦す。化及乃ち退く。化及、汲郡に入り、軍糧を求む。又、使を遣はし、東郡の吏民を考掠し、以て米粟を責む。王軌等、其弊に堪へず、通事舍人許敬宗を遣はし、密に詣りて降を請はしむ。(密)軌を以て滑州總管と爲し、敬宗を以て元帥府の

【一四七】七政。日月五星、之を七政と謂ふ。
 【一四八】九伐。周官に、大司馬は九伐の法を以て邦國を正すと。
 【一四九】密の軍は鞏洛の東に在り、都城は西に在り。
 【一五〇】童山。隋志に、汲郡衛縣に同山有り。
 【一五一】通事舍人。隋の内書省に通事舍人十六人有りと。
 【一五二】滑州。東郡を改めて滑州と爲す。滑州は白馬に治す。今の河南省河北道滑縣の東二十里。隋の開皇三年、滑州を置く。滑臺を取りて名と爲すなり。

記室と爲し、魏徵と共に文翰を掌らしむ。敬宗は善心の子なり。房公蘇威、東郡に在り、衆に隨つて密に降る。密、其の隋氏の大員なるを以て、心を虚しくして之を禮す。威、密を見、初めより帝室の艱危を言はず、唯だ再三舞踏し、「圖らざりき、今日復た聖明を觀んとは」と稱す。時人、之を鄙しむ。化及、王軌が叛けるを聞き、大に懼れ、汲郡より兵を引き、以北の諸郡を取らんと欲す。其將陳智略、嶺南の驍果萬餘人を帥る、樊文超、江淮の排積を帥る、張童兒、江東の驍果數千人を帥る、皆、密に降る。文超は子蓋の子なり。化及、猶ほ衆二萬有り、北して魏縣に趣く。密、其の能く爲す無きを知り、西して鞏洛に還り、徐世勣を留めて以て之に備ふ。

乙巳、(一五三)宜州の刺史周超、朱粲を撃ち、之を敗る。
 丁未、梁師都、(一五四)靈州に寇す。驃騎將軍蘭興榮、撃ちて之を破る。
 突厥の(一五五)闕可汗、使を遣はして内附す。初め闕可汗、李軌に附く。隋の(一五六)西戎使者曹瓊、(一五七)甘州に據りて之を誘ふ。乃ち更に瓊に附き、之と與に軌を拒ぐ。軌の敗る所と爲り、達斗拔谷に竄れ、吐谷渾と相表裏す。是に至りて内附す。尋ぎて李軌の滅ばす所と爲る。

【一五三】善心は江都の難に死す。
 【一五四】樊子蓋は、煬帝に事へ、東郡を守るの功有り。
 【一五五】魏縣。武陽郡に屬す。時に李密、武陽郡を改めて魏州と爲す。
 【一五六】宜州。疑ふらくは當に宜州に作るべからん。
 【一五七】靈州。復た靈武郡を以て靈州と爲す。今の甘肅省寧夏道靈武縣。
 【一五八】義師初めて起るや、隋の鷹揚郎將を改めて軍頭と爲し、尋ぎて改めて驃騎將軍と曰ふ。
 【一五九】闕可汗。西突厥の闕度設、會寧に處り、隋亂るるや、自ら可汗と稱す。

薛舉進みて、高墟に逼る。遊兵、幽岐に至る。秦王世民、溝を深くし、壘を高くし、與に戦はず。會、世民、瘡疾を得、軍事を長史納言劉文靜、司馬殷開山に委ね、且つ之を戒めて曰はく、『薛舉、懸軍深く入り、食少く兵疲る。若し來りて戦を挑まば、慎みて應ずる勿れ。吾が疾愈ゆるを俟ち、君等の爲めに之を破らん』と。開山退きて文靜に謂つて曰はく、『王、公が辦する能はざるを慮り、故に此言有るのみ。且つ賊、王疾有るを聞かば、必ず我を輕んせん。宜しく武を曜かして以て之を威すべし』と。乃ち高墟の西南に陳し、衆を待みて、備を設けず。擧、師を潜めて其後を掩ふ。壬子、(一五)淺水原に戦ふ。八總管皆敗れ、士卒、死する者什に五六。大將軍慕容羅睺・李安遠・劉弘基、皆没す。世民、兵を引き、長安に還る。擧遂に高墟を拔き、唐の兵の死する者を收めて京觀と爲す。文靜等、皆、坐して名を除かる。

乙卯、榆林の賊帥郭子和、使を遣はして來り降る。以て靈州の總管と爲す。

李密、戰勝つ毎に、必ず使を遣はし、捷を皇泰主に告ぐ。隋人皆喜ぶ。王世充、獨り其麾下に謂つ

【一五】西戎使者。隋の煬帝の置く所。
 【一六】甘州。西魏廢帝二年、張掖を以て甘州と爲す。隋の大業中、以て張掖郡と爲す。唐復た甘州と爲す。今の甘肅省甘涼道張掖縣。
 【一七】高墟。今の甘肅省涇原道寧縣の南に高墟城有り。
 【一八】幽岐。唐復た北地郡を以て幽州と爲し、扶風郡を岐州と爲す。
 【一九】劉文靜、納言を以て秦王の行軍長史と爲る。
 【二〇】殷開山は吏部侍郎を以て行軍司馬と爲る。
 【二一】淺水原。今の陝西省關中道長武縣に在り。

て曰はく、『元文都の輩は、刀筆の吏なるのみ。吾、其勢を観るに、必ず李密の擒ふる所と爲らん。且つ吾が軍士屢、密と戦ひ、其父兄子弟を没すること、前後已だ多し。一旦、之が下と爲らば、吾が屬、類無からん』と。以て其衆を激怒せんと欲す。文都、之を聞きて大に懼れ、盧楚等と謀り、世充が入朝するに因り、甲を伏せて之を誅せんとす。段達、性庸懦にして、其事の就らざらんことを恐れ、其婿張志を遣はし、楚等の謀を以て世充に告ぐ。戊午夜三鼓、世充、兵を勸し、(一六)含嘉門を襲ふ。元文都、變を聞き、入りて皇泰主を奉じて、(一七)乾陽殿に御し、兵を陳して自ら衛り、諸將に命じて門を閉ちて拒ぎ守らしむ。將軍跋野綱、兵を將りて出でて世充に遇ひ、馬を下りて之に降る。將軍費曜・田閻、門外に戦ひ、利あらず。文都自ら宿衛の兵を將る、玄武門を出でて以て其後を襲はんと欲す。(一八)長秋監段瑜、門鑰を求むれども獲ずと稱し、稽留すること遂に久しく、天旦に曙けんとす。文都復た、兵を引き、太陽門を出で逆へ戦はんと欲し、還りて乾陽殿に至る。世充已に(一九)太陽門を攻め、入るを得たり。皇甫無逸、母及び妻子を棄て、(二〇)右掖門を斫り、西して長安に奔る。盧楚、(二一)太官署に匿る。世充の黨、之を擒にす。(二二)興教門に至り、

【一六】含嘉門。蓋し含嘉城に通するを以て名づく。
 【一七】乾陽殿。隋の東都宮の正殿。
 【一八】長秋監。煬帝大業三年、内侍省を改めて、長秋監と爲す。
 【一九】太陽門。宮城の東門。
 【二〇】右掖門。皇城は都城の西北隅に在り、南面の三門、中を端門と曰ひ、左を左掖と曰ひ、右を右掖と曰ふ。
 【二一】太官署。光祿寺に在り。百僚の膳署は皆皇城の内に在り。
 【二二】皇宮の南面の三門、左なるを興教と曰ふ。

して之を殺さしむ。進みて紫微宮門を攻む。皇泰主、人をして〔七三〕紫微觀に登らしめ、「兵を稱げて何をか爲さんと欲する」と問はしむ。世充、馬を下り謝して曰はく、「元文都・盧楚等、横しまに規圖せらる。請ふ文都を殺し、甘んじて刑典に従はん」と。段達乃ち將軍黃桃樹をして、文都を執送せしむ。文都顧みて皇泰主に謂つて曰はく、「臣今朝に死せば、陛下夕に及ばん」と。皇泰主、慟哭して之を遣る。興教門を出づ。亂斬すること盧楚の如くし、并せて盧元の諸子を殺す。段達、又、皇泰主の命を以て、門を開きて世充を納る。世充、悉く人を遣はして宿衛の者に代らしめ、然る後入りて皇泰主に乾陽殿に見ゆ。皇泰主、世充に謂つて曰はく、「擅に相誅殺し、曾て聞奏せざるは、豈に臣たるの道か。公、其彊力を肆にし、敢て我に及ばんと欲するか」と。世充、拜伏流涕し、謝して曰はく、「臣、先皇の采拔を蒙り、骨を粉にするも報すべきに非ず。文都等、禍心を苞藏し、李密を召して以て社稷を危くせんと欲す。臣が違異するを疾み、深く猜嫌を積む。臣、死を救ふに迫られ、聞奏するに暇あらず。若し内に不臧を懷き、陛下に違負せば、天地日月、實に照臨する所、臣をして〔七四〕闔門殄滅し、復た遺類無からしめん」と。詞淚俱に發す。皇泰主、以て誠と爲し、引きて殿に升らしめ、與に語ること之を久しくし、因つて與に俱に入り、〔七五〕皇太后に見ゆ。世充、髮を被りて誓を爲し、「敢て貳心有らず」と稱す。乃ち世充を以て左僕射と爲し、内外の諸軍事を總督せしむ。日

【七三】觀。門闕なり。

【七四】闔門。一家残らず也。

【七五】皇太后。皇泰主の母劉良娣。

中に及ぶ比ほひ、〔七六〕趙長文・郭文懿を捕獲し、之を殺し、然る後城を巡り、告諭するに元盧を誅するの意を以てす。世充、含嘉城より、移りて尙書省に居り、漸く黨援を結び、恣に威福を行ふ。兄世暉を用ひて内史令と爲し、入りて禁中に居らしめ、子弟威兵馬を典る。政事を分ちて十頭と爲し、悉く其の黨を以て之を主らしむ。勢、内外に震ひ、趨附せざるもの莫し。皇泰主は、手を拱くのみ。

李密將に入朝せんとし、〔七七〕温に至る。元文都等が死せるを聞き、乃ち金墉に還る。

東都大に饑う。私錢濫惡にして、太半雜ふるに錫鑿を以てし、其の細なること線の如し。米斛ごとに直錢八九萬。

初め李密嘗て業を儒生徐文遠に受く。文遠、皇泰主の國子祭酒と爲る。自ら出でて樵采し、密の軍の執ふる所と爲る。密、文遠をして南面して坐せしめ、弟子の禮を備へ、北面して之を拜す。文遠曰はく、「老夫既に厚禮を荷ふ。敢て言を盡さざらんや。未だ將軍の志を審かにせず。〔七八〕伊霍と爲りて以て絶えたるを繼ぎ傾けるを扶けんと欲せんか、則ち老夫、遲暮なりと雖も、猶ほ願はくは力を盡さん。若し〔七九〕莽卓と爲り、危きに乘じ利を邀めば、則ち老夫を用ふる所無し」と。密・頓首して曰はく、「昨、朝命を奉じ、位に上公に備はる。冀はくは庸虚を竭し、國難を匡濟せんことを。此れ密の本志なり」と。文遠曰はく、「將軍は〔八〇〕名臣の子なり。塗を失うて此に至れり。若し能く遠からず

【七六】趙長文・郭文懿。二人は蓋し盧元の黨なるべし。

【七七】温縣は河内郡に屬す。

【七八】伊霍。伊尹と霍光。

【七九】莽卓。王莽と董卓。



して復らば、猶ほ忠義の臣たるを失はじ』と。王世充が元文都等を殺すに及び、密復た計を文遠に問ふ。文遠曰はく、『世充も亦門人なり。其のひと爲りや、殘忍褊隘なり。既に此勢に乗じ、必ず異圖有らん。將軍の前計、諧はずと爲す。世充を破るに非ずんば、入朝す可からざるなり』と。密曰はく、『始め謂へらく、先生は儒者にして、時事に達せずと。今乃ち坐ながら大計を決すること、何ぞ其れ明かなるや』と。文遠は 〔一八二〕 孝嗣の玄孫なり。

庚申、詔して、隋氏の離宮、遊幸の所、竝に之を廢す。

戊辰、黃臺公瑗を遣はし、山南を安撫せしむ。

己巳、隋の右武衛將軍皇甫無逸を以て刑部尚書と爲す。

隋の河間の郡丞王琮、郡城を守り、以て羣盜を拒ぐ。竇建德、之を攻む。歲餘にして下らず。煬帝の凶問を聞き、吏士を帥りて喪を發す。城に乗る者皆哭す。建德、使を遣はして之を弔ふ。琮、使者に因りて降らんと請ふ。建德、退舍し、饌を具して以て之を待つ。琮、言、隋亡ぶるに及び、俯伏して流涕す。建德も亦之が爲めに泣く。諸將曰はく、『琮久しく我が軍を拒ぎ、殺傷すること甚だ衆く、力盡きて乃ち降り。請ふ之を烹ん』と。建德曰はく、『琮は忠臣なり。吾方に之を賞し、以て君に事ふるを勸めん。奈何ぞ之を殺さん。往に高雞泊に在りて盜を爲すや、妄に人を殺す可きを容る。』

【一七九】名臣の子。李密は寬の子。寬、周の將と爲り、驍勇を以て名を著はす。
【一八〇】遠からずして復る。易の復卦の爻辭。
【一八二】徐孝嗣は蕭齊に相たり。

今、百姓を安んじ天下を定めんと欲す。豈に忠良を害するを得んや』と。乃ち軍中に徇へて曰はく、『先に王琮と怨有り、敢て妄動する者は、三族を夷げん』と。琮を以て 〔一八三〕 瀛州の刺史と爲す。是に於て、河北の郡縣、之を聞き、争うて建德に附く。是より先、建德、〔一八四〕 景城を陥れ、〔一八五〕 戶曹河東の張玄素を執へ、將に之を殺さんとす。縣民千餘人、號泣して、其死に代らんと請ひ、曰はく、『戶曹は清慎なること比無し。大王、之を殺さば、何を以て善を勸めん』と。建德乃ち之を釋し、以て治書侍御史と爲す。固辭す。江都敗るるに及び、復た以て黃門侍郎と爲す。玄素乃ち起つ。〔一八六〕 饒陽の令宋正本、博學にして才氣有り。建德に説くに河北を定むるの策を以てす。建德、引きて謀主と爲す。建德、都を 〔一八七〕 樂壽に定め、居る所を命けて金城宮と曰ひ、百官を備置す。

【一八三】瀛州。復た河間郡を以て瀛州と爲す。漢には河間國と爲す。後漢には樂成國と爲す。後魏、樂成縣に於て瀛州を立つ。今の直隸省津海道河間縣。
【一八四】景城縣は河間郡に屬す。今の直隸省津海道交河縣の東北六十里。
【一八五】張玄素は縣の戶曹たり。今の直隸省保定道饒陽縣。
【一八六】樂壽縣は河間郡に屬す。今の直隸省津海道獻縣。

卷の第一百八十六

唐紀二

高祖神堯大聖光孝皇帝上の中

武德元年、八月、薛舉、其子仁果を遣はし、進みて寧州を圍む。刺史胡演、撃ちて之を却く。郝瑗、舉に言つて曰はく、「今、唐の兵新に破れ、關中騒動す。宜しく勝に乗じて直に長安を取るべし」と。舉、之を然りとす。會、疾有りて止む。辛巳、舉、卒す。太子仁果立つ。折墪城に居る。舉に諡して武帝と曰ふ。

上、李軌と共に秦隴を圖らんと欲し、使を遣はし、潜に涼州に詣り、之を招撫せしめ、之に書を與へ、之を從弟と謂ふ。軌、大に喜び、其弟懋を遣はして入貢す。上、懋を以て大將軍と爲す。鴻臚少卿張俟徳に命じて、軌を冊拜せしめ、涼州總管と爲し、涼王に封す。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德元年

【一】武德元年。西紀六一八年なり。

【二】寧州。北地郡を以て寧州と爲し、定安に治す。今の甘肅省涇原道寧縣。

【三】涇州保定縣(今の甘肅省涇原道涇川縣の北五里)に折墪の故城あり。

【四】薛舉父子、時に秦隴に據る。

【五】涼州。武威郡を復して、涼州と爲す。

初め朝廷、安陽の令呂珉を以て相州の刺史と爲し、更めて相州の刺史王德仁を以て巖州の刺史と爲す。德仁、是に由りて怨憤す。甲申、山東の大使宇文明達を誘ひ、林慮山に入りて之を殺し、叛きて王世充に歸す。

己丑、秦王世民を以て元帥と爲し、薛仁果を撃つ。
丁酉、臨洮等の四郡來り降る。

隋の江都の太守陳稜、煬帝の柩を求め得、宇文文化及が留むる所の輦輅鼓吹を取り、粗ぼ天子の儀衛を備へ、江都宮西の吳公臺下に改葬し、其王公以下は、皆、瘞を帝塋の側に列ぬ。

宇文文化及が江都を發するや、杜伏威を以て歷陽の太守と爲す。伏威、受けず。仍ほ隋の皇泰主に上表し、伏威を拜して東道大總管と爲し、楚王に封す。沈法興も亦皇泰主に上表し、自ら大司馬・錄尚書事・天門公と稱し、制を承けて百官を置き、陳果仁を以て司徒と爲し、孫士漢を司空と爲し、蔣元超を左僕射と爲し、殷芊を左丞と爲し、徐令言を右丞と爲し、劉子翼を選部侍郎と爲し、李百藥を府掾と爲す。百藥は、德林の子なり。

九月、隋の襄國の通守陳君賓來り降る。邢州の刺史に拜す。君賓は、伯山の子なり。

〔五〕 虞州の刺史韋義節、隋の河東の通守堯君素を攻む。久しくして下らず。軍數、利あらず。壬子、工部尚書獨孤懷恩を以て之に代らしむ。

初め李密、〔六〕 既に翟讓を殺し、頗る自ら驕矜して、士衆を恤まず。倉粟、多しと雖も、府庫の錢帛無く、戰士、功有れども、以て賞と爲す無し。又、厚く初附の人を撫し、衆心頗る怨む。徐世勣、嘗て宴會に因り、其短を刺譏す。密、懼ばず。世勣をして出でて黎陽に鎮せしむ。名は委任すと雖も、實は亦之を疎んず。密、洛口倉を開きて米を散するに、防守典當の者無く、又、文券無く、之を取る者、意の多少に隨ふ。或は倉を離るるの後、力、致す能はず、衢路に委棄す。倉城より郭門に至るまで、米厚さ數寸、車馬の輔踐する所と爲る。羣盜來りて食に就く者、家屬を并せて百萬口に近し。饗盜無く、荆筐を織り、米を淘ぐ。洛水十里、兩岸の間、之を望むに皆白沙の如し。密喜びて賈閏甫に謂つて曰は

く、『此れ食を足らすと謂ふ可し』と。閏甫對へて曰はく、『國は民を以て本と爲し、民は食を以て天と爲す。今、民、糧負して流るるが如くにして至る所以は、天とする所此に在るを以ての故なり。而るに有司曾て愛吝する無く、〔七〕 屑越すること此の如し。竊に恐る、一旦米盡き民散せんことを。明公孰と與に大業を成さんや』と。密、之を謝し、即ち閏甫を以て司倉參軍事に判たらしむ。密、東都の兵

〔六〕 林慮縣に巖州を置く。
〔七〕 臨洮。後周の武帝、吐谷渾を逐うて以て洮陽郡を置き、尋ぎて洮州を置く。大業の初め、州を改めて臨洮郡と爲す。今の甘肅省蘭山道臨潭縣の西南七十里。

〔八〕 吳公臺は揚州城の西北なる雷塘の西に在り。

〔九〕 是年四月、化及、江都を發す。

〔一〇〕 義寧元年春、伏威、歷陽に據る。

〔一一〕 陳果仁。新唐書には陳果仁に作る。

〔一二〕 李德林は齊・周・隋に歴事す。

〔一三〕 邢州。復た襄國郡を以て邢州と爲す。

〔一四〕 伯山。陳の文帝の子。

伯山の子なり。

〔一五〕 虞州。義寧元年、安邑・虞郷・夏三縣を以て安邑郡を置く。武德元年、虞州と曰ふ。

〔一六〕 翟讓を殺すこと、一百八十四卷義寧元年十一月に見ゆ。

〔一七〕 郭は郭郭なり。

〔一八〕 屑越。猶ほ狼藉して之を棄つと言ふがごとし。

數敗れ微弱にして將相自ら相屠滅するを以て、謂へらく旦夕に平ぐ可からんと。王世充既に大權を専らにし、厚く將士を賞し、器械を繕治し、亦陰に密を取らんと圖る。時に隋の軍、食乏しく、而して密の軍、衣少し。世充、交易せんと請ふ。密、之を難る。長史邴元真等、各私利を求め、密に勸めて之を許さしむ。是より先、東都の人、密に歸する者、日に百を以て數ふ。既に食を得、降る者益少し。密、悔いて止む。密、宇文化及を破りて還り、其勁卒良馬多く死し、士卒疲病す。世充、其弊に乗じて之を撃たんと欲す。人心の壹ならざらんことを恐れ、乃ち詐り稱す、「左軍衛士張永通、三たび周公を夢み、意を世充に宣せしむ、「當に兵を勅して相助けて賊を撃つべし」と。」乃ち周公の爲めに廟を立て、兵を出す毎に、輒ち先づ祈禱す。世充、巫をして宣言せしむ、「周公、僕射をして急に李密を討たしめんと欲す。當に大功有るべし。不ずんば即ち兵皆疫死せん」と。世充の兵は、楚人多く、妖言を信じ、皆、戰はんと請ふ。世充、精銳を簡練し、二萬餘人・馬二千餘匹を得。壬子、師を出して密を撃つ。旗幡の上に、皆、永通の字を書し、軍容甚だ盛なり。癸丑、偃師に至り、通濟渠の南に營し、三橋を渠上に作る。密、王伯當を留めて金墉を守らしめ、自ら精兵を引き、偃師の北に出で、邱山を阻して以て之を待つ。密、諸將を召して會議す。裴仁基曰はく、「世充、衆を悉して至る。

【二九】周公、洛を作る。世充、之を假りて以て士氣を振作するなり。
 【三〇】永通の字云云。張永通が周公の意を宣するを以て、故に旗幡に永通の字を書し、以て神助を表す。
 【三一】通濟渠。大業元年、開く所。

洛下必ず虚しからん。兵を分ちて其要路を守り、東するを得ざらしめ、精兵三萬を簡び、河西に傍うて出で、以て東都に逼る可し。世充還らば、我且甲を按せん。世充再び出でば、我又之に逼らん。此の如くせば則ち我は餘力有り、彼は奔命に勞れ、之を破らんこと必せり」と。密曰はく、「公の言大に善し。今、東都の兵、三つの當る可からざる有り。兵仗の精銳なる、一なり。計を決して深く入る、二なり。食盡きて戰を求むる、三なり。我、但だ城に乗りて固く守り、力を蓄へて以て之を待たば、彼、鬪はんと欲するも得ず、走るを求むるも路無く、十日を過ぎずして、世充の頭、麾下に致す可からん」と。陳智略・樊文超・單雄信、皆曰はく、「世充の戰卒を計るに甚だ少く、屢々摧破を経、悉く已に膽を喪ふ。兵法に曰はく、「倍すれば則ち戰ふ」と。況んや倍に倍するのみならざるをや。且つ江淮の新附の士、此機に因りて其勳效を展べんことを望む。其鋒に及びて之を用ひば、以て志を得可からん」と。是に於て、諸將諠然として、戰はんと欲する者什に七八。密、衆議に惑うて之に従ふ。仁基、苦ろに争へども得る能はず。地を撃ちて歎じて曰はく、「公後必ず之を悔いん」と。魏徵、長史鄭頰に謂つて曰はく、「魏公、驟勝つと雖も、而も驍將銳卒多く死し、戰士心怠る。此二つの者は、以て敵に應じ難し。且つ世充、食乏しく、志、死戰するに在り。與に鋒を争ひ難し。未だ溝を深くし壘を高くして以て之を拒ぐに若かず。旬月を過ぎずして、世充、糧盡き、必ず自ら退かん。追うて之を撃たば、勝たざる蔑からん」と。頰曰はく、「此れ

【三二】老生。魏徵をいふ。

老生の常談なるのみ」と。徵曰はく、「此れ乃ち奇策なり。何ぞ常談と謂ふや」と。衣を拂つて起つ。程知節、内馬軍を將ゐて、密と營を同じくし、北邙山の上に在り。單雄信、外馬軍を將ゐて、偃師城の北に營す。世充、數百騎を遣はし、通濟渠を度り、雄信の營を攻めしむ。密、裴行儼を遣はし、知節と與に之を助けしむ。行儼先づ馳せて敵に赴く。流矢に中りて地に墜つ。知節、之を救ひ、數人を殺す。世充の軍、披靡す。乃ち行儼を抱き、〔三〕重騎して還る。世充の騎の逐ふ所と爲る。槊を刺して洞過す。知節、身を廻らし、其槊を〔四〕振折し、兼ねて追ふ者を斬り、行儼と俱に免る。會、日暮れ、各、兵を斂めて營に還る。密の驍將孫長樂等十餘人、皆重創を被る。密新に宇文化及を破り、世充を輕んずるの心有り、壁壘を設けず。世充、夜、二百餘騎を遣はし、潜〔五〕に北山に入り、谿谷中に伏せしめ、軍士に命じ、皆馬に秣〔六〕ひ蓐食せしめ、甲寅旦、將に戰はんとす。世充、衆に誓つて曰はく、「今日の戰は、直に勝負を争ふのみに非ず、死生の分るること、此一舉に在り。若し其れ捷たば、富貴固より論せざる所なり。若し其れ捷たずんば、必ず一人の免るるを獲る無からん。争ふ所の者は死なり。獨り國の爲めのみに非ず。各、宜しく之を勉むべし」と。遲明、兵を引きて密に薄る。密、兵を出して之に應ず。未だ列を成すに及ばず。世充、兵を縱ちて之を撃つ。世充の士卒、皆、江淮の剽勇にして、出入すること飛ぶが如し。世充、先に一人の貌の密に類たる者を索め得、縛して之

【三】二人共に一馬に騎るを重騎と曰ふ。

【四】振折。ねち折る也。

【五】北山。即ち北邙山なり。

を匿し、戰方に酣〔七〕なるとき、牽きて以て陳前を過ぎしめ、諜〔八〕ぎて曰はく、「已に李密を獲たり」と。士卒、皆、萬歳と呼ぶ。其伏兵發し、高きに乗じて下り、馳せて密の營を壓し、火を縱ちて其廬舎を焚く。密の衆大に潰ゆ。其將張童仁、陳智略、皆降る。密、萬餘人と與に、馳せて洛口に向ふ。世充、夜、偃師を圍む。鄭頰、偃師を守る。其部下、城を翻して世充を納る。初め世充の家屬、江都に在り。宇文化及に隨つて滑臺に至る。又、王軌に隨つて李密に入る。密、偃師に留め、以て世充を招かんと欲す。偃師の破るるに及び、世充、其兄世偉の子玄應、虔恕、瓊等を得、又、密の將佐裴仁基、鄭頰、祖君彥等數十人を獲たり。世充、是に於て、兵を整へて洛口に向ひ、〔九〕元眞の妻子、鄭虔象の母及び密の諸將の子弟を得、皆、之を撫慰し、潜〔一〇〕に其父兄を呼ばしむ。初め元眞、縣吏と爲り、賊に坐して亡命し、翟讓に瓦岡に従ふ。讓、其の嘗て吏たるを以て、書記を掌らしむ。密が幕府を開き、時英を妙選するに及び、讓、元眞を薦めて長史と爲す。〔一一〕密、已むを得ずして之を用ふ。行軍の謀畫、未だ嘗て參預せず。密、西して世充を拒ぐや、元眞を留めて洛口倉を守らしむ。元眞、性貪鄙なり。宇文溫、密に謂つて曰はく、「元眞を殺さずんば、必ず公の患を爲さん」と。密、應へず。元眞、之を知り、陰に密に叛かんと謀る。楊慶、之を聞き、以て密に告ぐ。密、固より焉を疑ふ。是に至りて、密將に洛口城に入らんとす。元眞已に人を遣はし、潜〔一二〕に世充を引く。密、知れども發せず。因つて衆と謀り、世充の兵の半洛水を濟るを待ち、然

【七】酣。此れ義寧元年春二月の事なり。

る後之を撃たんとす。世充の軍至る。密の候騎、時に覺らず。將に出で戦はんとする比ほひ、世充の軍悉く已に濟る。單雄信等、又、兵を勒して自ら據る。密自ら支ふる能はざるを度り、麾下の輕騎を帥る、虎牢に奔る。元眞遂に城を以て降る。初め雄信、驍捷にして、善く馬槊を用ふ。名、諸軍に冠たり。軍中、號して飛將と曰ふ。彦藻、雄信が去就を輕んずるを以て、密に勸めて之を除かしむ。密、其才を愛し、忍びざるなり。密が利を失ふに及び、雄信遂に所部を以て世充に降る。密將に黎陽に如かんとす。或るひと曰はく、『翟讓を殺すの際、徐世勣幾ど死せんとせり。今、利を失うて之に就かば、安んぞ保す可けんや』と。時に王伯當、金墉を棄て、河陽に保す。密、虎牢より之に歸す。諸將を引きて共に議す。密、南は河を阻とし、北は太行を守り、東は黎陽を連ね、以て進取を圖らんと欲す。諸將皆曰はく、『今兵新に利を失ひ、衆心危み懼る。若し更に停留せば、恐らくは叛亡して日ならずして盡きん。又、人情、願はず。以て功を成し難し』と。密曰はく、『孤が恃む所の者は衆なり。衆既に願はずんば、孤の道窮まれり。自ら匆ねて以て衆に謝せんと欲す』と。伯當、密を抱きて號絶す。衆皆悲泣す。密復た曰はく、『諸君幸に相棄てずんば、當に共に關中に歸すべし。密が身は功無しと雖も、諸君は必ず富貴を保たん』と。府掾柳燮曰はく、『明公は唐公と同族にして、兼ねて疇昔の好有り。兵を起すに陪

【一七】彦藻。房彦藻なり。是年二月、彦藻死す。此れ亦日前の事を敘す。
 【一八】事、一百八十四卷義寧元年十一月に見ゆ。
 【一九】號絶。大に號叫するなり。
 【二〇】唐公が兵を起ししより之と連和するを謂ふ。

せずと雖も、然も東都を阻み、隋の歸路を斷ち、唐公をして戦はずして長安に據らしめしは、此れ亦公の功なり』と。衆咸曰はく『然り』と。密、又、王伯當に謂つて曰はく、『將軍の室家は重大なり。豈に復た孤と俱に行かんや』と。伯當曰はく、『昔、蕭何、盡く子弟を帥る、以て漢王に従へり。伯當恨むらくは兄弟俱に従はざるを。豈に公が今日、利を失ふを以て、遂に去就を輕んせんや。縦ひ身原野に分るとも、亦、甘心する所なり』と。左右、感激せざるもの莫し。密に従つて關に入る者、凡そ二萬人。是に於て、密の將帥、州縣、多く隋に降る。朱粲も亦使を遣はして隋に降る。皇泰主、粲を以て楚王と爲す。

甲寅、秦州總管竇軌、薛仁果を撃ち、利あらず。驃騎將軍劉感、涇州に鎮す。仁果、之を圍む。城中、糧盡く。感、乘る所の馬を殺し、以て將士に分つ。感は一も噉ふ所無く、唯だ馬骨を煮て汁を取り、木屑を和して之を食ふ。城、陷るに垂なんとする者數なり。會長平王叔良の將士、涇州に至る。仁果乃ち『食盡く』と揚言し、兵を引きて南に去る。乙卯、又、高墪の人を遣はし、僞りて城を以て降らしむ。叔良、感を遣はし、衆を帥るて之に赴かしむ。己未、城下に至りて門を叩く。城中の人曰はく、『賊已に去る。城を踰えて入る可し』と。感、命じて其門を燒かしむ。

【二一】漢王、項羽と相拒ぐや、蕭何悉く子弟を遣はして軍に詣らしむ。天下既に定まり、功を論じ封を行ふや、上曰はく、何、宗を舉りて數十人、我に隨へりと。
 【二二】秦州。隴西郡を以て秦州と爲す。
 【二三】涇州。安定郡を涇州と爲す。
 【二四】士。當に兵に作るべし。「會長平王叔良、兵を將るて涇州に至る云云」と讀む。

城上、水を下して之に灌ぐ。感、其の詐なるを知り、歩兵を遣はして先づ還らしめ、自ら精兵を帥ゐて殿を爲す。俄にして城上、三烽を擧げ、仁果の兵、南原より大に下り、百里細川に戦ふ。唐の軍大に敗れ、感、仁果の擒にする所と爲る。仁果復た涇州を圍み、感をして城中に語りて『援軍已に敗る。早く降るに如かず』と云はしむ。感、之を許し、城下に至り、大に呼びて曰はく、『逆賊飢餓し、亡びんこと旦夕に在り。秦王、數十萬の衆を帥ゐ、四面より俱に集まる。城中、憂ふる勿れ。之を勉めよ』と。仁果怒り、感を城旁に執へ、之を埋めて膝に至り、馳せて之を騎射す。死に至るまで、聲色逾厲し。叔良、城に嬰りて固く守り、僅に能く自ら全くす。

感は、(三) 豊生の孫なり。

庚申、(三) 隴州の刺史陝人常達、薛仁果を宜祿川に撃ち、斬首千餘級。

上、從子襄武公琛・太常卿鄭元璫を遣はし、女妓を以て突厥の始畢可汗に遺る。壬戌、(三) 始畢復た骨咄祿特勒を遣はして來らしむ。

癸亥、(三) 白馬の道士傅仁均、(四) 戊寅曆を造りて成る。奏上して之を行ふ。

薛仁果、屢常達を攻め、克つ能はず。乃ち其將件士政を遣はし、數百人を以て詐り降らしむ。達厚く之を撫す。乙丑、士政、隙を伺ひ、其徒を以て達を劫し、城中の二千人を擁して、仁果に降る。

【三】 劉豊生は高齊の將、潁川に死す。

【三六】 隴州。今の陝西省關中道隴縣。

【三七】 宜祿川。兩涇二州の間に在り。貞觀二年、幽の新年及び涇の保定・靈臺を分ちて宜祿縣を置く。

【三八】 上、禪を受くるの後、骨咄祿嘗て來り使す。

【三九】 白馬縣。涇州を帶ぶ。

【四〇】 戊寅曆。唐、禪を受けて國を建つるや、歲、戊寅に在り、故に以て曆に名づく。

達、仁果を見、詞色、屈せず。仁果、壯として之を釋す。奴賊帥張貴、達に謂つて曰はく、『汝、我を識るか』と。達曰はく、『汝は死を逃るる奴賊なるのみ』と。貴怒り、之を殺さんと欲す。人、之を救ひ、免るるを得たり。

辛未、隋の太上皇を追諡して煬帝と爲す。

宇文化及、魏縣に至る。張愔等、之を去らんと謀る。事覺はれ、化及、之を殺す。腹心稍く盡き、兵勢日に蹙まり、兄弟更に他の計無く、但だ相聚まりて酣宴し、女樂を奏す。化及酔うて智及を尤めて曰はく、『我初め知らず。汝が計を爲し、強ひて來りて我を立つるに由る。今、向ふ所成る無く、士馬日に散ず。君を弑するの名を負ひ、天下の容れざる所なり。今者族を滅ぼすは、豈に汝に由らずや』と。其兩子を持して泣く。智及怒りて曰はく、『事捷つの日、初め尤を賜はらず。其の將に敗れんとするに及び、乃ち罪を歸せんと欲す。何ぞ我を殺して以て寶建德に降らざる』と。數、相關闚し、言、長幼無く、醒めて復た飲む。此を以て恒と爲す。其衆多く亡ぐ。化及自ら、必ず敗れんことを知り、嘆じて曰はく、『人生は固より當に死すべし。豈に一日も帝と爲らざらんや』と。是に於て、秦王浩を燒殺し、皇帝の位に魏縣に即き、

【四二】 宇文化及、封許公を襲ぐ、因つて以て國號と爲す。

國を許と號し、天壽と改元し、百官を署置す。

冬十月壬申朔、日、之を食する有り。

戊寅、突厥の骨咄祿を宴す。骨咄祿を引きて御坐に升らしめ、以て之を寵す。
 李密將に至らんとす。上、使を遣はして迎へ勞ふこと、道に相望む。密大に喜び、其徒に謂つて曰はく、「我、衆百萬を擁し、一朝、甲を解きて唐に歸す。山東の連城數百、我が此に在るを知り、使を遣はして之を招かば、亦當に盡く至るべし。寶融に比して、功亦細ならず。豈に一台司を以て處せられざらんや」と。己卯、長安に至る。有司供待すること稍薄し。所部の兵、累日、食を得ず。衆心頗る怨む。既にして密を以て光祿卿・上柱國と爲し、爵邢國公を賜ふ。密既に望に満たず、朝臣又多く之を輕んじ、執政者或は來りて賄を求む。意甚だ不平なり。獨り上、之を親禮し、常に呼びて弟と爲し、舅の子獨孤氏を以て之に妻す。

庚辰、右翊衛大將軍淮安王神通に詔して、山東道安撫大使と爲し、山東の諸軍並に節度を受け、黃門侍郎崔民幹を以て副と爲す。

鄧州の刺史呂子臧、撫慰使馬元規と與に、朱粲を撃ちて之を破る。子臧、元規に言つて曰はく、「粲新に敗れ、上下危み懼る。請ふ力を併せて之を撃たん。一舉にして滅ぼす可からん。若し復た遷延し、其徒稍く集まり、力彊く食盡き、死を我に致さば、患を爲すこと方に深からん」と。元規、從はず。子臧、獨り所部の兵を以て之を撃たんと請ふ。元規、許さず。既にして、粲、餘衆を收集し、兵

【四二】寶融、河西を以て漢の光武に歸す。李密自ら謂ふ、之に過ぎたりと。
 【四三】崔民幹は、山東の望族なり。故に神通に副として以て諸郡縣を招撫せしむ。

復た大に振ひ、自ら楚帝と冠軍に稱し、昌達と改元す。進みて鄧州を攻む。子臧、膺を撫し、元規に謂つて曰はく、「老夫、今、公に坐して死せん」と。粲、南陽を圍む。會、霖雨にて城壞る。所親、子臧に降らんことを勸む。子臧曰はく、「安んぞ天子の方伯にして賊に降る者有らんや」と。麾下を帥る、敵に赴きて死す。俄にして城陥り、元規も亦死す。

癸未、王世充、李密の美人・珍寶及び將卒十餘萬人を收め、東都に還り、闕下に陳ぬ。乙酉、皇泰主・大赦す。丙戌、世充を以て太尉・尚書令、内外諸軍事と爲し、仍て之をして太尉府を開き、官屬を備置し、人物を妙選せしむ。世充、裴仁基父子が驍勇なるを以て、深く之を禮す。徐文遠、復た東都に入り、世充を見れば、必ず先づ拜す。或るひと問うて曰はく、

「君、倨りて李密を見、而して王公を敬するは、何ぞや」と。文遠曰はく、「魏公は君子なり。能く賢士を容る。王公は小人なり。能く故人を殺す。吾何ぞ敢て拜せざらんや」と。

李密の總管李育德、武陟を以て來り降る。陟州の刺史に拜す。育德は諱の孫なり。其餘の將佐劉德威・賈閏甫・高季輔等、或は城邑を以て、或は衆を帥る、相繼ぎて來り降る。初め、北海の賊帥綦公順、其徒三萬を帥りて、郡城を攻め、已に其外郭に克ち、進みて子

【四四】南陽は即ち鄧州なり。
 【四五】是年二月、馬元規を遣はす、今死す。
 【四六】内外諸軍事の上に總督の二字を脱す。
 【四七】倨りて李密を見ること、上の七月に見ゆ。
 【四八】武陟、河内郡修武縣、開皇十六年、析ちて武陟郡を置く。
 【四九】李諱は一百七十六卷陳の長城公至德三年に見ゆ。
 【五〇】北海、大業の初、青州を以て北海郡と爲す。綦は姓。

城を攻む。城中、食盡く。公順自ら謂へらく、克つこと旦夕に在りと。備を爲さず。明經劉蘭成、城中の驍健百餘人を糾合して、之を襲撃し、城中の見兵、之に繼ぐ。公順、大に敗れ、營を棄てて走る。郡城、全きを獲たり。是に於て、郡官及び望族、城中の民を分ちて六軍と爲し、各之を將ゐ、蘭成も亦一軍を將ゐる。宋書佐といふ者有り、諸軍を離間して曰はく、「蘭成、衆心を得たり。必ず諸人の不利を爲さん。之を殺すに如かじ」と。衆、殺すに忍びず、但だ其兵を奪ひ、以て宋書佐に授く。蘭成、終に禍に及ばんことを恐れ、亡げて公順に奔る。公順の軍中喜び譟ぎ、奉じて以て主と爲さんと欲す。固辭す。乃ち以て長史と爲す。軍事咸焉に聽く。居ること五十餘日、蘭成、軍中驍健の者百五十人を簡び、往きて北海を抄む。城を距ること四十里、十人を留め、多く草を芟り、分ちて百餘積と爲さしめ、二十里にして又二十人を留め、各大旗を執り、五六里にして又三十人を留め、險要に伏せ、蘭成、自ら十人を將ゐ、夜、城を距ること一里許にして潜伏し、餘の八十人は、便處に分置し、鼓聲を聞かば即ち人畜を抄取して亟かに去り、仍ほ一時に積草を焚かんことを約す。明晨、城中、遠望するに煙塵無く、皆出でて樵牧す。日、中に向ふや、蘭成、十人を以て直に城門に抵る。城上、鉦鼓亂發す。伏兵四に出で、雜畜千餘頭及び樵牧者を抄掠して去る。蘭成、抄者の已に遠きを度り、徐歩して還る。城中、兵を出すと雖も、伏兵有らんことを恐れ、敢て急に追はず。又、前に

【五二】明經。劉蘭成、蓋し嘗て明經科に應ず、因つて之を稱す。
 【五三】煬帝、郡の諸曹參軍を改めて書佐と爲す。

旌旗・煙火有るを見、遂に敢て進まずして還る。既にして城中、蘭成前者衆少かりしを知り、窮追せざるを悔ゆ。居ること月餘、蘭成、郡城を取らんと謀り、更に二十人を以て直に城門に抵る。城中の人、競ひ出でて之を逐ふ。行くこと未だ十里ならず、公順、大兵を將ゐて總て至る。郡兵・奔馳して城に還る。公順、兵を進めて之を圍み、蘭成、一言招諭す。城中の人争うて出で降る。蘭成、老幼を撫存し、郡官を禮遇し、宋書佐を見、亦之を禮すること舊の如く、仍ほ資送して境を出し、内外安堵す。時に、海陵の賊帥臧君相、公順が北海に據るを聞き、其衆五萬を帥ゐ、來りて之を争ふ。公順、衆少し。之を聞きて大に懼る。蘭成、公順の爲めに策を畫して曰はく、「君相、今此を去ること尚ほ遠し。必ず備を爲さざらん。請ふ將軍、道を倍して、其營を襲撃せん」と。公順、之に従ひ、自ら驍勇五千人を將ゐて、熟食を齎し、道を倍して之を襲ふ。將に至らんとし、蘭成、敢死の士二十人と與に前行し、君相の營を距ること五十里、其抄者が負擔して營に向ふを見、蘭成も亦其徒と與に蔬米・燒器を負擔し、詐りて抄者の爲し、空を擇びて行き、聽察して其號及び主將の姓名を得、暮に至りて賊と肩を比べて入り、負擔して營を巡り、其虛實を知り、其更號を得、乃ち空地に於て火を燃して營食し、三鼓に至りて、忽ち主將の幕前に於て交刀亂下し、百餘人を殺す。賊衆驚き擾る。公順の兵も亦至り、急に之を攻む。君相僅に身を以て免る。俘斬數千、其資糧・甲仗を收めて

【五四】海陵縣は江都郡に屬す。
 【五五】燒器。鍋釜の屬。
 【五六】號。軍號なり。
 【五七】更號。持更の號。

以て還る。是に由りて、公順の黨衆大に盛なり。李密が洛口に據るに及び、公順、衆を以て之に附く。密敗るるや亦來り降る。

隋の末、羣盜起る。冠軍司兵李襲譽、西京の留守陰世師に説く、「兵を遣はして永豐倉に據り、粟を發して以て貧乏を賑はし、庫物を出して戰士を賞し、檄を郡縣に移し、心を同じくして賊を討たん」と。世師、用ふる能はず。乃ち兵を山南に募らんことを求む。世師、之を許す。上、長安に克ち、漢中より召し還し、太府少卿と爲す。乙未、襲譽の籍を宗正に附く。襲譽は襲志の弟なり。

丙申、朱粲、浙州に寇す。太常卿鄭元璠を遣はし、步騎一萬を帥りて之を撃たしむ。

是月、納言竇抗、罷めて左武侯大將軍と爲る。

十一月乙巳、涼王李軌、皇帝の位に即き、安樂と改元す。

戊申、王軌、滑州を以て來り降る。

薛仁果が太子たるや、諸將と多く隙有り。位に即くに及び、衆心猜懼す。郝瑗、舉を哭して疾を得、遂に起たず。是に由りて國勢浸く弱し。

- 【五】 冠軍司兵。冠軍將軍府の司兵なり。
- 【五】 漢中。隋、諱を避けて漢中を以て漢川郡と爲す。唐復た漢中と曰ふ。仍ほ郡を改めて梁州と曰ふ。梁洋等の州は皆長安の南山の南に在り。
- 【五】 李襲譽の先は、亦、隴西に出づ、故にこれを屬籍に附し、以て之を親とす。
- 【六】 宗正寺は、天子の族親の屬籍を掌り、以て昭穆を別つ。
- 【六】 李襲志は時に蕭銑に事ふ。
- 【六】 浙州。浙陽郡、西魏、浙州を置く、南郷縣に治す。
- 【六】 李密既に降り、王軌來り降る。
- 【六】 去年秋七月、薛舉、帝と稱し、仁果、太子と爲る。

秦王世民、高墟に至る。仁果、宗羅睺をして、兵を將りて之を拒がしむ。羅睺數戰を挑む。世民、壁を堅くして出でず。諸將、咸、戰はんと請ふ。世民曰はく、「我が軍新に敗れ、士氣沮喪す。賊、勝を恃みて驕り、我を輕んずるの心有り。宜しく壘を閉ぢて以て之を待つべし。彼驕り我奮はば、一戰して克つ可からん」と。乃ち軍中に令して曰はく、「敢て戰を言ふ者は斬らん」と。相持するこ

と六十餘日、仁果、糧盡く。其の將梁胡郎等、所部を帥りて來り降る。世民、仁果の將士心を離せるを知り、行軍總管梁實に命じ、淺水原に營して以て之を誘はしむ。羅睺、大に喜び、銳を盡して之を攻む。梁實、險を守りて出でず。營中、水無く、人馬飲まざる者數日。

羅睺、之を攻むること甚だ急なり。世民、賊已に疲れたるを度り、諸將に謂つて曰はく、「以て戰ふ可し」と。遲明、右武侯大將軍龐玉をして、淺水原の南に陳せしむ。羅睺、兵を併せて之を撃つ。玉戰ひて幾ど支ふる能はず。世民、大軍を引ききて、原北より、其不意に出づ。羅睺、兵を引ききて還り戰ふ。世民、驍騎數十を帥りて、先づ陳を陥る。唐の兵、表裏奮撃し、呼聲、地を動かす。羅睺の士卒大に潰ゆ。斬首數千級。世民、二千餘騎を帥りて之を追ふ。竇軌、馬を叩へて苦諫して曰はく、「仁果猶ほ堅城に據る。羅睺を破ると雖も、未だ輕しく進む可からず。請ふ且く兵を按じて以て之を觀ん」と。世民曰はく、「吾、之を慮ること久し。破竹の勢、失ふ可からざるなり。舅、復た言ふ勿れ」と。遂に進

く、「吾、之を慮ること久し。破竹の勢、失ふ可からざるなり。舅、復た言ふ勿れ」と。遂に進

- 【五】 新に敗れ。是年七月の淺水原の敗を謂ふ。
- 【六】 舅。世民は、竇氏の出なり、故に、軌を呼びて舅と爲すなり。

仁果、城下に陳す。世民、涇水に據りて之に臨む。仁果の驍將渾幹等數人、陳に臨みて來り降る。仁果懼れ、兵を引きて城に入りて拒ぎ守る。日暮るるに向ひ、大軍繼ぎて至る。遂に之を圍む。夜半、城を守る者、争うて自ら投下す。仁果、計窮まり、己酉、出で降る。其精兵萬餘人、男女五萬口を得たり。諸將皆賀す。因つて問うて曰はく、「大王、一戦して勝ち、遽に歩兵を捨て、又、攻具無く、輕騎直に城下に造る。衆皆以爲へらく克たじと。而るに卒に之を取りしは何ぞや」と。世民曰はく、「羅睺が將ある所は、皆隴外の人にして、將驍に卒悍なり。吾特に其不意に出でて之を破り、斬獲、多からず。若し之を緩めば則ち皆城に入らん。仁果撫して之を用ひば、未だ克ち易からざるなり。之を急にせば、則ち散じて隴外に歸らん。」折

【七〇】折。當に折に作るべし。
【六一】隋の時より親王府に文學有り。

撫虛弱にして、仁果、膽を破り、謀を爲すに暇あらず。此れ吾の克ちし所以なり」と。衆皆悦服す。世民が得る所の降卒、悉く仁果兄弟及び宗羅睺・翟長孫等をして之を將ゐしめ、之と與に射獵し、疑問する所無し。賊、威を畏れ恩を衒み、皆、死を效さんことを願ふ。世民、褚亮の名を聞き、求訪して之を獲、禮遇甚だ厚く、引きて王府の文學と爲す。上、使を遣はし世民に謂つて曰はしむ、「薛舉父子、多く我が士卒を殺せり。必ず盡く其黨を誅し、以て冤冤に謝せん」と。李密諫めて曰はく、「薛舉、無辜を虐殺せり。此れ其の亡ぶる所以なり。陛下何ぞ焉を怨まん。懷服の民は、撫せざる可からず」と。乃ち命じて其謀首を戮し、餘は皆之を赦さしむ。上、李

密をして、秦王世民を爾州に迎へしむ。密自ら智略功名を恃み、上に見えて猶ほ傲る色有り。世民に見ゆるに及び、覺えず驚き服し、私に殷開山に謂つて曰はく、「眞に英主なり。是の如くならずんば、何ぞ以て禍亂を定めんや」と。詔して、員外散騎常侍姜暮を以て秦州の刺史と爲す。暮、撫するに恩信を以てす。盜賊悉く歸首す。士民、之に安んず。

徐世勣、李密の舊境に據り、未だ屬する所有らず。魏徵、密に隨つて長安に至る。(久シク朝廷ノ知ル)乃ち自ら山東を安集せんと請ふ。上、以て祕書丞と爲す。傳に乗りて黎陽に至り、徐世勣に書を遣り、之に早く降らんことを勸む。世勣、遂に計を決して西に向ひ、長史陽翟の郭孝恪に謂つて曰はく、「此民衆土地は、皆魏公の有なり。吾若し上表して之を獻せば、是れ主の敗を利とし、自ら功と爲し、以て富貴を邀むるなり。吾實に之を恥づ。今宜しく郡縣の戸口士馬の數を籍し、以て魏公に啓し、自ら之を獻せしむべし」と。乃ち孝恪を遣はし、長安に詣らしめ、又糧を運びて、以て淮安王神通に餉る。上、世勣の使者至ると聞けども、表無く、止だ啓有り密に與ふ。甚だ之を怪しむ。孝恪、具に世勣の意を言ふ。上乃ち嘆じて曰はく「徐世勣は、德に背かず、功を邀めず、眞に純臣なり」と。姓を李と賜ふ。孝恪を以て宋州の刺史と爲し、世勣と與に虎牢以東を經營せ

- 【六一】陽翟縣は襄城郡に屬す。
- 【七〇】李密、國を建てて魏公と稱す。
- 【七一】神通、時に、山東を安撫す。
- 【七二】時に世勣に黎州總管を授け、英國公に封す。
- 【七三】宋州。復た梁郡を以て宋州と爲す。此時、唐未だ宋州を有する能はず。

しめ、得る所の州縣は、(四)之に委ねて選補せしむ。

癸丑、獨孤懷恩、堯君素を蒲反に攻む。行軍總管趙慈景、帝の女桂陽公主に向す。君素の擒に

する所と爲る。首を城外に梟し、以て降意無きを示す。

癸亥、秦王世民、長安に至り、薛仁果を市に斬り、常達に帛三百段を

賜ひ、(五)劉威に平原郡公を贈り、忠壯と諡し、件士政を殿庭に撲殺し、張

貴が尤も淫暴なるを以て之を腰斬す。上、將士を享勞し、因つて羣臣に謂

つて曰はく、『諸公共に相翊戴し、以て帝業を成す。若し天下承平ならば、

共に富貴を保つ可からん。(六)王世充をして志を得しめば、公等豈に種有

らんや。薛仁果君臣の如き、豈に以て前鑑と爲さざる可けんや』と。己巳、

(七)劉文靜を以て戸部尚書と爲し、陝東道行臺左僕射を領せしめ、殷開山

の爵位を復す。

李密、驕貴なること日久しく、又、自ら國に歸するの功を負み、朝廷

之を待つこと、(八)本望に副はず、鬱鬱として樂しません。嘗て大朝會に遇

ひ、密、(九)光祿卿たり、食を進むるに當り、深く以て恥と爲し、退きて以

て左武衛大將軍王伯當に告ぐ。伯當の心も亦怏怏たり。因つて密に謂つて

曰はく、『天下の事は、公の度内に在るのみ。今、(一〇)東海公、黎陽に在り、

(一一)襄陽公、羅口に在り。河南の兵馬、指を屈して計る可し。豈に久しく

此の如きを得んや』と。密大に喜び、乃ち策を上を獻じて曰はく、『臣虚し

く榮寵を蒙り、京師に安坐し、曾て報効する無し。山東の衆は、皆臣の故

時の麾下なり。請ふ往きて收めて之を撫し、國威に憑籍せば、王世充を取

ること、(一二)地芥を拾ふが如くならんのみ』と。上、密の故の將士が多く世充

に附かざるを聞き、亦、密を遣はして往きて之を收めしめんと欲す。羣臣

多く諫めて曰はく、『李密は狡猾にして反を好む。今之を遣らば、魚を泉

に投じ、虎を山に放つが如く、必ず反らざらん』と。上曰はく、『帝王は自

ら天命有り。小子の能く取る所に非ず。借使叛き去るとも、(一三)蒿箭を以て

蒿中を射るが如くならんのみ。今、二賊をして、交、鬪はしめば、吾、以

て坐ながら其弊を收む可からん』と。辛未、密を遣はして山東に詣り、其

餘衆の未だ下らざる者を收めしむ。密、賈閏甫と偕に行かんと請ふ。上、

之を許す。密及び閏甫に命じ、同じく御榻に升らしめて食を賜ひ、卮酒を

傳飲して曰はく、『吾三人同じく是酒を飲み、以て同心を明かにす。善く功

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德元年

【四】之に委ねて官吏を選補せしむるなり。

【五】蒲反。漢志には蒲反に作り、後始めて蒲坂に作る。

【六】常達が屈せざるを賞する也。唐の制、凡そ十段を賜ふには、其率、絹三匹、布三端、綿四斤、若し雜綵十段なるときは、絲布二匹、紬二匹、綾二匹、縵四匹なり。

【七】劉威が節に死するを賞するなり。

【八】薛仁果君臣に因りて以て相戒むるなり。

【九】是より先、劉文靜・殷開山、皆、淺水原の敗を以て名を除かる。

【一〇】事、前に見ゆ。

【一一】光祿卿の職は、邦國の酒醴膳羞の事を掌り、太官・珍羞・良醴・掌醢四署の官屬を總べ、朝會宴饗には、其等差を節し、其豐約を量り、以てこれを供す。故に食を進むるに當る。

【一二】東海公。密、徐世勣を封じて東海公と爲す。

【一三】襄陽公。未だ誰たるを知らず。密の將張善相、時に伊州の刺史たり、襄城に據る。襄城より北に出づれば羅口なり。蓋し李密、善相を封じて襄城公と爲し、伯當、之を指して言ふならん。然らば襄陽公は當に襄城公に作るべからん。

【一四】地芥。草芥の横はりて地上に在る者を謂ふ。俯して捨へば、易くして必ず得べし。

【一五】蒿箭云云。蒿は蓬蒿の屬、地に叢生す。人、皆、其

名を建て、以て朕が意に副へ。丈夫は一言、人に許せば、千金にも易へず。人有り確執して、弟が行くを欲せず。朕、赤心を弟に推す、他人の能く問する所に非ざるなり」と。密・閔甫、再拜して命を受く。上、又、王伯當を以て密の副と爲して之を遣はす。

大鳥五有り、樂壽に集まり、羣鳥數萬、之に従ふ。日を経て乃ち去る。

竇建德、以て己の瑞と爲し、五鳳と改元す。宗城の人、玄圭を得て建德に獻する者有り。宋正本及び景城の丞會稽の孔德紹、皆曰はく、「此

れ天の以て大禹に賜ひし所なり。請ふ國號を改めて夏と曰はん」と。

建德、之に従ふ。正本を以て納言と爲し、德紹を内史侍郎と爲す。初め王

須拔、幽州を掠め、流矢に中りて死す。其將魏刁兒、代りて其衆を領し、

深澤に據り、冀定の間を掠め、衆、十萬に至り、自ら魏帝と稱す。

建德僞りて與に連和す。刁兒、備を弛む。建德、襲撃して之を破り、遂に

深澤を圍む。其徒、刁兒を執へて降る。建德、之を斬り、盡く其衆を并

す。易定等の州皆降る。唯だ冀州の刺史麴稜のみ下らず。稜の婿崔履行は、

言ふ、「奇術有り、攻者をして自ら敗れしむ可し」と。稜、之を信ず。履行、守城者に命じ、皆坐し、

の用無きを賤しむ。蒿を剉りて箭を爲り、之を蒿中に射る。其の無用にして惜むに足らざるを言ふなり。

【八六】弟、上、李密を呼びて弟と爲す。

【八七】宗城縣は清河郡に屬す。舊、廣宗と曰ふ。

【八八】景城縣は河間郡に屬す。舊、成平と曰ふ。隋、越州を改めて會稽郡と爲す。

【八九】竇建德、初め長樂王と稱す。

【九〇】深澤縣は博陵郡に屬す。

【九一】時に信都郡を冀州と爲し、博陵郡を定州と爲す。

【九二】麴稜は時に唐に附く。

【九三】崔暹は齊の高氏父子に事へ、疆禦を畏れざるを以て用ひらる。

暹の孫なり。自ら

妄に鬪ふを得る母からしめ、曰はく、「賊、城に登ると雖も、汝が曹、怖るる勿れ、吾將に賊をして自ら縛せしめんとす」と。是に於て壇を爲り、夜、章醜を設け、然る後自ら衰絰を衣、竹を杖として北樓に登りて慟哭し、又、婦女をして屋に升りて四面して裙を振はしむ。建德、之を攻むること急なり。稜將に戦はんとす。履行固く之を止む。俄にして城陷る。履行、哭すること猶ほ未だ已まず。建德、稜を見て曰はく、「卿は忠臣なり」と。厚く之を禮し、以て内史令と爲す。

十二月壬申、詔して、秦王世民を以て太尉・使持節・陝東道大行臺と爲し、其蒲州河北諸府の兵馬、竝に節度を受く。

癸酉、西突厥の曷娑那可汗、宇文化及の所より來り降る。

隋の將堯君素、河東を守る。上、呂紹宗・韋義節・獨孤懷恩を遣はし、相繼ぎて之を攻めしむ。俱に下らず。時に外圍嚴急なり。君素、木鵝を爲り、表を頸に置き、具に事勢を論じ、之を河に浮ぶ。河陽の守者、之を得、

東都に達す。皇泰主見て歎息し、君素を金紫光祿大夫に拜す。龐玉・皇甫

無逸、東都より來り降る。上、悉く遣はして城下に詣り、爲めに利害を陳せしむ。君素、從はず。又、

金券を賜ひ、許すに死せざるを以てす。其妻、又、城下に至り、之に謂つて曰はく、「隋室已に亡べ

【九四】蒲州。河東郡を以て蒲州と爲す。河北。大河以北黎相の地を謂ふ。諸府。諸總管府なり。

【九五】隋の煬帝、曷娑那可汗を以て自ら從ふ。煬帝被せられ、化及に従ひしなり。

【九六】義寧元年九月、屈突通、堯君素を留めて河東を守らしむ。呂紹宗、之を攻め、克たず、韋義を以てこれに代らしむ、又克たず、武德元年九月、獨孤懷恩を以てこれに代らしむ、仍ほ下らず。

り。君何ぞ自ら苦しむ」と。君素曰はく、「天下の名義は、婦人の知る所に非ず」と。弓を引きて之を射る。弦に應じて倒る。君素も亦自ら・濟らざるを知る、然れども志、守死在り。言・國家に及ぶ毎に、未だ嘗て戯戯せずんばあらず。將士に謂つて曰はく、「吾、昔、(一七)主上に藩邸に事ふ。大義、死せざるを得ず。必ず若し隋祚永く終り、天命、屬する有らば、自ら當に頭を斷ちて以て諸君に付すべし。君等が持ちて富貴を取るに聽せん。今、城池甚だ固く、倉儲豐備し、大事猶ほ未だ知る可からず。横しまに心を生ず可からざるなり」と。君素、性嚴明、善く衆を御す。下、敢て叛くもの莫し。之を久しくして倉粟盡き、人相食む。又、外人を獲、微に江都の傾覆せるを知る。丙子、君素の左右薛宗・李楚客、君素を殺して以て降る。首を長安に傳ふ。君素、朝散大夫(一八)解の人王行本を遣はし、精兵七百を將ゐて他所に在らしむ。之を聞き、起き救へども及ばず。因つて君素を殺しし者の黨與數百人を捕へ、悉く之を誅し、復た城に乗りて拒ぎ守る。獨孤懷恩、兵を引きて之を圍む。

丁丑、隋の襄平の太守鄧嵩、(一九)柳城・北平の二郡を以て來り降る。嵩を以て營州總管と爲す。辛巳、太常卿鄭元璹、朱粲を商州に擊ちて之を破る。

【一七】隋書堯君素傳に、煬帝、晉王たる時、君素、左右を以て從ふ。

【一八】解。漢の古縣。後魏、安定と曰ふ。西魏改めて南解と曰ひ、又改めて綏化と曰ひ、又虞郷と曰ふ。武德元年、更めて解縣と曰ひ、別に虞郷縣を置く、竝に蒲州に屬す。今の山西省河東道解縣。

【一九】柳城・北平。隋、襄平・柳城郡を置く、今の直隸省營永平府の境に在り。北平郡は即ち平州盧龍の地、時に復た遼西郡を以て營州と爲す。

初め宇文文化及、使を遣はして羅藝を招く。藝曰はく、「我は隋の臣なり」と。其使者を斬り、煬帝の爲めに喪を發し、臨すること三日。竇建德・高開道、各使を遣はして之を招く。皆劇賊なるのみ。吾聞く、唐公已に關中を定め、人望、之に歸すと。此れ眞に吾が主なり。吾將に之に従はんとす。敢て議を沮む者は斬らん」と。會張道源、山東を慰撫す。藝、遂に表を奉り、(一〇〇)漁陽・上谷等の諸郡と皆來り降る。癸未、詔して藝を以て(一〇一)幽州總管と爲す。薛萬均は(一〇二)世雄の子なり。弟萬徹と、俱に勇略を以て藝の親待する所と爲る。詔して、萬均を以て(一〇三)上柱國・永安郡公と爲し、萬徹を車騎將軍・武安縣公と爲す。竇建德、既に冀州に克ち、兵威益々盛に、衆十萬を帥ゐて幽州に寇す。藝將に逆へ戦はんとす。萬均曰はく、「彼は衆、我は寡。出で戦はば必ず敗れん。羸兵をして城を背にし水を阻みて陳を爲さしむるに若かじ。彼必ず水を度りて我を撃たん。」と。萬均請ふ、「精騎百人を以て城の旁に伏せ、其の半度を俟ちて之を撃たん。勝たざる蔑からん」と。藝、之に従ふ。建德果して兵を引きて水を度る。萬均邀へ撃ちて大に之を破る。建德竟に其城下に至る能はず。乃ち兵を分ちて(一〇四)霍堡及び(一〇五)雍奴等の縣を掠む。藝復た邀へ撃ちて之を敗る。凡そ相拒ぐこと

【一〇〇】漁陽。隋の大業の初め、漁陽郡を無終に置く。

【一〇一】幽州。唐復た涿郡を以て幽州と爲す。

【一〇二】薛世雄が死すること一百八十四卷義寧元年に見ゆ。

【一〇三】唐の制、上柱國・郡公は、皆正二品、縣公は從二品。車騎將軍は諸衛郎將の職なり、正五品。

【一〇四】霍堡。蓋し世亂れ、霍氏の宗黨、堡を築き、以て自ら固む、因りて、以て名と爲すなり。

【一〇五】雍奴。漢の故縣。唐、幽州に屬す。今の京兆武清縣の東八里に在り。

百餘日。建德、克つ能はず。乃ち樂壽に還る。藝、隋の通直謁者温彦博を得、以て司馬と爲す。
藝、幽州を以て國に歸す。彦博、之を贊成す。詔して、彦博を以て幽州總管府の長史と爲す。未だ幾くならずして、徴して中書侍郎と爲す。兄大雅、時に黄門侍郎と爲り、彦博と近密に對居す。時人、之を榮とす。
西突厥の曷娑那可汗を以て歸義王と爲す。曷娑那、大珠を獻す。上曰はく、『珠は誠に至寶なり。然れども朕は王の赤心を寶とす。珠は用ふる所無し』と。竟に之を還す。

乙酉、車駕、周氏陂に幸し、故墅に過る。

初め羌豪、旁企地、所部を以て薛舉に附く。薛仁果が敗るるに及び、企地來り降り、長安に留まる。企地、樂します、其衆數千を帥ゐて叛き、南山に入り、漢川に出で、過ぐる所殺掠す。武侯大將軍龐玉、之を撃ち、企地の敗る所と爲る。行きて始州に至る。女子王氏を掠め、與に俱に酔うて野外に臥す。王氏、其佩刀を抜きて首を斬り、梁州に送る。其衆遂に潰ゆ。詔して、王氏に號を賜うて崇義夫人と爲す。

壬辰、王世充、衆三萬を帥ゐて穀州を圍む。刺史任瓌拒ぎて之を却

【二六】隋の煬帝、謁者臺を置き、司朝謁者・通事謁者・通直謁者・將事謁者有り。

【二七】黄門侍郎は門下省に居る、之を東省と謂ふ。中書侍郎は、中書省に居る、之を西省と謂ふ。故に曰く、近密に對居すと。

【二八】周氏陂。水經注に、白渠の尾、櫟陽に入りて、東南して渭に注ぐ。故に渠、漢の丞相周勃の冢の南を逕、冢北に弱夫冢有り、故渠の東南に周氏曲有りと、即ち周氏陂なり。高陵縣の界に在り。

【二九】故墅。高陵縣(今の陝西省關中道)の西十里店に在り。上が、舊、居りし所なり。

【一〇】旁。姓。

【一一】南山。長安の南山なり。

【一二】漢川。即ち漢中なり。

く。

上、李密をして其麾下の半を分ちて華州に留め、其半を將ゐて關を出でしむ。長史張寶德、行中に在るに預る。密亡げ去りて罪相及ばんことを恐れ、封事を上り、其の必ず叛かんことを言ふ。上の意乃ち中ごろ變じ、又、密が驚駭せんことを恐れ、乃ち敕書を降して勞來し、密をして所部を留めて徐行し、單騎入朝し、更に節度を受けしむ。密、稠桑に至りて敕を得、賈閔甫に謂つて曰はく、『敕して、我を遣はして去らしめ、故無くして復た我を召して還らしむ。天子、邈に云へり、『人有り確執して、許さず』と。此れ謖行はるるなり。吾今若し還らば、復た生理無からん。若かじ、桃林縣を破り、其兵糧を收め、北に走りて河を度らんには、信。熊州に達する比ほひ、吾已に遠からん。苟くも黎陽に至るを得ば、大事必ず成らん。公の意如何』と。閔甫曰はく、『主上、明公を待つこと甚だ厚し。況んや國家の姓名著はれて圖讖に在るをや。天下終に當に一統すべし。明公、既に已に質を委ね、復た異圖を生ず。任瓌・史萬寶、熊・穀二州に據れば、此事朝に擧げば、彼の兵夕に至らん。桃林に克つと雖も、兵

【一三】始州。普安は、漢の梓潼縣、廣漢郡ここに治す。宋、南安郡を置き、梁、南梁州を置き、後、安州と改む。西魏改めて始州と爲す。大業の初、改めて普安郡と爲し、唐復た始州と爲す。

【一四】梁州。唐、漢川郡を改めて梁州と爲す。

【一五】穀州。新安縣、後周、中州及び東垣縣を置く。州尋ぎて廢す。開皇十六年、穀州を置く。後、州を廢し、新安郡を置く。武德元年、穀州と改む。

【一六】華州。周の宣王、其弟友を鄆に封じ、漢より以來、鄆縣と爲す。後魏、東雍州及び華山郡を置く。西魏改めて華州と曰ふ。後、隋、州を廢して華陰郡を置く。後、華州と改む。

【一七】桃林縣。開皇十六年、關

豈に集まるに暇あらんや。一たび叛逆と稱せば、誰か復た人を容れんや。明公の計を爲すに、若かじ且く朝命に應じ、以て元より異心無きを明かにせんには。自然に(二〇)浸潤行はれざらん。更に・出でて山東に就かんと欲せば、徐ろに其便を思うて可なり」と。密怒りて曰はく、「唐、吾をして(二一)絳灌と列を同じくせしむ。何を以て之に堪へん。且つ讖文の應は、彼我の共にする所なり。今、我を殺さずして、聽して東行せしむるは、王者の死せざるを明かにするに足る。縱使唐、遂に關中を定むとも、山東は終に我が有と爲らん。天の與ふるを取らずして、乃ち手を束ねて人に投せんと欲す。公は吾の心腹なり。何ぞ意はん是の如くならんとは。若し心を同じくせずんば、當に斬りて後行くべし」と。閔甫泣きて曰はく、「明公、讖に應ずと云ふと雖も、近ごろ天人を察するに、稍く已に相違ふ。今、海内分崩し、人、自ら擅にせんことを思ふ。強者、雄と爲る。明公、奔亡して甫めて爾り。誰か相聽受せんや。且つ翟讓が戮を受けしよりの後、人皆謂へらく、明公、恩を棄て本を忘ると。今日誰か肯て復た・有る所の兵を以て手を束ねて公に委ねんや。彼必ず公に奪はるるを慮り、逆へて相拒抗せん。一朝、勢を失はば、豈に足を

郷・陝を分ちて桃林縣を置く。陝の西四十五里に在り。

【二〇】熊州。宜陽縣、後魏、宜陽郡を置き、東魏、陽州を置き、後周改めて熊州と曰ふ。開皇の初、郡廢す。大業の初、州廢し、河南郡に屬す。義寧二年、段達を破り、宜陽郡を置く。武德元年、熊州を置く。熊耳山を取りて以て州に名づく。今の河南省河洛道宜陽縣。

【二一】徐世勣に就かんと欲するを言ふ。

【二二】浸潤。讖言をいふ。論語類淵篇に、「浸潤の讖行はれず」とあるに本づく。

【二三】絳灌云云。韓信・彭越の如く地を割きて王たるを得ず、周勃・灌嬰と列を同じくせしむるをいふ。

容るるの地有らんや。恩を荷ふこと殊に厚き者に非ざるよりは、詎ぞ肯て深く言ひて・諱まざらんや。願はくは明公、之を熟思せよ。但だ恐る(二三)大福再びせざらんことを。苟くも明公、身を措く所有らば、閔甫亦何ぞ戮に就くを辭せん」と。密、大に怒り、刃を揮うて之を撃たんと欲す。王伯當等、固く請ひ、乃ち之を釋す。閔甫、熊州に奔る。伯當も亦密を止め、以爲へらく未だ可ならずと。密従はず。伯當乃ち曰はく、「義士の志は、存亡を以て心を易へず。公必ず聽かずんば、伯當、公と同じく死せんのみ。然れども恐らくは終に益無からん」と。密因つて使者を執へて之を斬る。庚子旦、密、桃林の縣官を結きて曰はく、「詔を奉じて暫く京師に還る。家人は請ふ縣舍に寄せん」と。乃ち驍勇數十人を簡び、婦人の衣を著、(二四)羸離を戴き、刀を裙下に藏し、詐りて妻妾の爲し、自ら之を帥ゐて縣舍に入り、須臾に服を變じて突出し、因つて縣城に據り、徒衆を驅掠し、直に南山に趣き、險に乗じて東し、人を遣はし、故の將(二五)伊州の刺史襄城の張善相に告げしめ、兵を以て應接せしむ。右翊衛將軍史萬寶、熊州に鎮し、行軍總管盛彥師に謂つて曰はく、「李密は驍賊なり。又、輔くるに王伯當を以てす。今、策を決して叛く。殆ど・當る可からざるなり」と。彥師笑つて曰はく、「請ふ數千の衆を以て之を邀へ、必ず其の首を梟せん」と。萬寶曰はく、

【二三】大福再びせず。楚の靈王の言。

【二四】羸離。婦人の頭に戴き、身を被ふもの。

【二五】伊州。襄城郡に、東魏、北荊州を置く。後周、改めて和州と曰ふ。開皇の初、改めて伊州と曰ふ。大業の初、改めて汝州と曰ひ、尋ぎて改めて郡と爲す。李密、開皇の舊州名に復す。今の河南省河洛道嵩縣。

「公、何の策を以て能く爾せん」と。彦師曰はく、「兵法は詐を尙ぶ。公の爲めに之を言ふ可からず」と。即ち衆を帥ゐて〔二五〕熊耳山を踰え、南して要道に據り、弓弩をして路を夾み高きに乗じ、刀楯をして溪谷に伏せしめ、之に令して曰はく、「賊が半ば度るを俟ち、一時に俱に發せよ」と。或るひと問うて曰はく、「聞く李密、〔二六〕洛州に向はんと欲すと。而るに公、山に入るは何ぞや」と。彦師曰はく、「密、洛に向ふ」と聲言すれども、實は、人の不意に出で、襄城に走りて張善相に就かんと欲するのみ。若し賊、谷口に入り、我、後より之を追はば、山路險隘にして、力を施す所無く、一夫後に殿せば、必ず制する能はじ。今、吾先づ谷に入るを得たり。之を擒にせんこと必せり」と。李密、既に〔二七〕陝を度り、以爲へらく餘は慮るに足らずと。遂に衆を擁して徐行し、果して山を踰えて南に出でんとす。彦師、之を撃つ。密の衆、首尾斷絶し、相救ふを得ず。遂に密及び伯當を斬り、俱に首を長安に傳ふ。彦師、功を以て爵葛國公を賜はり、〔二八〕仍ほ熊州を領す。李世勣、黎陽に在り、上、使を遣はし、密の首を以て之に示し、告ぐるに反狀を以てす。〔二九〕世勣、之が爲めに服を行ひ、君臣の禮を備へ、大に儀衛を具へ、軍を擧げて縞素し、密を黎陽山の南に葬る。密、素より

【二五】熊耳山。熊州の南に在り。

【二六】洛州。洛陽なり。

【二七】陝州の兵、既に密を邀ふる能はず。密自ら以爲へらく、山を踰えて南し、他に遂阻無し、慮るに足らざるなりと。

【二八】一本には、仍の上に「武衛將軍に拜し」の五字有り。

【二九】領。當に舊唐書に依りて鎮に作るべし。

【三〇】世勣。此を以て知を太宗に受く。

士心を得たり。哭する者多く血を歐く。

隋の右武衛大將軍李景、北平を守る。高開道、之を圍む。歳餘にして克つ能はず。遼西の太守鄧暠、兵を將ゐて之を救ふ。景、其衆を帥ゐて柳城に遷る。後將に幽州に還らんとす。道に於て、盜の殺す所と爲る。開道遂に北平を取り、進みて漁陽を陷る。郡に馬數千匹有り、衆、且に萬ならんとす。自ら燕王と稱し、始興と改元し、漁陽に都す。〔三一〕懷戎の沙門高曇晟、縣令が齋を設け士民大に集まるに因り、曇晟、僧五千人と與に、齋衆を擁して反し、縣令及び鎮將を殺し、自ら〔三二〕大乘皇帝と稱し、尼靜宣を立てて邪輪皇后と爲し、法輪と改元す。使を遣はして開道を招き、立てて齊王と爲す。開道、衆五千人を帥ゐて之に歸す。居ること數月、襲うて曇晟を殺し、

悉く其衆を并す。

法を犯せども死に至らざる者有り、上、特に命じて之を殺さしむ。〔三三〕監

察御史李素立諫めて曰はく、〔三四〕三尺の法は、王者の、天下と共にする所なり。法一たび動搖せば、人、手足を措く所無からん。陛下甫めて洪業を創む。奈何ぞ法を棄てん。臣、法司を忝くす。敢て詔を奉せず」と。上、之に従ふ。是より、特に恩遇を承く。所司に命じて授くるに七品の清要の官を以てせしむ。所司、雍州の司戸に擬す。上曰はく、「此官は要なれども清ならず」と。又、祕書郎

【三一】懷戎。後漢の潘縣、上谷郡に屬す。北齊改めて懷戎縣と爲す。隋、幽州涿郡に屬す。

【三二】大乘。釋氏、人の性識根業の各々差あるを以て、故に大乘小乗の説有り。

【三三】監察御史は従八品上。

【三四】三尺の法。三尺の竹簡を以て法律を書するなり。

に擬す。上曰はく、『此官は清なれども要ならず』と。遂に擢でて〔二五〕侍御史を授く。素立は、〔二六〕義深の曾孫なり。上、舞胡安比奴を以て散騎侍郎と爲す。禮部尚書李綱、諫めて曰はく、『古者、樂工は、士と齒せず。賢なること、子野、師襄の如しと雖も、皆、世、其業を易へず。唯だ齊の末、曹妙達を封じて王と爲し、安馬駒を開府と爲せり。國家を有つ者、以て〔二七〕殷鑑と爲す。今、天下新に定まり、建義の功臣、行賞未だ遍からず。高才碩學、猶ほ草萊に滯る。而るに先づ舞胡を擢でて五品と爲し、玉を鳴らし組を曳き、廊廟に趨翔せしむるは、以て後世を規模する所に非ざるなり』と。上、從はずして曰はく、『吾、業に已に之を授く。追ふ可からざるなり』と。

【二五】侍御史は従六品上。唐の侍御史は推彈公麻雜事を掌る。推は推鞠なり。彈は彈擧なり。公麻とは公麻の事、雜事とは臺の事總て悉く之を判するなり。

【二六】李義深は趙郡の著姓、高齊に事ふ。

【二七】子野。晉の樂師曠の字。

【二八】師襄。魯の樂師。

【二九】殷鑑。齊の後主、國を亡ぼししは、亦此に由る。詩に云ふ、殷鑑遠からず、夏后の世に在りと。

陳嶽・論じて曰はく、命を受くるの主は、號を發し令を出し、子孫の法と爲す、一も理に中らざれば、則ち厲階と爲る。今、高祖曰はく、『業に已に之を授く。追ふ可からず』と。苟くも之を授けて是ならば則ち已む。之を授けて非ならば、胡ぞ追ふ可からざらんや。人に君たるの道、『業に已に之を授く』といふを以て誠と爲さざるを得ざらんや。李軌の吏部尚書梁碩、智略有り。軌常に之に倚り、以て謀主と爲す。碩、諸胡の浸く盛なるを見、

陰に軌に勸む、『宜しく防察を加ふべし』と。是に由りて、〔四〇〕戸部尚書安修仁と隙有り。軌の子仲琰、嘗て碩に詣る。碩、禮を爲さず。乃ち修仁と、共に碩を軌に讒し、誣ふるに反を謀るを以てす。軌、碩を斃して之を殺す。胡巫有り、軌に謂つて曰はく、『上帝、當に玉女を遣はして天よりして降すべし』と。軌、之を信じ、民を發して臺を築き、以て王女を候ふ。勞費甚だ廣し。河右飢ゑ、人相食む。軌、家財を傾けて以て之を賑はせども、足らず。倉粟を發せんと欲し、羣臣を召して之を議す。曹珍等皆曰はく、『國は民を以て本と爲す。豈に倉粟を愛みて其死を坐視す可けんや』と。〔四一〕謝統師等は、皆、故の隋の官にして、心終に服せず。密に羣胡と黨を爲し、軌の故人を排し、乃ち珍を誦りて曰はく、『百姓餓うる者は、自ら是れ羸弱なり。勇壯の士は、終に此に至らず。國家の倉粟は、以て不虞に備ふ。豈に之を散じて以て羸弱を飼ふ可けんや。僕射は苟くも人情を悦ばし、國の計を爲さず。忠臣に非ざるなり』と。軌、以て然りと爲す。是に由りて、士民離れ怨む。

【四〇】其後、安修仁兄弟、軌を縛して唐に歸す。卒に梁碩が慮りし所の如し。

【四一】謝統師等が軌の執ふる所と爲ること、一百八十四卷義寧元年七月に見ゆ。

卷の第一百八十七

唐紀三

高祖神堯大聖光孝皇帝上の下

武德二年、春正月壬寅、王世充、悉く隋朝の顯官・名士を取り、太尉府の官屬と爲す。杜淹、戴胄、皆これに預る。胄は安陽の人なり。隋の將軍王隆、屯衛將軍張鎮周・都水少監蘇世長等を帥る、山南の兵を以て、始めて東都に至る。王世充、専ら朝政を總べ、事、大小と無く、悉く太尉府に關し、臺省監署、闕然たらざるは莫し、世充、三牌を府の門外に立て、一は、文學才識ありて時務を濟ふに堪ふる者を求め、一は、武勇智略ありて能く鋒を推き敵を陷るる者を求め、一は、身に冤滯有りて擁抑して申びざる者を求む。是に於て上書して事を陳ぶるもの、日に數百有り。世充、悉く引見し、躬自ら省覽し、殷勤に慰諭す。人人自ら喜び、以爲へらく言聽かれ計従はると。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德二年

【一】 武德二年。西紀六一九年なり。

【二】 安陽縣は相州を帶ぶ。

【三】 煬帝、左右領軍衛を改めて左右屯衛と爲す。

【四】 義寧元年七月、王隆を遣はして、兵に東都に會せしむ。

【五】 擁は壅と通ず。今始めて至る。

然れども終に、施行する所

無し。下、士卒、厮養に至るまで、世充、皆、甘言を以て之を悦ばせ、而して實は恩施無し。隋の馬軍總管獨孤武都、世充の親任せる所と爲る。其從弟、司隸大夫機、虞部郎楊恭慎・前の、勃海郡主簿孫師孝・步兵總管劉孝元・李儉・崔孝仁と與に、唐の兵を召さんと謀り、孝仁をして武都に説きて曰はしむ、「王公、徒らに兒女の態を爲し、以て下愚を悦ばせ、而して鄙隘貪忍にして、新舊を顧みず。豈に能く大業を成さんや。圖讖の文、「應に李氏に歸すべし」と。人皆之を知る。唐、晉陽に起り、關内を奄有し、兵、行を留めず、英雄景附す。且つ坦懐にして物を待ち、善を擧げ功を責め、舊惡を念はず、勝勢に據り、以て天下を爭ふ。誰か能く之に敵せん。吾が屬身を託すること所に非ず、坐ながら夷滅を待つ。今、(一〇)任管公の兵、近く新安に在り、又、吾の故人なり。若し間使を遣はして之を召し、夜城下に造らしめ、吾が曹共に内應を爲し、門を開きて之を納れば、事、集らざる無からん」と。武都、之に従ふ。事泄れ、世充皆之を殺す。恭慎は、(一一)達の子なり。

癸卯、秦王世民に命じ、出でて、(一二)長春宮に鎮せしむ。

宇文化及、魏州總管元寶藏を攻む。四旬にして克たず。魏徵往きて之に説く。丁未、寶藏、州を擧げて來り降る。

戊午、淮安王神通、宇文化及を魏縣に撃つ。化及、抗する能はず、東して聊城に走る。神通、魏縣を抜き、二千餘人を斬獲し、兵を引きて化及を追ひ、聊城に至り、之を圍む。

甲子、陳叔達を以て納言と爲す。

丙寅、李密が置く所の伊州の刺史張善相、來り降る。

朱粲、衆二十萬有り。漢淮の間を剽掠し、遷徙して常無し。州縣を破る毎に、其積粟を食ひ、未だ盡きずして復た他に適き、將に去らんとするとき、悉く其餘資を焚き、又、稼穡を務めず。民の餓死する者、積むが如し。粲、復た掠む可き無く、軍中、食乏し。乃ち士卒に教へて婦人嬰兒を煮て之を噉はしめて曰はく、「肉の美なる者は、人に過ぐるは無し。但だ佗國をして人有らしめば、何ぞ餒を憂へん」と。隋の著作佐郎陸從典・通事舍人顏愨楚、謫官して、(一四)南陽に在り。粲初め引きて賓客と爲す。其後、食無く、闔家皆噉ふ所と爲る。愨楚は、(一五)之推の子なり。又、諸城堡の細弱なるものを税し、以て軍食に供す。諸城堡相帥ゐて之に叛く。(一六)淮安の土豪楊士林・田瓚、兵を起して粲を攻む。諸州皆之に應ず。粲、與に、(一七)淮源に戦ひ、大に敗れ、餘衆數千を帥ゐて、(一八)菊潭に奔る。士林の家世、蠻裔なり。隋の

- 【六】 厮養。薪を析くを厮と爲し、炊烹を養と爲す。
- 【七】 煬帝、司隸臺を置き、大夫を以て之が長と爲す。諸の巡察を掌る。正四品。
- 【八】 虞部郎。山澤を掌る官。工部尙書に屬す。
- 【九】 勃海。煬帝、滄州を改めて勃海郡と爲す。
- 【一〇】 任瓌、穀州の刺史を以て新安に鎮し、管國公に封ぜらる。
- 【一一】 達。隋の觀の德王雄の弟なり。
- 【一二】 長春宮。同州朝邑縣(今の陝西省關中道)に在り、後周の宇文護の建つる所なり。

聊城は魏州に屬す。今の山東省東臨道聊城縣の西北十五里。

【一四】 南陽。鄧州。

【一五】 顏之推は、高齊の季に仕ふ。

【一六】 淮安。郡の名、今の河南省汝陽道泌陽縣。

【一七】 淮源。淮水、今の河南省汝陽道桐栢大復山に出づ。山南に淮源廟有り。

【一八】 菊潭。鄧州に屬す。今の河南省汝陽道内郷縣西北。



末、士林、鷹揚府の校尉と爲り、郡官を殺して、其郡に據る。既に朱榮を逐ひ、己巳、漢東の四郡を帥る、使を遣はして、信州總管盧江王瑗に詣り、降を請ふ。詔して、以て顯州道行臺と爲す。士林、瓚を以て長史と爲す。

初め王世充、既に元盧を殺し、人情の未だ服せざらんことを慮り、猶ほ皇泰主に媚事し、禮甚だ謙敬なり。又、請うて劉太后の假子と爲り、尊號を聖感皇太后と曰ふ。既にして漸く驕横なり。嘗て食を宮中に賜はり、家に還りて大に吐く。毒に遇へるを疑ふ。是より、復た朝謁せず。皇泰主、其の終に臣と爲らざるを知れども、力、制する能はず。唯だ内庫の綵物を取り、大に幡花を造り、又、諸の服玩を出し、僧をして貧乏に散施せしめ、以て福を求む。世充、其黨張績・董潛をして、章善・顯福二門を守らしめ、宮内の雜物、毫釐も出づるを得ず。是月、世充、人をして印及び劍を獻せしめ、又、河水の清きを言ふ。以て衆に耀かして己の符瑞と爲さんと欲すと云ふ。

上、金紫光祿大夫武功の靳孝謨を遣はし、邊郡を安集せしむ。梁師都の獲る所と爲る。孝謨、之を罵りて口を極む。師都、之を殺す。二月、詔して、爵武昌縣公を追賜し、

【一九】漢東。大業に、隋州を改めて漢東郡と爲す。
【二〇】信州。梁、信州を魚復に置く。大業に改めて巴東郡と爲す。唐復た信州と爲す。
【二一】顯州。後魏、東荊州を比陽に置く。後改めて淮州と爲す。隋の文帝、顯州と改む。今の河南省汝陽道泌陽縣。
【二二】元盧。元文都・盧楚。世充が之を殺すこと、一百八十五卷元年七月に見ゆ。
【二三】章善・顯福。東都の皇城の南面の三門、中を應天と曰ひ、左を興教と曰ひ、右を光政と曰ひ、興教の内を會昌と曰ひ、其北を章善と曰ひ、光政の内を廣運と曰ひ、其北を顯福と曰ふ。

諡して忠と曰ふ。

初めて租庸調の法を定む。丁毎に租二石・絹二匹・綿三兩。茲より以外、横しまに調斂する有るを得ず。

丙戌、詔して、諸宗姓、官に居る者は、同列の上在り、未だ仕へざる者は、其の徭役を免じ、州毎に宗師一人を置き、以て攝總し、別に團伍と爲す。

張侯德、涼に至る。李軌、其羣臣を召し、廷議して曰はく、「唐の天子は吾の從兄にして、今已に位を京邑に正す。一姓、自ら天下を争ふ可からず。吾、帝號を去り其封爵を受けんと欲す。可ならんか」と。曹珍曰はく、「隋、其鹿を失ひ、天下共に之を逐ふ。王と稱し帝と稱する者、奚ぞ雷一人のみならん。唐は關中に帝たり、涼は河右に帝たるは、固より相妨げず。且つ已に天子と爲る。奈何を復た自ら貶黜せん。必ず小を以て大に事へんと欲せば、請ふ。蕭管が魏に事ふるの故事に依らん」と。軌、之に從ふ。戊戌、軌、其尙書左丞鄧曉を遣はして入見せしめ、書を奉りて皇從弟大涼皇帝臣軌と稱し、而して官爵を受けず。帝怒り、曉を拘へて、

【二四】唐の制、凡そ田を授かる者は、丁、歳に粟二斛を出す、之を租と謂ふ。郷の出す所に隨つて、歳に絹二匹・綾絁二丈を輸し、布は五の一を加へ、綿三兩、麻三斤、蠶郷に非ざれば銀十四兩を輸す。之を調と謂ふ。人の力を用ふる、こと、歳に二十日、閏には二日を加ふ。役せざる者は絹三尺と爲す。之を庸と謂ふ。事有りて役を加ふること二十五日なる者は調を免す。三十日なる者は、租調皆免す。正役に通じて、五十日に過ぎず。
【二五】去年八月、張侯德を遣はして李軌を册拜せしむ。
【二六】蕭管が魏に事ふる事、一百六十五卷梁の元帝承聖三年に見ゆ。

遣らず、始めて師を興して之を討たんと議す。初め隋の煬帝、自ら吐谷渾を征す。吐谷渾の可汗伏允、數千騎を以て党項に奔る。煬帝、其質子順を立てて主と爲し、餘衆を統べしむ。入るを果さずして還る。會中國喪亂し、伏允復た還りて其故地を收む。上、禪を受く。順、江都より長安に還る。上、使を遣はし、伏允と連和し、李軌を撃たしめ、順を以て之に還さんことを許す。伏允喜び、兵を起して軌を撃ち、數使を遣はして入貢せしめて順を請ふ。上、之を遣る。

閏月、朱粲、使を遣はし、降らんと請ふ。詔して、粲を以て楚王と爲し、自ら官屬を置くを聽し、便宜を以て事に從はしむ。

宇文化及、珍貨を以て海曲の諸賊を誘ふ。賊帥王薄、衆を帥ゐて之に從ひ、與に共に聊城を守る。竇建德、其羣下に謂つて曰はく、「吾は隋の民たり。隋は吾が君たり。今、宇文化及、弑逆せり。乃ち吾が讎なり。吾、以て討たざる可からず」と。乃ち兵を引ききて聊城に趣く。淮安王神通、聊城を攻む。化及、糧盡き、降らんと請ふ。神通、許さず、安撫副使、崔世幹、神通に、之を許さんことを勸む。神通曰はく、「軍士暴露すること日久しく、賊、食盡き計窮まる。克たんと旦暮に在り。吾當に攻取して以て國威を示し、且つ其玉帛を散じて以て戰士を勞ふべし。若し其の降を受けば、將た何を以て軍賞と爲さんや」と。世幹曰はく、「今、

【七〇】可汗伏允の事一百八十一卷煬帝大業五年に見ゆ。
 【七一】長安に還る。煬帝既に弑せられ、順、長安に逃れ還る。
 【七二】去年十月、神通を遣はして山東を安撫せしめ、崔民幹を副と爲す。今、世幹と書す。當に一の誤あるべし。

建德方に至る。若し化及未だ平がずば、内外敵を受け、吾が軍必ず敗れん。夫れ攻めずして之を下さば、功たること甚だ易し。奈何ぞ其玉帛を食りて、(降)受けざらんや」と。神通怒り、世幹を軍中に囚ふ。既にして宇文士及、濟北より之に餽る。化及の軍稍振ひ、遂に復た拒ぎ戰ふ。神通、兵を督して之を攻む。貝州の刺史趙君德、堞を攀ちて先登す。神通、心に其功を害み、兵を收め、戰はず。君徳大に詬りて下る。遂に克たず。建徳の軍且に至らんとす。神通、兵を引き退く。建徳、化及と連戦し、大に之を破る。化及復た聊城に保す。建徳、兵を縦ち、四面より急に攻む。王薄、門を開きて之を納る。建徳、城に入り、化及を生擒し、先づ隋の蕭皇后に謁し、語皆臣と稱し、素服して煬帝を哭して哀を盡し、傳國の璽及び鹵簿儀仗を收め、隋の百官を撫存し、然る後逆黨宇文智及・楊士覽・元武達・許弘仁・孟景を執へ、隋の官を集めて之を斬り、首を軍門の外に梟す。檻車を以て化及并に二子承基・承趾を載せ、襄國に至りて之を斬る。化及且に死せんとし、更に餘言無く、但だ云ふ、「夏王に負かず」と。建徳、戰勝ち城に克つ毎に、得る所の資財、悉く以て將士に分ち、身、取る所無し。又、肉を噉はず、常に蔬茹粟飯を食ふ。妻曹氏、紈綺を衣ず。役する所の婢妾、纒に十許人。化及を破るに及び、隋の宮人千數を得、即時に之を散遣す。隋の黃門侍郎裴矩を以て右僕射と爲し、選事を掌らしめ、兵部侍郎崔君肅を侍中と爲し、少府令何稠を工部尚書と爲し、

【七三】貝州。時に復た潯河郡を以て貝州と爲す。
 【七四】襄國。煬帝、邢州を改めて襄國郡と爲す。
 【七五】少府令。少府監の長官。

右司郎中柳調を左丞と爲し、虞世南を黃門侍郎と爲し、歐陽詢を太常卿と爲す。詢は紇の子なり。自餘は才に隨つて職を授け、委ぬるに政事を以てす。其の留まるを願はず、關中及び東都に詣らんと欲する者は、亦之を聽し、仍ほ資糧を給し、兵を以て之を援けて境を出でしむ。隋の驍果、尙ほ萬人に近し。亦各、縱遣し、其の之く所に任す。又、王世充と好を結ぶ。使を遣はし、表を隋の皇太子に奉ず。皇太子、封じて夏王と爲す。建德、羣盜より起り、國を建つと雖も、未だ文物・法度有らず。裴矩、之が爲めに朝儀を定め、律令を制す。建德甚だ悦ぶ。毎に之に従ひて典禮を諮訪す。

甲辰、上、羣臣を考第し、李綱・孫伏伽を以て第一と爲し、因つて置酒して高會す。裴寂等に謂つて曰はく、「隋氏、主驕り臣諂ふを以て、天下を亡へり。朕位に即きて以來、毎に心を虚しくして諫を求む。然れども惟だ李綱のみ、差忠款を盡し、孫伏伽のみ、誠直と謂ふ可し。餘人は猶ほ敝風を踵ぎ、眉を俛るのみ。豈に朕が望む所ならんや。朕、卿を視ること愛子の如し。卿當に朕を視ること慈父の如くなるべし。懷ふこと有れば必ず盡し、自ら隱す勿れ」と。因つて命じて君臣の敬を捨て、歡を極めて罷む。

前の御史大夫段確を遣はし、朱粲に使せしむ。初め上、隋の殿内少監たるや、宇文士及、尙輦奉御たり。上、之と善し。士及、化及に従つて黎陽に至る。上、手詔して之を召す。士及、潜に家僮を遣はし、問道より長安に詣らしめ、又、使者に因りて金環を獻す。化及、魏縣に至り、兵勢日に蹙まる。士及、之に勸めて唐に歸せしむ。化及、從はず。内史令封德彝、士及に説き、濟北に於て、軍糧を徵督し、以て其の變を觀しむ。化及、帝と稱し、士及を立てて蜀王と爲す。化及、死するや、士及、德彝と、濟北より來り降る。時に士及の妹、昭儀たり。是に由りて、上儀同を授く。上、封德彝が隋室の舊臣なるに諂巧不忠なるを以て、深く之を誚責し、罷遣して舍に就かしむ。德彝、祕策を以て上を干す。上悦び、尋ぎて内史舍人に拜し、俄に侍郎に遷す。

甲寅、隋の夷陵郡丞、安陸の許紹、黔安、武陵、澧陽等の諸郡を帥ゐて來り降る。紹、幼にして帝と同じく學ぶ。詔して、紹を以て峽州の刺史と爲し、爵安陸公を賜ふ。

丙辰、徐世勣を以て黎州總管と爲す。

丁巳、驃騎將軍張孝珉、勁卒百人を以て、王世充を汜水城に襲ひ、其郭に入り、米船百五十艘を沈む。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德二年

【一〇】 左司郎中。煬帝三年、尙書都司に始めて左右司郎各一人を置く、都省の職を掌る。品は諸曹郎と同じく、從五品。

【一一】 歐陽紇は、一百七十卷陳の宣帝太建元年に見ゆ。

【一二】 隋の尙輦局は殿内省に屬す。

【一三】 金環。長安に還らんと欲するを言ふ。

【一四】 夷陵郡。梁、宜州を夷陵郡に置く。西魏改めて拓州と曰ひ、後周改めて峽州と曰ふ。隋の煬帝改めて夷陵郡と爲す。

【一五】 安陸。隋の煬帝、安州を改めて安陸郡と爲す。

【一六】 黔安。黔州を改めて黔安郡と爲す。

【一七】 武陵。郡、梁、武州を置く。煬帝復た郡と爲す。

【一八】 澧陽。隋、初め澧州を置き、大業に改めて郡と爲す。

【一九】 黎州。後魏、黎陽郡を黎陽縣に置く。後、黎州を置く。隋に至りて廢す。今復た黎州を置く。

【二〇】 汜水。隋志に汜水縣、舊成阜と曰ふ。即ち虎字なり。開皇十八年、成阜を改めて汜水と曰ふ。

己未、世充、穀州に寇す。世充、秦叔寶を以て龍驤大將軍と爲し、程知節を將軍と爲し、之を待つこと皆厚し。然れども二人、世充が詐多きを疾む。知節、叔寶に謂つて曰はく、「王公は、器度淺狹にして、妄語多く、好みて呪誓を爲す。此れ乃ち老巫嫗なるのみ。豈に撥亂の主ならんや」と。世充、唐の兵と九曲に戦ふ。叔寶、知節、皆、兵を將ゐて陳に在り、其徒數十騎と、西に馳すること百許歩、馬を下りて世充を拜して曰はく、「僕、公の殊禮を荷ひ、深く報効を思ふ。公、性猜忌にして、喜びて讒言を信ず。僕が身を託するの所に非ず。今、仰ぎ事ふる能はず。請ふ此より辭せん」と。遂に馬を躍らして來り降る。世充、敢て逼らず。上、秦王世民に事へしむ。世民、素より其名を聞き、厚く之を禮す。叔寶を以て馬軍總管と爲し、知節を左三統軍と爲す。時に世充の驍將、又、驃騎、武安の李君羨、征南將軍、臨邑の田留安有り、亦、世充の人と爲りを惡み、衆を帥ゐて來り降る。世民、君羨を引きて左右に置き、留安を以て右四統軍と爲す。

王世充、李育徳の兄厚徳を獲嘉に囚ふ。厚徳、其守將趙君穎と與に、殷州の刺史段大師を逐ひ、城を以て來り降る。厚徳を以て殷州の刺史と爲す。

寶建徳、邢州を陥れ、總管陳君賓を執ふ。上、殿内監竇誕、右衛將軍宇文歆を遣はし、并州總管齊王元吉を助けて、晉陽を守らしむ。誕は抗の子なり。帝の女襄陽公主に向す。元吉、性驕侈にして、奴客婢妾數百人、好みて之をして甲を被り、戲に攻戰を爲さしむ。前後死傷甚だ衆し。元吉も亦嘗て傷を被る。其乳母陳善意、苦諫す。元吉醉うて怒り、壯士に命じて之を歐殺せしむ。性、田獵を好み、罔罟三十車を載せ、嘗て言ふ、「吾、寧ろ三日食はずとも、一日獵せざる能はず」と。常に誕と遊獵し、人の禾稼を蹂躙す。又、左右を縦ちて民物を奪ふ。衢に當りて人を射、其の箭を避くるを觀る。夜、府門を開き、他室に宣淫す。百姓憤怒す。敢屢、諫むれども納れず。乃ち表して其狀を言ふ。壬戌、元吉、坐して官を免せらる。

癸亥、陟州の刺史李育徳、王世充の河内の堡聚三十一所を攻め下す。乙丑、世充、其兄の子君廓を遣はし、陟州を侵さしむ。李育徳、撃ちて之を走らす。斬首千餘級。李厚徳、歸りて親の疾を省し、李育徳をして獲嘉を守らしむ。世充、兵を併せて之を攻む。丁卯、城陷る。育徳及び弟三人皆戰死す。己巳、李公逸、雍丘を以て來り降る。杞州總管に拜し、其族弟善行を以て杞州の刺史と爲す。

【四九】寶抗は後の兄なり。
 【五〇】陟州。是年、育徳、修武縣濁鹿城を以て降る。陟州を置く。武陟に因りて名と爲す。
 【五一】李厚徳蓋し濁鹿に歸りて親を省し、而して育徳をして獲嘉を守らしむるなり。
 【五二】雍丘、杞州。梁郡雍丘縣に後魏、陽夏郡を置く。開皇、郡を廢して杞州を置く。大業、州を廢して縣と爲す。李公逸、亂に因りて之に據る。今復た州を置く。時に邊要の州には、總管及び刺史を置く。

隋の吏部侍郎楊恭仁、宇文化及に従つて河北に至る。化及敗るるや、魏州總管元寶藏、之を獲、己巳、長安に送る。上、之と舊有り。黃門侍郎に拜す。尋ぎて以て涼州總管と爲す。恭仁、素より邊事に習ひ、羌胡の情偽を曉る。民夷、悦服す。葱嶺より已東、竝に入りて朝貢す。

突厥の始畢可汗、其衆を將ゐて、河を度り、夏州に至る。梁師都、兵を發して之に會す。五百騎を以て劉武周に授け、句注より入りて太原に寇せしめんと欲す。會、始畢卒す。子什鉢苾、幼にして未だ立つ可からず。其弟、俟利弗設を立つ。處羅可汗と爲す。處羅、什鉢苾を以て尼步設と爲し、東偏に居らしむ。幽州の北に直る。是より先、上、右武侯將軍高靜を遣はし、幣を奉じて突厥に使せしむ。豐州に至る。始畢卒するを聞き、勅して所在の庫に納れしむ。突厥、之を聞きて怒り、入寇せんと欲す。豐州總管張長遜、高靜を遣はし、幣を以て塞を出で、朝廷の爲めに賄を致す。突厥乃ち還る。

三月、庚午、梁師都、靈州に寇す。長史楊則、擊ちて之を走らす。壬申、王世充、穀州に寇す。刺史史萬寶、戰ひて利あらず。

庚辰、隋の 北海の通守鄭虔符。文登の令方惠整及び 東海。齊郡。東平。任城。平陸。壽張。須昌の賊帥王薄等、竝に其地を以て來り降る。

王世充が新安に寇するや、外は攻取を示し、實は文武の己に附く者を召し、禪を受けんと議す。李世英深く以て不可と爲して曰はく、「四方、奔馳して東都に歸附する所以は、公が能く隋室を中興するを以ての故なり。今、九州の地、未だ其一をも清めざるに、遽に位號を正さば、恐らくは遠人、皆、叛去を思はん」と、世充曰はく、「公の言、是なり」と。長史韋節・楊續等曰はく、「隋氏の數窮まるること、理に在りて昭然たり。夫れ非常の事は、固より常人と之を議す可からず」と。太史令樂德融曰はく、「昔歲、長星出づ。乃ち舊を除き新を布くの徵なり。今、歲星、角亢に在り。亢は鄭の分野なり。若し亟かに天道に順はずんば、恐らくは王氣衰息せん」と。世充、之に従ふ。外兵曹參軍戴胄、世充に言つて曰はく、「君臣は猶ほ父子のごときなり。休戚、之を同じくす。明公、忠を竭し國に殉するに若くは莫し。則ち家國俱に安からん」と。世充、詭辭して「善し」と稱して之を遣る。世

【五三】夏州。漢の朔方の地、赫連が都せし所の統萬なり。魏、赫連を滅ぼし、以て統萬鎮と爲す。魏の太和十一年、夏州を置く。隋の大業中、州を改めて朔方郡と爲す。唐復た夏州と爲す。今の陝西省榆林道橫山縣の西。
【五四】豐州。復た五原郡を以て豐州と爲す。今の綏遠特別區域綏遠道五原縣。
【五五】賄。貨財を賄と曰ふ。
【五六】邊要の州には、總管・刺史・長史・司馬を置く。

【五〇】北海。煬帝、青州を以て北海郡と爲す。
【五一】文登縣、東萊郡に屬す。
【五二】東海。海州を以て東海郡と爲す。
【五三】齊郡。齊州を以て齊郡と爲す。
【五四】東平。鄆州を以て東平郡と爲す。
【五五】任城・平陸。二縣は魯郡に屬す。
【五六】壽張縣は濟北郡に屬す。
【五七】須昌縣は東平郡に屬す。
【五八】長星。隋志に大業十三年六月、星有り太微に孛す。五帝の坐なり。色黃赤、長さ三四尺許と。
【五九】角亢。二十八宿の二。角亢は鄭、兗州なり。
【六〇】外兵曹は隋の官に之れ無し。世充、魏晉以來の官制を取りて之を置くのみ。

充、九錫を受けんと議す。冑復た固く諫む。世充怒り、出して鄭州の長史と爲し、兄の子行本と與に虎牢に鎮せしむ。乃ち段達等をして皇泰主に言ひ、世充に九錫を加へんことを請はしむ。皇泰主曰はく、「鄭公、近く李密を平げ、已に太尉に拜せり。是より以來、未だ殊績有らさず。天下稍平ぐを俟ち、之を議すとも未だ晩からじ」と。段達曰はく、「太尉、之を欲す」と。皇泰主、達を熟視して曰はく、「公に任せん」と。辛巳、達等、皇泰主の詔を以て、世充に命じて相國と爲し、黃鉞を假し、百揆を總べしめ、爵を鄭王に進め、九錫を加ふ。鄭國、丞相以下の官を置く。

【六】 事、去年九月十月に見ゆ。

【六九】 鄭善家の父誠、尉遲迥を討ち、力戰して死す。是に因りて隋の名臣の家と爲す。

初め宇文化及、隋の大吏卿鄭善果を以て民部尚書を爲す。從つて聊城に至り、化及の爲めに戰を督し、流矢に中る。竇建德、聊城に克つや、王琮、善果を獲たり。之を責めて曰はく、「公は名臣の家にして、隋室の大臣なり。奈何ぞ君を弑するの賊の爲めに、命を効して苦戰し、傷痍此に至るか」と。善果、大に慙ぢ、自殺せんと欲す。宋正本、馳せ往きて之を救止す。建德、復た禮を爲さず。乃ち相州に奔る。淮安王神通、之を長安に送る。庚午、善果至る。上、之を優禮し、左庶子に拜し、内史侍郎を檢校せしむ。

齊王元吉、并州の父老に諷し、闕に詣りて己を留めしむ。甲申、復た元吉を以て并州總管と爲す。戊子、淮南の五州、皆、使を遣はして來り降る。

辛卯、劉武周、并州に寇す。

壬辰、營州總管鄧暲、高开道を撃ち、之を敗る。

甲午、王世充、其將高昆を遣はし、義州に寇す。

東都の道士桓法嗣、孔子閉房記を王世充に獻じ、「相國當に隋に代りて天子と爲るべし」と言ふ。世充、大に悦び、法嗣を以て諫議大夫と爲す。世充、又、雜鳥を羅取し、帛に書して頸に繋ぎ、自ら符命を言ひて之を縱つ。鳥を得て來り獻する者有れば、亦、官爵に拜す。是に於て段達、皇泰主の命を以て、世充に殊體を加ふ。世充、表を奉りて三たび讓る。百官勸進し、位を都堂に設く。納言蘇威、年老い、朝謁するに任へず。世充、威が隋氏の重臣なるを以て、以て士民に眩耀せんと欲し、勸進する毎に、必ず威の名を冠す。殊禮を受くるの日に及び、威を扶けて百官の上に置き、然る後南面正坐して之を受く。

【七〇】 義州。武德元年、衛州の汲・新郷を以て義州を置く。

【七一】 黃蛇嶺。榆次縣の北に在り。

【七二】 榆次縣は并州に屬す。今の山西省冀寧道榆次縣。

夏四月、劉武周、突厥の衆を引き、黃蛇嶺に軍す。兵鋒甚だ盛なり。齊王元吉、車騎將軍張達をして歩卒百人を以て寇を嘗みしむ。達、辭するに兵少く、往く可からざるを以てす。元吉強ひて之を遣る。至れば則ち俱に没す。達、忿恨す。庚子、武周を引ききて、榆次を襲ひ、之を陷る。

散騎常侍段確、性、酒を嗜む。詔を奉じて朱榮を菊潭に慰勞す。辛丑、醉に乗じて榮を侮りて曰

はく、「聞く、卿好みて人を噉ふと。人、何の味を作す」と。祭曰はく、「醉人を噉へば、正に糟藏の
麩肉の如し」と。確怒り罵りて曰はく、「狂賊、入朝すれば、一の頭奴たるのみ。復た人を噉ふを得ん
や」と。祭、坐に於て確及び従者數十人を收へ、悉く之を烹、以て左右に噉はす。遂に菊潭を屠り、
王世充に奔る。世充、以て龍驤大將軍と爲す。

王世充、長史韋節・楊績等及び太常博士・衡水の孔穎達をして、禪代の儀を造らしめ、段達・雲定
興等十餘人を遣はし、入りて皇泰主に奏して曰はしむ、「天命、常ならず、
鄭王の功德甚だ盛なり。願はくは陛下、唐虞の迹に遵へ」と。皇泰主、膝
を斂め按に據りて怒りて曰はく、「天下は高祖の天下なり。若し隋祚未だ亡
びずんば、此言、應に輒ち發すべからず。必ず天命已に改まらば、何ぞ禪
讓を煩はさん。公等は或は祖禰の舊臣、或は台鼎高位にして、既に斯言有
り。朕復た何をか望まん」と。顔色、凜冽なり。在廷の者皆汗を流す。朝を退き、泣きて太后に對
す。世充更に人をして之に謂つて曰はしむ、「今、海内未だ寧からず、須く長君を立つべし。四方の
安集するを俟ち、當に子明辟に復すること、必ず前誓の如くすべし」と。癸卯、世充、皇泰主の
命と稱し、位を鄭に禪る。其兄世暉を遣はし、皇泰主を含涼殿に幽せしむ。三表の陳讓及び敕書の敦
勸有りと雖も、皇泰主、皆、知らざるなり。諸將を遣はし、兵を引き入りて宮城を清めしむ。又、術

【七三】 衡水縣は冀州に屬す。
今の直隸省大名道衡水縣の西
南十五里に在り。
【七四】 凜冽。嚴冷なるを言ふ。
【七五】 前誓。去年七月、中城髮
の誓を謂ふ。

人を遣はし、桃湯葦火を以て禁省を祓除せしむ。
隋の將帥・郡縣及び賊帥、前後繼ぎて降る者有り。詔して、王薄を以て
齊州總管と爲し、伏德を濟州總管と爲し、鄭虔符を青州總管と爲
し、綦公順を淮州總管と爲し、王孝師を滄州總管と爲す。
甲辰、大理卿・新樂の郎楚之を遣はし、山東を安撫せしめ、祕書監夏侯
端をして淮左を安撫せしむ。
乙巳、王世充、法駕を備へて宮に入り、皇帝の位に即く。丙午、大赦し、
開明と改元す。
丁未、隋の禦衛將軍陳稜、江都を以て來り降る。稜を以て揚州總
管と爲す。
戊申、王世充、子玄應を立てて太子と爲し、玄恕を漢王と爲し、餘の兄
弟宗族十九人、皆王と爲す。皇泰主を奉じて潞國公と爲す。蘇威を以て太
師と爲し、段達を司徒と爲し、雲定典を太尉と爲し、張謹を司空と爲し、
楊績を納言と爲し、韋節を内史と爲し、王隆を左僕射と爲し、韋霽を右
僕射と爲し、齊王世暉を尙書令と爲し、楊汪を吏部尙書と爲し、杜淹を

【六】 齊州。歷城縣に治す。古
の歷下城なり。
【七】 濟州。古の稿破城なり、
秦、東郡在平の地と爲す。宋、
稿破成及び濟北郡を置く。後
魏、濟州を立つ。
【七六】 淮州。是年、青州の北海・
營丘・下密を分ちて淮州を置
く。蓋し公順を以て淮州總管
と爲す。淮は當に濰に作るべ
し。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德二年

少吏部と爲し、鄧頌を御史大夫と爲す。世憚は世充の兄なり。又、國子助教吳人陸德明を以て漢王の師と爲し、玄恕をして其家に就きて、東修の禮を行はしむ。德明、之を恥ぢ、巴豆散を服し、臥して病と稱す。玄恕入りて牀下に跪く。之に對して遺利し、竟に與に語らず。德明、名は朝、字を以て行はる。世充、闕下及び玄武門等の數處に於て、皆、楊を設け、坐するに常所無く、親しく章表を受く。或は輕騎して衢市を歴、亦、道を清めず、民但だ路を避くるのみ。世充轡を按じて徐行し、之に語りて曰はく、『昔時、天子、深く九重に居り、下に在るの事情、聞徹するに由無し。今、世充、天位を貪るに非ず、但だ時危を救恤せんと欲するのみ。正に一州の刺史の如く、親ら庶務を覽、當に士庶と共に朝政を評すべし。尙ほ恐る門に禁限有るを。今、門外に於て、坐を設けて朝を聽く。宜しく各、情を盡すべし』と。又、西朝堂をして宛抑を納れ、東朝堂をして直諫を納れしむ。是に於て、策を獻じ上書する者、日に數百有り。條流既に煩しく、省覽、遍くし難し。數日の後、復た更に出でず。

寶建德、王世充が自立せるを聞き、乃ち之を絶ち、始めて天子の旌旗を建て、出づるに警し入るに

- 【八〇】 至りて廣陵始めて揚州の名を有す。
- 【八一】 内史の下に當に令の字有るべし。
- 【八二】 少吏部。即ち吏部侍郎なり。
- 【八三】 晉の武帝、國子學を立て、助教を置く。博士を佐けて教授するを掌る。後世、之に因る。
- 【八四】 東修の禮。師に事ふるの禮を謂ふ。
- 【八五】 巴豆。毒有り、能く人を痢す。
- 【八六】 陸德明は孔穎達に過ぐることを遠し。
- 【八七】 條流。猶ほ條派と言ふがごとし。

躡し、書を下すに詔と稱す。隋の煬帝を追諡して閔帝と爲す。齊王暉が死するや、遺腹の子政道有り。建德、立てて以て郟公と爲す。然れども猶ほ突厥に依倚し、以て其兵勢を壯にす。隋の義成公主、使を遣はし、蕭皇后及び南陽公主を迎ふ。建德、千餘騎を遣はして之を送る。又、宇文化及の首を傳へ、以て義成公主に獻す。

丙辰、劉武周、并州を圍む。齊王元吉、拒ぎて之を却く。戊午、太常卿李仲文に詔し、兵を將ゐて并州を救はしむ。

王世充の將軍丘懷義、門下内省に居り、越王君度・漢王玄恕・將軍郭士衡を召し、妓妾を雜へて飲博す。侍御史張蘊古、之を彈す。世充大に怒り、散手をして、君度・玄恕を執へしめ、其耳を批つこと數十。又、命じて引きて、東上閣に入れしめ、之を杖つこと各、數十。懷義・士衡は問はず。蘊古に帛百段を賞し、太子舍人に遷す。君度は世充の兄の子なり。世充、朝を聽く毎に、殷勤に誨諭し、言詞重複し、千端萬緒。侍衛の人、倦弊に勝へず。百司、事を奏するに、聽受に疲る。御史大夫蘇良諫めて曰はく、『陛下、語太だ多く、而して領要無し。計るに云爾せば即ち可なり。何ぞ許き辭を煩はさんや』と。世充・默然たること良久しく、亦、良を罪せず。然れども性、是の如く、終に改むる能はざるなり。

- 【八九】 江都の難に、齊王暉も亦死す。
- 【九〇】 散手。散手仗なり。凡そ朝會の仗、親勳翊の三衛番上し、分ちて五仗と爲す。一を供奉仗と曰ひ、二を親仗と曰ひ、三を勳仗と曰ひ、四を翊仗と曰ひ、五を散手仗と曰ふ。
- 【九一】 東都の皇宮の正殿を乾陽殿と曰ひ、殿の左を東上閣と曰ひ、右を西上閣と曰ふ。閣に各、門有り。
- 【九二】 領要。猶ほ要領と言ふがごとし。

王世充、數伊州を攻む。總管張善相、之を拒ぐ。糧盡き、援兵、至らず。癸亥、城陷る。善相、世充を罵り口を極めて死す。帝聞きて歎じて曰はく、「吾、善相に負けり。善相、吾に負けざるなり」と。其子に襄城郡公を賜ふ。

五月、王世充、義州を陥れ、復た西濟州に寇す。右驍衛大將軍劉弘基を遣はし、兵を將ゐて之を救はしむ。

李軌の將安修仁の兄興貴、長安に住へ、表して請ふ、「軌に説き、諭すに禍福を以てせん」と。上曰はく、「軌、兵を阻み險を恃み、吐谷渾・突厥を連結す。吾、兵を興して之を撃つとも、尙ほ克たざらんことを恐る。

豈に口舌の能く下す所ならんや」と。興貴曰はく、「臣の家は涼州に在り、奕世の豪望にして、民夷の附く所と爲り、弟修仁、軌の信任する所と爲

り、子弟、機近に在る者、十を以て數ふ。臣往きて之に説き、軌、臣に聽かば固に善し。若し其れ聽かずんば、之を肘腋に圖らんこと易し」と。上乃ち之を遣る。興貴、武威に至る。軌、以て左右衛大將軍と爲す。興貴、間に乘じて軌に説きて曰はく、「涼の地は千里に過ぎず、土薄く民貧し。今、唐、太原に起り、函秦を取り、中原を宰制し、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。此殆ど天啓にして、人力に非ざるなり。若かじ河西を擧げて之に歸せんには。則ち寶融の功、復た今日に見ん」と。

【九三】襄城の上に當に爵の字有るべし。
【九四】西濟州。濟源縣、武德二年、王世充の將丁伯德、縣を以て來り降る。西濟州を置く。今の河南省河北道濟源縣。
【九五】寶融の事は漢の光武紀に見ゆ。

軌曰はく、「吾、山河の固に據る。彼、疆大なりと雖も、我を若何せん。汝、唐より來り、唐の爲めに遊説するのみ」と。興貴・謝して曰はく、「臣聞く、富貴にして故郷に歸らざれば、繡を衣て夜行

くが如しと。臣の闔門、陛下の榮祿を受く。安んぞ肯て唐に附かん。但だ其愚慮を效さんと欲するのみ。可否は陛下に在るのみ」と。是に於て、退きて修仁と與に、陰に諸胡を結び、兵を起して軌を撃

つ。軌出で戦ひて敗れ、城に嬰りて自ら守る。興貴徇へて曰はく、「大唐、我を遣はし、來りて李軌を誅せしむ。敢て之を助くる者は、三族を夷げん」と。

城中の人、争ひ出でて興貴に就く。軌、計窮まり、妻子と與に、玉女臺に登り、置酒して別を爲す。庚辰、興貴、之を執へて以て聞す。河西

悉く平ぐ。鄧曉、長安に在り。舞踏して慶を稱す。上曰はく、「汝、人の使臣と爲り、國の亡ぶるを聞き、感ますして喜び、以て媚を朕に求む。

李軌に忠ならず、肯て朕の用を爲さんや」と。遂に之を廢すること終身。

軌、長女に至る。其子弟を并せて皆誅に伏す。安興貴を以て右武侯大將軍・上柱國・涼國公と爲し、帛

萬段を賜ひ、安修仁を左武侯大將軍・申國公と爲す。

隋の末、離石胡劉龍兒、兵數萬を擁し、自ら劉王と號し、其子季眞を以て太子と爲す。虎賁郎將

梁德、撃ちて龍兒を斬る。是に至りて、季眞、弟六兒と與に、復た兵を擧げて亂を爲し、劉武周の衆

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德二年

九三

【九六】富貴云云。項羽の言。
【九七】玉女臺。軌が玉女臺を築く事、前卷前年に見ゆ。
【九八】是年二月、李軌、鄧曉を遣はして入見せしむ。
【九九】離石。漢の縣、後周改めて昌化郡と名づく。隋、離石郡と爲す。唐、石州と爲す。離石胡は匈奴種なり。

を引きて、攻めて石州を陥れ、刺史王儉を殺す。季真自ら突利可汗と稱し、六兒を以て拓定王と爲す。六兒、使を遣はし、降らんと請ふ。詔して、以て嵐州總管と爲す。
 壬午、秦王世民を以て左武侯大將軍・使持節・涼甘等九州諸軍事・涼州總管と爲す。其太尉・尙書令・雍州の牧・陝東道行臺は、竝に故の如し。
 黃門侍郎楊恭仁を遣はし、河西を安撫せしむ。

丙戌、劉武周、平遙を陥る。

癸巳、梁州總管・山東道安撫副使陳政、麾下の殺す所と爲る。其首を攜へて王世充に奔る。政は茂の子なり。

王世充、禮部尙書裴仁基・左輔大將軍裴行儼が威名有るを以て、之を忌む。仁基父子、之を知り、亦、自ら安んぜず。乃ち尙書左丞宇文儒童・儒童の弟、尙食直長溫・散騎常侍崔德本と與に、世充及び其黨を殺し、復た皇泰主を尊立せんことを謀る。事泄れ、皆、三族を夷げらる。齊王世暉、世充に言つて曰はく、『儒童等が反を謀るは、正に皇泰主が尙ほ在るが爲めの故なり。早く之を除くに如かじ』と。世充、之に従ふ。兄の子唐王仁則及び家奴梁百年を遣はし、皇泰主を醜せしむ。皇泰主曰はく、『更に爲めに太尉に請へ。』往者の言を以てせば、未だ應

- 【一〇〇】嵐州。樓煩郡を以て嵐州を置く。
- 【一〇一】九州。涼・甘・瓜・鄯・肅・會・蘭・河・廓。皆、李軌が據りし所の地なり。
- 【一〇二】平遙縣。汾州に屬す。即ち漢の平陶縣。魏、國諱を避けて、陶を改めて遙と爲す。
- 【一〇三】陳政は隋の文帝に事へて機密を與る。
- 【一〇四】尙食局は殿中省に屬し、奉御有り、直長有り。
- 【一〇五】往者の言。世充、往に、子明暉に復するの言有り、既に踐む能はず、今應に遽に之を殺すべからざるをいふ。

に此に至るべからず』と。百年、爲めに啓陳せんと欲す。世暉、許さず。又、皇太后と辭訣せんと請ふ。亦許さず。乃ち席を布き、香を焚き佛を禮し、『願はくは、今より已往、復た帝王の家に生れざらんことを』と。藥を飲めども絶ゆる能はず。帛を以て之を縊殺す。諡して恭皇帝と曰ふ。世充、其兄楚王世偉を以て太保と爲し、齊王世暉を太傅と爲し、尙書令を領せしむ。

六月庚子、竇建德、滄州を陥る。

初め、易州の賊帥宋金剛、衆萬餘有り。魏刁兒と連結す。刁兒、竇

建德の滅ぼす所と爲る。金剛、之を救ひて戰敗し、衆四千を帥ひ、西して劉武周に奔る。武周、其の善く兵を用ふるを聞き、之を得て甚だ喜ぶ。號して宋王と曰ひ、委ぬるに軍事を以てし、家貲を中分して以て之に遺る。金剛も亦深く自ら結び、其故の妻を出し、武周の妹を納る。因つて武周に説く、『晉陽を圍り、南向して天下を爭はん』と。武周、金剛を以て西

【一〇六】滄州。隋の勃海郡。

【一〇七】易州。上谷郡。

【一〇八】去年十一月、建德、刁兒を滅ぼす。

【一〇九】介州。義寧元年、介休平遙を以て介休郡を置く。武德元年、介州と曰ふ。

【一一〇】雀鼠谷。介休縣に在り。

南道大行臺と爲し、兵三萬を將ひて并州に寇せしむ。丁未、武周、進みて介州に逼る。沙門道澄、佛幡を以て之に縋し、城に入る。遂に介州を陥る。左武侯大將軍姜寶誼・行軍總管李仲文に詔して、之を撃たしむ。武周の將黃子英、雀鼠谷に往來し、數、輕兵を以て戰を挑む。兵纒に接し、子英陽りて勝たずして走る。是の如くすること再三。寶誼・仲文、衆を悉して之を逐ふ。伏兵・發し、

唐の兵大に敗れ、寶誼・仲文、皆、虜にせらる。既にして俱に逃れ歸る。上復た二人をして兵を將るて武周を撃たしむ。

己酉、突厥の使來り、始畢可汗の喪を告ぐ。上、哀を長樂門に擧げ、朝を廢すること三日。百官に詔して館に就き、其使者を弔ふしむ。又、丙史舍人鄭德挺を遣はし、處羅可汗を弔はしめ、帛三萬段を賻す。

上、劉武周が入寇するを以て憂と爲す。右僕射裴寂、自ら行かんと請ふ。癸亥、寂を以て晉州道行軍總管と爲し、武周を討たしめ、便宜を以て事に從ふを聽す。

秋七月、初めて十二軍を置き、關内諸府を分ちて以て焉に隸す。皆、天星を取りて名と爲す。車騎府を以て之を統べしむ。軍毎に將副各一人、威名素より重き者を取りて之と爲す。督するに耕戰の務を以てす。是に由りて、士馬精彊にして、向ふ所、敵無し。海岱の賊帥徐圓朗、數州の地を以て、降を請ふ。兗州總管に拜し、魯國公に封す。

- 【二二】長樂門。長安の宮城の南面の三門、中を承天と曰ひ、東を長樂と曰ひ、西を永安と曰ふ。
- 【二三】晉州。曹魏の平陽縣、隋臨汾郡と爲す。唐、晉州と爲す。
- 【二四】十二年。萬年道を參旗軍、長安道を鼓旗軍、富平道を玄戈軍、醴泉道を并鉞軍、同州道を羽林軍、華州道を騎官軍、寧州道を折威軍、岐州道を平道軍、邠州道を招搖軍、西麟州道を苑遊軍、涇州道を天紀軍、宜州道を天節軍と爲す。
- 【二五】徐圓朗、數州に跨據し、東は海に至り、西は岱に抵る。
- 【二六】兗州。隋の魯郡。禹貢の兗州は東南は濟に據り、西北は河に距り、封域廣し。後漢以來、兗州の治むる所、其邑を常にせず、所部亦廣し。是に至りて始めて専ら魯郡を以て兗州と爲す。

王世充、其將羅士信を遣はして穀州に寇す。士信、其衆千餘人を帥ゐて來り降る。是より先、士信、李密に從つて世充を撃ち、兵敗れ、世充の得る所と爲る。世充、厚く之を禮し、與に寢食を同じくす。既にして邠元眞等を得、之を待つこと士信の如し。士信、之を恥づ。士信、駿馬有り。世充の兄の子趙王道詢、之を欲すれども與へず。世充、之を奪ひ、以て道詢に賜ふ。士信怒る。故に來り降る。上、其來るを聞き、甚だ喜び、使を遣はして迎へ勞ひ、其所部に廩食す。士信を以て陝州道行軍總管と爲す。世充の左龍驤將軍。臨涇の席辯、同列楊虔安・李君義と與に、皆、所部を帥ゐて來り降る。

- 【二六】臨涇縣は涇州に屬す。今の甘肅省涇原道鎮原縣。
- 【二七】事、一百八十一卷煬帝大業七年に見ゆ。
- 【二八】金山。アルタイ山。
- 【二九】海。西海なり。
- 【三〇】石國。康居の枝庶の分れ玉たる者なり。今の露領中央亞細亞タシユカンドに居る。

丙子、王世充、其將郭士衡を遣はして穀州に寇す。刺史任瓌、大に之を破り、俘斬して且に盡きんとす。甲申、行軍總管劉弘基、其將种如願を遣はし、王世充を河陽城に襲ひ、其河橋を毀ちて還る。乙酉、西突厥の統葉護可汗・高昌王麴伯雅、各、使を遣はして入貢す。初め、西突厥の曷娑那可汗、隋に入朝す。隋人、之を留む。國人、其叔父を立て、射匱可汗と號す。射匱は、達頭可汗の孫なり。既に立ち、地を拓きて、東は金山に至り、西は海に至る。遂に北突厥と敵と爲り、庭を龜茲の北三彌山に建つ。射匱卒し、子統葉護立つ。統葉護、勇にして謀有り。北のかた鐵勒を并せ、控弦數十萬、烏孫の故地に據り、又、庭を石國の北千泉に移す。西域

の諸國、皆、之に臣たり。葉護各、吐屯を遣はして之を監し、其征賦を督せしむ。

辛卯、宋金剛、浩州に寇し、浹旬にして退く。

八月丁酉、鄒公・薨す。諡して隋の恭帝と曰ふ。後無し。族子行基を以て嗣がしむ。

竇建德、兵十餘萬を將ゐて、洛州に趣く。淮安王神通、諸軍を帥ゐ、

退きて相州に保す。己亥、建德の兵、洛州の城下に至る。

丙午、將軍泰武通の軍、洛陽に至り、王世充の將葛彥璋を敗る。

丁未、竇建德、洛州を陥る。總管袁子幹、之に降る。乙卯、兵を引き

相州に趣く。淮安王神通、之を聞き、諸軍を帥ゐ、李世勣に黎陽に就く。

梁師都、突厥と、合はせて數千騎、延州に寇す。行軍總管段德操、兵

少くして敵せず。壁を閉ちて戰はず、師都が稍怠るを伺ふ。九月丙寅、

副總管梁禮を遣はし、兵を將ゐて之を撃たしむ。師都、禮と戰ひ、方

酣なり。德操、輕騎を以て、多く旗幟を張り、其後を掩撃す。師都の軍潰ゆ。北ぐるを逐ふこと二

百里。其、魏州を破り、男女二千餘口を虜にす。德操は、孝先の子なり。

蕭銑、其將楊道生を遣はして、峽州に寇す。刺史許紹、撃ちて之を破る。銑、又、其將陳普環を遣

はし、舟師を帥ゐ、峽に上り、巴蜀を取るを規らしむ。紹、其子智仁及び錄事參軍李弘節等を遣はし、

追うて、西陵に至り、大に之を破り、普環を擒にす。銑、兵を遣はし、安蜀城及び荆門城に戍

せしむ。是より先、上、開府李靖を遣はし、夔州に詣りて蕭銑を經略せしむ。靖、峽州に至り、銑

の兵に阻まれ、久しく進むを得ず。上、其の遲留するを怒り、陰に許紹に敕して之を斬らしむ。

紹、其才を惜み、之が爲めに奏請し、免るるを獲たり。

己巳、竇建德、相州を陥れ、刺史呂珉を殺す。

民部尚書魯公劉文靜、自ら以へらく、才略・功勳、裴寂の右に在りと。

而るに位、其下に居り、意甚だ平かならず。廷議する毎に、寂、是とする

所有れば、文靜必ず之を非とし、數、寂を侵侮す。是に由りて隙有り。文

靜、弟通直散騎常侍文起と、酒を飲みて酣にして、怨望し、刀を抜き柱を

撃ちて曰はく、『會ず當に裴寂の首を斬るべし』と。家數、妖有り。文起、

巫を召し。星下に於て髪を被り刀を銜みて厭勝を爲さしむ。文靜、妾有り、

寵無し。其兄をして變を上り、之を告げしむ。上、文靜を以て吏に屬し、

裴寂・蕭瑀を遣はして狀を問はしむ。文靜曰はく、『建義の初め、忝くも司馬と爲り、長史と位望略

ぼ同じからんことを計る。今、寂は僕射と爲りて甲第に據り、臣の官賞は衆人に異ならず。東西征

討するに、老母、京師に留まり、風雨、庇ふ所無し。實に失望の心有り。醉に因りて怨言せるは、自

- 【二七】西陵。夷陵は孫吳の西陵なり。世にこれを步蘭壘と謂ふ。
- 【二八】安蜀城。公安縣の界に在り。荆門城。長林縣の界に在り。皆、荆州の西南の要地なり。
- 【二九】夔州。巴東郡、舊、信州を置く、是年、夔州と改む。
- 【三〇】明詔を以てせずして陰に敕するは猶ほ宿憾を以て之を殺さんと欲するなり。

ら保する能はざればなり」と。上、羣臣に謂つて曰はく、「文靜の此言を觀るに、反すること明白なり」と。李綱・蕭瑀、皆、其の反せざるを明かにす。秦王世民、之が爲めに固く請うて曰はく、「昔、晉陽に在り、文靜先づ非常の策を定め、始めて寂に告げて知らしむ。京城に克つに及び、任遇懸隔す。文靜をして歎望せしむるは則ち之れ有り。敢て反を謀るに非ず」と。裴寂、上に言つて曰はく、「文靜の才略は、實に時人に冠たり。性復た靈敏なり。今天下未だ定まらず。之を留めば必ず後患を貽さん」と。上素より寂を親しむ。低回すること之を久しくして、卒に寂の言を用ふ。辛未、文靜及び文起、死に坐し、其家を籍沒す。

沈法興、既に毗陵に克ち、謂へらく江淮の南は、指搆して定む可しと。自ら梁王と稱し、毗陵に都し、延康と改元し、百官を置く。性殘忍にして、専ら威刑を尙ぶ。將士小しく過有れば、即ち之を斬る。是に由りて、其下離れ怨む。時に杜伏威、歷陽に據り、陳稜、江都に據り、李子通、海陵に據り、俱に江表を窺ふの心有り。法興の軍數、敗る。會、子通、稜を江都に圍む。稜、質を送りて救を法興及び伏威に求む。法興、其子綸をして、兵數萬を將ゐて、伏威と共に之を救はしむ。伏威、清流に軍し、綸、楊子に軍し、相去ること數十里なり。子通の納言毛文深、策を獻じ、江南の人を募り、詐りて綸の兵と爲し、夜、伏威の營を襲ふ。伏威怒り、復た兵を遣はして綸を襲ふ。

杜伏威、降らんと請ふ。丁丑、伏威を以て淮南安撫大使、和州總管と爲す。

【二三】昔云云。事、一百八十四卷隋の恭帝義寧元年に見ゆ。
 【二四】毗陵に克つこと、一百八十五卷元年三月に見ゆ。
 【二五】搆は應と同じ。
 【二六】清流縣は、漢の全椒縣の地。今の安徽省淮涇道涇縣。

是に由りて、二人相疑ひ、敢て先つ進むもの莫し。子通、銳を盡して江都を攻めて之に克つを得たり。稜、伏威に奔る。子通、江都に入り、因つて綸を縱擊し、大に之を破る。伏威も亦引き去る。子通、皇帝の位に即き、國を吳と號し、明政と改元す。丹陽の賊帥樂伯通、衆萬餘を帥ゐて之に降る。子通、以て左僕射と爲す。

裴寂、介休に至る。宋金剛、城に據りて之を拒ぐ。寂、度索原に軍す。營中、澗水を飲む。金剛、之を絶つ。士卒、渴乏す。寂、營を移して水に就かんと欲す。金剛、兵を縱ちて之を擊つ。寂の軍遂に潰え、死亡して略ぼ盡く。寂、一日一夜、馳せて晉州に至る。是より先、劉武周、屢、兵を遣はして西河を攻む。浩州の刺史劉贍、之を拒ぐ。李仲文、兵を引ききて之に就き、與に共に西河を守る。裴寂が敗るるに及び、晉州より以北の城鎮俱に沒す。唯だ西河のみ獨り存す。姜寶誼、復た金剛の虜にする所と爲る。逃れ歸らんと謀る。金剛、之を殺す。裴寂、上表して罪を謝す。上、之を慰諭し、復た河東を鎮撫せしむ。劉武周進みて并州に逼る。齊王元吉、其司馬劉德威を結きて曰はく、「卿、老弱を以て城を守れ。吾、彊兵を以て出で

【二七】丹陽郡は、隋初の蔣州なり。
 【二八】和州。漢の歷陽縣の地、高齊、和州を置く。大業、州を廢し歷陽郡と爲す。今復た和州と爲す。今の安徽省安慶道和縣。
 【二九】介休。漢の古縣。時に介州と爲す。今の山西省冀寧道介休縣。
 【三〇】浩州。隋の西河郡。

戦はん」と。辛巳、元吉、夜、兵を出し、其妻妾を攜へ、州を棄て、奔りて長安に還る。元吉、始めて去るや、武周の兵已に城下に至る。晉陽の土豪薛深、城を以て武周を納る。上、之を聞き、大に怒り、禮部尚書李綱に謂つて曰はく、「元吉は幼弱にして、未だ時事に習はず。故に竇誕・宇文歆を遣はして之を輔けしむ。晉陽は彊兵數萬、食、十年を支ふ。興王の基、一旦、之を棄つ。聞く宇文歆、首として此策を畫せりと。我當に之を斬るべし」と。綱曰はく、「王、年少く驕逸なり。竇誕曾て規諫する無く、又、之を掩覆し、士民をして憤怒せしむ。今日の敗は、誕の罪なり。〔三三〕歆、王を諫むれども悛めず。尋ぎて皆聞奏す。乃ち忠臣なり。豈に殺す可けんや」と。明日、上、綱を召し、入りて御坐に升らしめて曰はく、「我、公を得、遂に濫刑無し。元吉自ら不善を爲す。二人の能く禁ずる所に非ざるなり」と。誕を并せて之を赦す。衛尉少卿劉政會、太原に在り、武周の虜にする所と爲る。政會、密に表し、武周の形勢を論ず。武周、太原に據り、宋金剛を遣はし、晉州を攻めて之を拔き、右驍衛大將軍劉弘基を虜にす。弘基逃れ歸る。金剛進みて、〔三六〕絳州に逼り、〔三九〕龍門を陷る。

西突厥の曷娑那可汗、北突厥と怨有り。曷娑那、長安に在り。北突厥、使を遣はし、之を殺さんと請ふ。上、許さず。羣臣皆曰はく、「一人を保ちて一國を失はば、後必ず患を爲さん」と。秦王世民曰はく、「人窮して來りて我に歸す。之を殺すは不義なり」と。上、遲廻すること之を久しくし、已むを得ず。丙戌、曷娑那を内殿に引きて宴飲し、既にして中書省に送り、北突厥の使者を縱ち、之を殺さしむ。

〔三三〕事、上の二月に見ゆ。
 〔三四〕絳州。今の山西省河東道新絳縣。
 〔三六〕龍門。漢の皮氏縣なり。後魏改めて龍門縣と爲す。隋唐には蒲州に屬す。今の山西省河東道河津縣の西二里に在り。

禮部尚書李綱、〔三三〕太子詹事を領す。太子建成、始め甚だ之を禮す。之を久しくして、太子漸く小人を昵近し、秦王世民の功高きを疾み、頗る相猜忌す。綱屢、諫むれども聽かず。乃ち骸骨を乞ふ。上、之を罵りて曰はく、「卿、〔三四〕何潘仁の長史と爲り、乃ち朕の尚書と爲るを恥づるか。且つ方に卿をして建成を輔導せしむ。而るに固く去るを求むるは何ぞや」と。綱頓首して曰はく、「潘仁は賊なり。妄に人を殺さんと欲する毎に、臣、之を諫むれば即ち止めき。其長史と爲るも、以て愧づる無かる可し。陛下は創業の明主なり。臣、不才にして、〔四五〕言ふ所、水を石に投ずるが如し。太子に言ふも亦然り。臣何ぞ敢て久しく天臺を汚し、東朝を辱めんや」と。上曰はく、「公の直士なるを知る。勉めて留まりて吾が兒を輔けよ」と。戊子、綱を以て太子少保と爲し、尚書詹事は故の如し。綱復た上書して、太子が酒を飲みて節無く、及び讒慝を信じ、骨肉を疎んずるを諫む。太子、懼ばず。而して爲す所故の如し。綱鬱鬱として志を得ず。是歲、固く老病と稱して、職を辭す。詔して、尚書を解き、仍ほ少保

〔三三〕太子詹事は、東宮の三寺十率府の政令を統ぶ。
 〔三四〕長史と爲ること、一百八十四卷義寧元年に見ゆ。
 〔四五〕水を以て石に投ずれば、沾濡すと雖も、水を受くる能はず。
 〔四五〕天臺は尚書省を謂ふ。東朝は東宮と謂ふ。

と爲す。

淮安王神通、慰撫使張道源をして、趙州に鎮せしむ。庚寅、竇建德、趙州を陥れ、總管張志昂及び道源を執ふ。建德、二人及び邢州の刺史陳君賓が早く下らざりしを以て、之を殺さんと欲す。國子祭酒凌敬諫めて曰はく、「人臣は各其の主の爲めに用ひらる。彼堅く守りて下らず、乃ち忠臣なり。今大王之を殺さば、何を以て羣下を勵まさんや」と。建德怒りて曰はく、「吾、城下に至るに、彼猶ほ降らず。力屈して擒に就く。何ぞ捨す可けんや」と。敬曰はく、「今、大王、大將高士興をして、羅藝を易水に拒がしむ。藝纔に至れば、興即ち降り。大王の意、以て何如と爲す」と。建德乃ち悟り、即ち命じて之を釋さしむ。

乙未、梁師都、復た延州に寇す。段德操擊ちて之を破る。斬首二千餘級、師都、百餘騎を以て遁れ去る。德操、功を以て柱國に拜し、爵平原郡公を賜ふ。(一四) 鄜州の刺史鄜城の壯公梁禮・戰没す。

冬十月己亥、就きて涼州總管楊恭仁に納言を加へ、幽州總管燕公羅藝に姓を李氏と賜ひ、(一四) 燕郡王に封す。

辛丑、李藝、竇建德を、(一四) 衡水に破る。

癸卯、左武侯大將軍龐玉を以て梁州總管と爲す。時に(一五) 集州の獠・反す。玉、之を討つ。獠、險に據りて自ら守る。軍、進むを得ず、糧且に盡きんとす。(一五) 熟獠、反者と、皆、鄰里親黨にして、争うて言ふ、「賊、撃つ可からず」と。玉に還らんことを請ふ。玉、揚言す、「秋穀將に熟せんす。百姓、收刈するを得る毋れ。一切、軍に供せん。賊を平ぐるに非ずんば、吾、返らじ」と。聞く者大に懼れて曰はく、「大軍、去らずんば、吾が曹皆將に餓死せん」と。其中の壯士、乃ち賊營に入り、所親と潛に謀り、其渠帥を斬りて降る。餘黨皆散す。玉、追討し、悉く之を平ぐ。

劉武周の將宋金剛、進みて(一五) 涪州を攻め、之を陥る。軍勢甚だ銳し。裴寂・性怯にして、將帥の略無く、唯だ使を發すること、(一五) 駱驛として、(一五) 虞秦二州の居民を趣して城堡に入れ、其積聚を焚かしむ。民驚擾愁怨し、皆、盜を爲すを思ふ。(一五) 夏縣の民呂崇茂、衆を聚め、自ら魏王と稱し、以て武周に應ず。寂、之を討ち、敗る所と爲る。永安王孝基・獨孤懷恩・陝州總管于筠・內史侍郎唐儉等に詔して、兵を將ゐて之を討たしむ。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德二年

【一四】國公より進みて郡王に封ぜらる。唐の制、國公は食邑二千戸、郡王は食邑五千戸、皆、従一品。

【一四】衡水縣は冀州に屬す。今の直隸省大名道衡水縣の西南十五里。

【一五】武德元年、梁州の灘江・巴州の符陽・長池・白石を析ちて集州を置く。漢の宕渠・符陽の地なり。今の奉天省遼瀋道瀋陽縣の東南四十五里。

【一五】熟獠。邊に近き者を熟獠と爲し、遠き者を生獠と爲す。

【一五】涪州。義寧元年、絳郡の翼城・絳縣を以て涪州を置く。

【一五】駱驛。相繼ぎて絶えざるなり。

【一五】義寧元年、蒲州の安邑・虞鄉・夏を以て安邑郡を置く。武德元年、虞州と曰ふ。又、義寧元年、蒲州の汾陰・龍門を以て汾陰郡を置く、武德元年、泰州と曰ふ。

時に〔一五〕王行本、猶ほ蒲反に據り、未だ下らず、亦、武周と相應ず。關中震駭す。上、手敕を出して曰はく、「賊勢此の如く、與に鋒を爭ひ難し。宜しく大河以東を棄て、謹みて〔一五〕關西を守るべきのみ」と。秦王世民、上表して曰はく、「太原は王業の基する所、國の根本なり。の資する所なり。若し擧げて之を棄つるは、臣竊に憤恨す。願はくは臣に精兵三萬を假さんことを。必ず冀はくは武周を平殄し、汾晉を克復せんことを」と。上、是に於て、悉く關中の兵を發し、以て世民の統ぶる所を益し、武周を撃たしむ。乙卯、華陰に幸し、長春宮に至り、以て之を送る。寶建德、兵を引き〔一五〕衛州に趣く。建德、軍を行る毎に、常に三道と爲し、輜重細弱は、中央に居り、步騎、左右を夾み、相去ること二里許り。建德、千騎を以て前行し、〔一五〕黎陽を過ぐるること三十里。李世勣、騎將丘孝剛を遣はし、二百騎を將ゐて之を偵はしむ。孝剛、驍勇にして馬槊を善くす。建德と遇ひ、遂に之を撃つ。建德、敗走す。〔一五〕右方の兵、之を救ひ、撃ちて孝剛を斬る。建德怒り、還りて黎陽を攻め、之に克ち、淮安王神通・李世勣の父蓋・魏徵及び帝の妹・同安公主を虜にす。唯だ李世勣、數百騎を以て走りて河を渡る。數日にして、其父の故を以て、還りて建德に詣りて降る。衛州、黎陽陥ると聞き、亦降る。建德、李世勣を以て左驍衛將軍と爲し、

【一五】 去年十二月、隋の將堯君素死し、王行本、蒲反に據ると、前卷に見ゆ。
 【一六】 關西。蒲津關以西。
 【一七】 衛州。漢の汲縣の地、東魏、義州を立つ。後周、衛州と改め、汲に治す。
 【一八】 黎陽縣は衛州の東北百二十里に在り。
 【一九】 右方。漢書の語を用ふ。此れ建德の兵の、右に在る者を謂ふ。

黎陽を守らしめ、常に其父蓋を以て自ら隨へて質と爲し、魏徵を以て起居舍人と爲す。滑州の刺史王軌の奴、軌を殺し、其首を攜へ、建德に詣りて降る。建德曰はく、「奴、主を殺すは大逆なり。吾何爲ぞ之を受けん」と。立ちどころに命じて奴を斬らしめ、其首を滑州に返す。吏民、感悅し、即日、降らんと請ふ。是に於て其隣の州縣及び徐圓朗等、皆、風を望みて歸附す。己未、建德、洛州に還り、萬春宮を築き、徙りて之に都す。淮安王神通を〔二〇〕下博に置き、待

【二〇】 下博縣は、時に冀州に屬す。今の直隸省保定道深縣の南三十里。
 【二一】 蓋し青城宮に因りて堡を爲るなり。
 【二二】 汴州。古の大梁の地、戰國の時、魏都と爲る。漢、陳留郡と爲し、東魏、梁州と爲す。後周、汴州と改む。

つに客禮を以てす。行軍總管羅士信、勇士を帥ゐ、夜、洛陽の外郭に入り、火を縱ち、清化里を焚きて還る。壬戌、士信、〔二二〕青城堡を拔く。王世充、自ら兵を將ゐて地を徇へ、滑臺に至り、黎陽に臨む。尉氏の城主時德劼、〔二三〕汴州の刺史王要漢、〔二四〕亳州の刺史丁叔則、使を遣はして之に降る。德劼を以て尉州の刺史と爲す。要漢は伯當の兄なり。〔二五〕夏侯端、黎陽に至る。李世勣、兵を發して之を送り、〔二六〕澶淵より河を濟り、檄を州縣に傳ふ。東は海に至り、南は淮に至るまで、二十餘州、皆、使を遣はして來り降る。行きて〔二七〕譙州に至る。會、汴、亳、王世充に降り、還路遂に絶ゆ。端、素より衆心を得、

【二三】 亳州。漢の譙縣、魏、譙郡と爲す。後周の武帝、亳州を置く。
 【二四】 是年四月、夏侯端を遣はして淮左を安撫せしむ。
 【二五】 澶淵。隋の開皇十六年、澶淵縣を置く。時に黎州に屬す。
 【二六】 譙州。亳州臨煥縣に、隋、譙州を置く。

從ふ所の二千人、糧盡くと雖も、委て去るに忍びず。端、澤中に坐し、馬を殺して以て士を饗し、因つて獻款して謂つて曰はく、『卿等の郷里は、皆已に賊に從ふ。特に事を共にするの情を以て、未だ委てらるる能はず。我は王命を奉ず、卿に從ふ可からず。卿は妻子有り、宜しく我に效ふべき無し。吾が首を斬りて賊に歸す可し。必ず富貴を獲ん』と。衆皆流涕して曰はく、『公、唐室に於て、親屬有るに非ず。直に忠義を以て、志、存を圖らず。某等、賤しと雖も、心亦人なり。寧ぞ肯て公を害して以て利を求めんや』と。端曰はく、『卿、殺さるるに忍びずんば、吾當に自ら勿ぬべし』と。衆、之を抱持し、乃ち復た同じく進む。潛行すること五日、餒ゑて死し、及び賊の撃つ所と爲り、奔り潰えて相失ふ者太半、唯だ五十二人を餘して同じく走り、『六六』登豆を采りて之を生食す。端、節を持し、未だ嘗て身を離さず。屢、從者を遣はし、散じて自ら生を求めしむ。衆、又、可かず。時に河南の地、皆、世充に入る。唯だ杞州の刺史李公逸、唐の爲めに堅く守り、兵を遣はして端を迎へ、之を館給す。世充、使を遣はして端を召し、衣を解きて之に遣り、仍ほ除書を送り、端を以て淮南郡公・尙書少吏部と爲す。端、使者に對し、書を焚き衣を毀りて曰はく、『夏侯端は、天子の大使なり。豈に王世充の官を受けんや。汝、吾が往くを欲せば、唯だ吾が首を取る可きのみ』と。因つて節旄を解きて之を懷にし、刃を竿に置き、山中より西に走る。復た蹊徑無く、荆棘を冒踐し、晝夜兼行し、『六六』宜陽に達するを得たり。從者、崖より墜ち、水に

【六六】登豆。野豆なり。
【六九】宜陽。唐の熊州。

溺れ、虎狼の食ふ所と爲り、又其半を喪ふ。其の存する者、鬚髮禿落し、復た人狀無し。端、闕に詣りて上に見え、但だ功無きを謝し、初めより自ら艱苦を言はず。上復た以て祕書監と爲す。【七〇】郎楚之、山東に至り、亦、竇建德の獲る所と爲る。楚之、屈せず、竟に還るを得。王世充、其從弟世辨を遣はし、徐・亳の兵を以て雍丘を攻む。李公逸、使を遣はして救を求む。上、賊境を隔つるを以て、救ふ能はず。公逸乃ち其屬李善行を留めて雍丘を守らしめ、身、輕騎を帥ゐて入朝す。襄城に至り、世充の伊州の刺史張殷の獲る所と爲る。世充謂つて曰はく、『卿、鄭を越えて唐に臣たり。其説安にか在る』と。公逸曰はく、『我、天下に於て、唯だ唐有るを知るのみ、鄭有るを知らず』と。世充怒りて之を斬る。善行も亦没す。上、公逸の子を以て襄邑公と爲す。

【七〇】郎楚之、夏侯端と同時に
出で使す。
【七一】華山。華州の華陰縣に在
り。岳祠有り。

卷の第一百八十八

唐紀四

高祖神堯大聖孝皇帝中の上

武德二年、十一月己卯、劉武周、涪州に寇す。

秦王世民、兵を引きて、龍門より、冰の壁に乘じて河を度り、栢壁に屯し、宋金剛と相持す。時に河東の州縣、俘掠の餘、未だ倉稟有らず。人情恇擾し、聚まりて城堡に入る。徴斂すれども得る所無く、軍中、食に乏し。世民、教を發して民に諭す。民、世民が帥と爲りて來るを聞き、歸附せざるは莫く、近きより遠きに及び、至る者日に多し。然る後、漸く其糧食を收め、軍食以て充つ。乃ち兵を休め馬に秣ひ、唯だ偏裨をして間に乘じて抄掠せしめ、大軍は壁を堅くして戰はず。是に由りて賊勢日に衰ふ。世民嘗て自ら輕騎を帥ゐて敵を覘ふ。騎皆四散し、世民、獨り一甲士と與に、丘に

唐高祖神堯大聖孝皇帝武德二年

- 【一】 武德二年。西紀六一九年なり。
- 【二】 武周復た西河に寇す。
- 【三】 栢壁。龍門關の東北に在り。
- 【四】 この河東は通じて大河以東を言ふ。専ら河東一郡を指すに非ず。
- 【五】 恇。懼るる也。

登りて寝ぬ。俄にして賊兵四合す。初め之を覺らず。會、蛇有り鼠を逐うて甲士の面に觸る。甲士驚き寝め、遽に世民に白す。俱に馬に上り、馳すること百餘步、賊の及ぶ所と爲る。世民、大羽箭を以て、射て其驍將を殛す。賊騎乃ち退く。

李世勣、唐に歸せんと欲すれども、禍の其父に及ばんことを恐れ、郭孝恪に謀る。孝恪曰はく、「吾新に竇氏に事へ、動もすれば則ち疑はる。宜しく先づ效を立てて以て信を取るべし。然る後に圖る可きなり」と。世勣、之に従ひ、王世充を獲嘉に襲うて之を破り、俘獲する所多く、以て建徳に獻す。建徳、是に由りて之を親しむ。初め、漳南の人劉黑闥、少きとき驍勇狡獪にして、竇建徳と善し。後、羣盜を爲し、轉じて郝孝徳・李密・王世充に事ふ。世充、以て騎將と爲す。世充が爲す所を見る毎に、竊に之を笑ふ。世充、黑闥をして、新郷を守らしむ。李世勣、撃ちて之を虜にし、建徳に獻す。建徳、署して將軍と爲し、爵漢東公を賜ふ。常に奇兵を將ゐて東西掩襲せしめ、或は潛に敵境に入り、虚實を規視せしむ。黑闥、往往、間に乘じて奮撃し、克獲して還る。

十二月庚申、上、華山に獵す。

于筠、永安王孝基に説く、「急に呂崇茂を攻めよ」と。獨孤懷恩、先づ攻具を成して然る後進まん

と請ふ。孝基、之に従ふ。崇茂、救を宋金剛に求む。金剛、其の將、善陽の尉遲敬徳・尋相を遣はし、兵を將ゐて、夏縣に奄至せしむ。孝基、表裏に敵を受け、軍遂に大に敗る。孝基、懷恩・筠・唐儉及び行軍總管劉世讓、皆、虜にせらる。敬徳、名は恭、字を以て行はる。上、裴寂を徵して入朝せしめ、其敗軍を責めて吏に下す。既にして之を釋し、寵待すること彌厚し。慰遲敬徳・尋相、將に滄州に還らんとす。秦王世民、兵部尚書殷開山・總管秦叔寶等を遣はし、之を美良川に邀へ、大に之を破る。斬首二千餘級。之を頃くして、敬徳・尋相、潛に精騎を引ききて、王行本を蒲反に援ふ。世民自ら歩騎三千を將ゐ、間道より、夜、安邑に趨き、邀へ撃ちて大に之を破る。敬徳・相、僅に身を以て免る。悉く其衆を俘にし、復た相壁に歸る。諸將、威、宋金剛と戦はんと請ふ。世民曰はく、「金剛は懸軍深く入り、精兵・猛將、威是に聚まる。武周、太原に據り、金剛に倚りて扞蔽を爲す。(金剛)軍に蓄積無く、虜掠を以て資と爲す。利、速かに戦ふに在り。我、營を閉ち銳を養ひ、以て其の鋒を挫き、兵を汾隰に分ち、其心腹を衝かば、彼、糧盡き計窮まり、自ら當に遁走すべし。當に此機を待つべし。未だ宜しく速かに戦ふべからず」と。永安の壯王孝基、逃れ歸らんと謀る。劉武周、之を殺す。李世勣、復た人を遣はし、竇建徳に説きて曰はく、「曹戴二州は、戸

【六】 是年閏二月、王世充、李育徳を殺し、獲嘉を取る。

【七】 漳南。貝州の漳南縣は、漢の東陽縣の地。開皇十八年、漳南と名づく。

【八】 新郷。隋・波・獲嘉二縣の地を分ち、古の新樂城に於て新郷縣を置く。時に義州に屬す。後、殷州に屬す。

【九】 朔州の善陽縣は漢の定襄縣の地。隋の大業の初、善陽縣を置く。

【一〇】 安邑。古縣、時に虜州に屬す。

【一一】 汾隰。隋の龍泉・西河二郡の地なり。

【一二】 曹戴。隋、曹州を濟陰に、戴州を成武に置く。大業の初、二州を廢し、併せて濟陰郡と爲す。大業の亂に、復

口完實す。孟海公、其地を竊有し、鄭人と、外は合ひ内は離る。若し大軍を以て之に臨まば、期を指して取る可からん。既に海公を得、以て徐・兗に臨まば、河南は、戦はずして定む可からん」と、建徳、以て然りと爲し、自ら將として河南を徇へんと欲し、先づ其行臺曹旦等を遣はし、兵五萬を將ゐて河を濟らしむ。世勣、兵三千を引きて之に會す。

三年、春正月、將軍秦武通、王行本を蒲反に攻む。行本出で戦ひて敗れ、糧盡きて援絶え、圍を突きて走らんと欲す。之に隨ふ者無し。戊寅、巴、上、蒲州に幸し、行本を斬る。秦王世民、輕騎にて上に蒲州に謁す。巴、上、長安に還る。

李世勣、竇建徳が河南に至るを俟ち、其營を掩襲して之を殺さんと謀り、其父を得、建徳の土地を并せて以て唐に歸せんことを冀ふ。會建徳、妻産し、之を久しくして至らず。曹旦は建徳の妻の兄なり。河南に在り、侵擾する所多し。諸賊の羈屬する者、皆、之を怨む。賊帥魏郡の李文相、李商胡と號す。衆五千餘人を聚め、孟津・中潭に據る。母霍氏、亦騎射を善くし、自ら霍總管と稱す。世勣、商胡に結びて昆弟と爲り、入りて商胡の母を拜す。母泣きて世勣に謂つて曰はく、「竇氏は無道なり。

如何ぞ之に事ふる」と。世勣曰はく、「母、憂ふる無かれ。一月を過ぎずして、當に之を殺して相與に唐に歸すべきのみ」と。世勣辭し去る。母、商胡に謂つて曰はく、「東海公、我に許す、共に此賊を圖らんと。事久しくば變生せん。何ぞ必ずしも其の來るを待たん。速かに決するに如かず」と。是夜、商胡、曹旦の偏裨二十三人を召し、之に酒を飲ませ、盡く之を殺す。旦の別將高雅賢・阮君明、尚ほ河北に在り、未だ濟らず。商胡、巨舟四艘を以て、河北の兵三百人を濟し、中流に至りて悉く之を殺す。獸醫有り、水を游ぎて、免るるを得、南岸に至りて曹旦に告ぐ。旦、嚴警して備を爲す。商胡既に事を舉げ、始めて人を遣はして李世勣に告ぐ。世勣、曹旦と、營を連ぬ。郭孝恪、世勣に、旦を襲はんことを勸む。世勣未だ決せず。旦が已に備有るを聞き、遂に孝恪と與に、數十騎を帥ゐて來奔す。商胡復た精兵二千を引き、北して阮君明を襲ひて之を破る。高雅賢、衆を收めて去る。商胡、之を追ひ、及ばずして還る。建徳の羣臣、李蓋を誅せんと請ふ。建徳曰はく、「世勣は唐の臣にして、我の虜にする所と爲り、本朝を忘れざるは、乃ち忠臣なり。其父何の罪あらん」と。遂に之を赦す。甲午、世勣・孝恪、長安に至る。曹旦遂に、濟州を取り、復た洺州に還る。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武徳三年

- 【一】 蒲州。蒲阪に治す。
- 【二】 絳州。正平に治す。
- 【三】 孟津、中潭。此れ即ち河陽の中潭城なり。中潭城は東魏の築く所、仍て河陽關を置く。
- 【四】 王世充、時に王世辯をして徐州に據らしめ、徐圓朗をして兗州に據らしむ。
- 【五】 巴。蜀州。正平に治す。
- 【六】 孟津、中潭。此れ即ち河陽の中潭城なり。中潭城は東魏の築く所、仍て河陽關を置く。

- 【一】 獸醫は能く牛馬を醫するを以て軍に従ふ。
- 【二】 濟州。武徳の初、張青特、河北に據る。濟北郡は即ち濟州なり。是後、建徳、唐と虎牢に相持す。張青特、糧を運し、唐の獲る所と爲る。蓋し先に濟州を以て曹旦に降りしなり。
- 【三】 潞州。春秋の潞子國、秦漢、上黨郡と爲す。後周、潞州を立つ。今の山西省冀寧道潞城縣の西北に治す。
- 【四】 長子・壺關。二縣皆潞州に屬す。
- 【五】 河東縣は蒲州を帶ぶ。即

二月庚子、上、華陰に幸す。

劉武周、兵を遣はして潞州に寇し、長子・壺關を陥る。潞州の刺史郭子武、禦ぐ能はず。上、將軍河東の王行敏を以て之を助けしむ。行敏、子武と、叶はず。或るひと言ふ、「子武將に叛かんとす」と。行敏、子武を斬りて以て徇ふ。乙巳、武周復た兵を遣はし、潞州に寇す。行敏、擊ちて之を破る。

壬子、開州の蠻冉肇則、通州を陥る。

甲寅、將軍桑顯和等を遣はし、呂崇茂を夏縣に攻めしむ。

初め工部尚書獨孤懷恩、蒲反を攻む。久しくして下らず、失亡多し。上、數、勅書を以て之を誚讓す。懷恩、是に由りて怨望す。上、嘗て戲に懷恩に謂つて曰はく、「姑の子、皆已に天子と爲る。次、應に舅の子に至るべきか」と。懷恩も亦頗る此を以て自負す。或る時腕を扼して曰はく、「我が家豈に、女のみ獨り貴からんや」と。遂に麾下元君寶と反を謀る。會、懷恩、君寶、唐儉と、皆尉遲敬德に没す。君寶、儉に謂つて曰はく、「獨孤尚書、近ごろ大事を謀る。若し能く早く決せば、豈に此辱有らんや」と。秦王世民が敬德を美良川に敗るに及び、懷恩逃れ歸る。上復た之をして兵を

ち蒲反なり。隋の開皇十六年、蒲反を析ちて縣を置く。

【九】開州。隋の巴東郡の盛山縣。盛山は漢の巴郡の胸臆縣なり。義寧元年、巴東の盛山・新浦・通川の萬世・西流を分ちて萬州を置く。武德元年、開州と改む。

【一〇】通州。漢の宕渠縣の地、梁、萬州を置く。元魏、通州と改む。隋、通川郡と爲す。武德元年、復た通州と爲す。

【一一】姑の子。隋の煬帝及び上を謂ふなり。

【一二】女貴し。周の明帝の後、隋の文帝の後及び上の母は、皆獨孤氏なり。

將ゐて蒲反を攻めしむ。君寶、又、儉に謂つて曰はく、「獨孤尚書、遂に難を抜けて還るを得、復た蒲反に在り。王者は死せずと謂ふ可し」と。儉、懷恩が遂に其謀を成さんことを恐れ、乃ち慰遲敬德に説き、劉世讓をして還りて唐と連和せしめんと請ふ。敬德、之に従ふ。遂に懷恩の反狀を以て聞す。時に王行本已に降る。懷恩入りて其城に據る。上、方に河を濟り、懷恩の營に幸し、已に舟に登る。世讓適、至る。上大に驚きて曰はく、「吾、免るを得たるは、豈に天に非ずや」と。乃ち懷恩を召さしむ。懷恩未だ事の露るるを知らず、輕舟にて來り至る。即ち執へて以て吏に屬し、分ちて黨與を捕ふ。甲寅、懷恩及び其黨を誅す。

【一三】楊成道。齊王暕の遺腹の子。

【一四】定襄。隋の定襄郡なり、大利城に治す。

【一五】納言云云。官名を復舊するなり。

境內、盜無く、商旅・野宿す。突厥の處羅可汗、楊成道を迎へ、立てて隋王と爲し、中國の士民の北に在る者、處羅、悉く以て之に配す。衆萬人有り。百官を置き、皆隋の制に依り、定襄に居る。

三月乙丑、劉武周、其將張萬歲を遣はし、涪州に寇せしむ。李仲文、擊ちて之を走らす。俘斬數千人。

納言を改めて侍中と爲し、內史令を中書令と爲し、給事郎を給事中と爲す。

甲戌、內史侍郎封德彝を以て中書令と爲す。

王世充の將帥・州縣、來り降る者、時月相繼ぐ。世充乃ち其法を峻にし、一人亡叛すれば、家を擧げて少長と無く戮に就き、父子・兄弟・夫婦、相告げて之を免るるを許す。又、五家をして保を爲さしめ、家を擧げて亡ぐる者有り、四鄰、覺らざれば、皆、誅に坐す。人を殺すこと益多く、而して亡ぐる者益甚だし。樵采の人に至るまで、出入皆限數有り。公私愁窘し、人、生を聊んせず。又、宮城を以て大獄と爲し、意の忌む所の者は、其家屬を并せて、宮中に收繫す。諸將出で討つときは、亦、其の家屬を宮中に質とす。禁止する者に常ニ萬口に減せず。餓死する者日に數十有り。世充、又、臺省の官を以て〔一〕司・鄭・管・原・伊・殷・梁・湊・嵩・谷・懷・德等十二州の營田使と爲す。〔二〕丞郎、此行を爲すを得る者は、喜ぶこと登仙するが若し。

甲申、行軍副總管張綸、劉武周を涪州に敗る。俘斬千餘人。
 西河公、張綸、眞鄉公李仲文、兵を引ききて、石州に臨む。劉季眞懼れて詐り降る。乙酉、季眞を以て石州總管と爲し、姓李氏を賜ひ、彭山郡王と封す。

蠻會冉肇則、〔三〕信州に寇す。趙郡公孝恭、與に戰ひて、利あらず。李靖、

一人亡叛すれば、家を擧

【一】 司鄭云。世充、洛州を以て司州と爲し、汜水を鄭州と爲し、管城を管州と爲し、沁水を原州と爲し、襄城を伊州と爲し、獲嘉を殷州と爲し、睢陽を梁州と爲す。湊州闕く。九域志に、鄭州の古跡に湊水有り、當に湊州を此に置くべし。嵩陽を嵩州と爲し、大谷を谷州と爲し、河内を懷州と爲し、武德を德州と爲す。

【二】 丞郎。尙書左右丞及び諸曹郎なり。

【三】 此張綸は即ち上の張綸、上には其官を書し、此には其爵を書す。

【四】 石州。隋の離石郡。

【五】 信州。隋の巴東郡、武德二年、改めて夔州と爲す。奉節縣に治す。

兵八百を將ゐ、襲撃して之を斬り、五千餘人を俘にす。己丑、開・通・二州を復す。孝恭、又、蕭銑の東平王閣提を撃ち、之を斬る。

夏四月丙申、上、華山に祠る、壬寅、長安に還る。

益州の道行臺を置き、〔一〕益・利・會・鄭・涇・遂の六總管を以て焉に隸す。

劉武周、數、涪州を攻め、李仲文の敗る所と爲る。

宋金剛の軍中・食盡く。丁未、金剛、北に走る。秦王世民、之を追ふ。

羅士信、〔二〕慈澗を圍む。王世充、太子玄應をして之を救はしむ。士信、

玄應を刺し、馬より墜す。人、之を救ひ、免るるを得たり。

壬子、〔三〕顯州道行臺楊士林を以て行臺尙書令と爲す。

甲寅、秦王世民に益州道行臺尙書令を加ふ。

秦王世民、追うて尋相に〔四〕呂州に及び、大に之を破る。勝に乗じて北

ぐるを逐ひ、一晝夜に、行くこと二百餘里。戰ふこと數十合、高壁嶺に至る。總管劉弘基、轡を執り

て諫めて曰はく、『大王、賊を破り、北ぐるを逐うて此に至る。功亦足れり。深く入りて、已ます。身

を愛まざるか。且つ士卒飢疲す。宜しく留まりて此に壁すべし。兵糧畢く集まるを俟ち、然る後復

た進まんも、未だ晩からざるなり』と。世民曰はく、『金剛、計窮りて走り、衆心離沮す。功は成り難

【一】 益州は隋の蜀郡。利州は隋の義城郡。會州は隋の涼州縣、會寧鎮、西魏の會州なり。鄭州は隋の上郡、西魏の敷州。涇州は隋の安定郡。遂州は隋の遂寧郡。

【二】 慈澗。河南郡壽安縣に在り。

【三】 去年正月、楊士林降る。

【四】 呂州。霍邑に治す。

くして敗れ易く、機は得難くして失ひ易し。必ず此勢に乗じて之を取らん。若し更に淹留し、之をして計立ち備成らしめば、復た攻む可からざらん。吾、忠を竭し國に徇ふ。豈に身を顧みんや」と。遂に馬に策うちて進む。將士、敢て復た飢を言はず。追うて金剛に雀鼠谷に及ぶ。一日八戦し、皆之を破る。俘斬數萬人。夜、雀鼠谷の西原に宿す。世民食はざること二日。甲を解かざること三日。軍中止だ一羊有り。世民、將士と、分ちて之を食ふ。丙辰、陝州總管于筠、金剛の所より逃れ來る。世民、兵を引ききて介休に趣く。金剛尙ほ衆二萬有り。戊午、西門を出で、城を背にして陳を布く。南北七里。世民、總管李世勣を遣はし、與に戦はしむ。小しく卻く。賊の乘する所と爲る。世民、精騎を帥ゐて之を撃ち、其陳後に出づ。金剛大に敗る。斬首三千級。金剛、輕騎にて走る。世民、之を追ふこと數十里。張難堡に至る。浩州行軍總管樊伯通、張德政、堡に據りて自ら守る。世民、冑を免ぎて之に示す。堡中、喜びて諫ぎ且つ泣く。左右告ぐるに王の食はざるを以てす。濁酒・脱粟飯を獻す。尉遲敬德、餘衆を收めて介休を守る。世民、任城王道宗・宇文士及を遣はし、往きて之を諭さしむ。敬德、尋相と、介休及び永安を擧げて降る。世民、敬德を得て甚だ喜び、以て右一府統軍と爲し、其舊衆八千を將ゐて諸營と相參せしむ。屈突通、其變を慮り、驛以て言を爲す。世民、聽かず。劉武周、

- 【一五】 去年十二月、筠、金剛の將に擒にせらる。
- 【一六】 介休、介州の治所。
- 【一七】 張難堡、張難は蓋し人の姓名、堡を築きて自ら守る、因つて以て名づく。
- 【一八】 永安、漢の中陽縣なり、後魏、名を更む。時に浩州に屬す。雀鼠谷は永安介休二縣の間に在り。

金剛敗れぬと聞き、大に懼れ、并州を棄て、突厥に走る。金剛、其餘衆を收め、復た戦はんと欲す。衆、肯て従ふもの莫し。亦、百餘騎と與に、突厥に走る。世民、晉陽に至る。武周が署する所の僕射楊伏念、城を以て降る。唐儉、府庫を封じ、以て世民を待つ。武周が得る所の州縣、皆、唐に入る。未だ幾くならずして、金剛、上谷に走らんと謀る。突厥追ひ獲て、之を腰斬す。嵐州總管劉六兒、宋金剛に従ひて介休に在り。秦王世民、擒へて之を斬る。其兄季眞、石州を棄て、劉武周の將馬邑の高滿政に奔る。滿政、之を殺す。武周が南に寇するや、其内史令苑君璋諫めて曰はく、「唐主、一州の衆を擧げ、直に長安を取り、向ふ所、敵無し。此れ乃ち天授にして、人力に非ざるなり。晉陽以南、道路險隘にして、縣軍深く入り、後に繼ぐ無し。若し進み戦うて、利あらずんば、何を以てか自ら還らん。如かじ、北は突厥を連ね、南は唐朝に結び、南面して孤と稱せんには、長策と爲すに足る」と。武周、聽かず。君璋を留めて朔州を守らしむ。敗るるに及び、泣きて君璋に謂つて曰はく、「君が言を用ひず、以て此に至れり」と。之を久しくして、武周、亡げて馬邑に歸らんと謀る。事泄れ、突厥、之を殺す。突厥、又、君璋を以て大行臺と爲し、其餘衆を統べしめ、仍ほ郁射設をして兵を督して鎮を助けしむ。

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德三年

- 【一九】 胡三省曰はく、秦王が劉武周・宋金剛を破りしは、薛仁果・宗羅睺を破りし方略と一なりと。
- 【二〇】 唐儉、于筠と同じく擒へらる。
- 【二一】 金剛は、本、上谷に起る。
- 【二二】 去年五月、劉六兒降り、今年三月、季眞降る。而して實は金剛・武周に附く。今皆誅死す。
- 【二三】 縣軍、懸軍に同じ。
- 【二四】 西濟州、武德二年、王世充の將丁伯德、濟源縣を以て來り降る。西濟州を置く。西

庚申、懷州總管黃君漢、王世充の太子玄應を西濟州に撃ち、大に之を破る。熊州行軍總管史萬寶、之を九曲に邀へ、又之を破る。

辛酉、王世充、鄧州を陥る。

上、并州平ぐと聞き、大に悦ぶ。壬戌、羣臣を宴して、繒帛を賜ふ。

自ら御府に入り、力を盡して之を取らしむ。唐險の官爵を復し、仍ほ以て并州道安撫大使と爲し、籍する所の獨孤懷恩の田宅資財は、悉く以て之に賜ふ。世民、李仲文を留めて并州に鎮せしむ。劉武周、數、兵を遣はして入寇す。仲文輒ち撃ちて之を破り、城堡百餘所を下す。仲文に詔して、并州總管を檢校せしむ。

五月、竇建德、高士興を遣はし、李藝を幽州に撃たしむ。克たず。退きて籠火城に軍す。藝、襲撃して大に之を破る。斬首五千級。建德の大將軍王伏寶、勇略、軍中に冠たり。諸將、之を疾み、其の反を謀るを云ふ。建德、之を殺す。伏寶曰はく、「大王、奈何ぞ讒言を聽き、自ら左右の手を斬るか」と。

初め尉遲敬德、兵を將ゐて、呂崇茂を助け、夏縣を守る。上、潛に使を遣はし、崇茂の罪を赦し、夏州の刺史に拜し、敬德を圖らしむ。事泄れ、敬德、之を殺す。敬德去る。崇茂の餘黨復た夏縣

【一】 唐の御府は蓋し内侍省内府局に屬す。
【二】 其の懷恩の反謀を發ししを賞するなり。
【三】 此れ武周が未だ死せざる前を言ふ。
【四】 馬邑郡界の城堡を謂ふ。
【五】 檢校官は未だ眞と爲らざるなり。
【六】 蓋し夏縣を以て夏州と爲すなり。

に據りて拒守す。秦王世民、軍を引ききて晉州より還りて夏縣を攻む。壬午、之を屠る。辛卯、秦王世民、長安に至る。是月、突厥、阿史那掲多を遣はし、馬千匹を王世充に獻じ、且つ昏を求む。世充、宗女を以て之に妻せ、并せて之と互市す。

六月壬辰、詔して、和州總管東南道行臺尚書令楚王杜伏威を以て、使持節・總管江淮以南諸軍事・楊州の刺史・東南道行臺尚書令・淮南道安撫史と爲し、吳王に進め封じ、姓李氏を賜ふ。輔公祏を以て行臺左僕射と爲し、舒國公に封ず。

丙午、皇子元景を立てて趙王と爲し、元昌を魯王と爲し、元亨を鄧王と爲す。

顯州行臺尚書令楚公楊士林、唐の官爵を受くと雖も、而も北は王世充に結び、南は蕭銑に通ず。廬江王瑗に詔して、安撫使李弘敏と與に、之を討たしむ。兵未だ行かざるに、長史田瓚、士林の忌む所と爲り、甲寅、瓚、士林を殺し、世充に降る。世充、瓚を以て顯州總管と爲す。

秦王世民が劉武周を討つや、突厥の處羅可汗、其弟步利設を遣はし、二千騎を帥ゐて唐を助けしむ。武周既に敗れ、是月、處羅、晉陽に至る。總管李仲文、制する能はず。又、倫特勒を留め、數百人に將たらしめ、「仲文を助けて鎮守す」と云ひ、石嶺より以北、皆、兵を留めて之に戍せしめて

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德三年

【一】 石嶺は代州に在り。今の山西省冀寧道陽曲縣の東北に在り、勢甚だ險固なり。

去る。

上、王世充を撃たんことを議す。世充、之を聞き、諸州鎮の驍勇を選び、皆、洛陽に集め、四鎮將軍を置き、人を募りて、四城を分ち守らしむ。秋七月壬戌、秦王世民に詔し、諸軍を督して世充を撃たしむ。陝東道行臺屈突通の二子、洛陽に在り。上、通に謂つて曰はく、『今、卿をして東征せしめんと欲す。卿の二子を如何せん』と。通曰はく、『臣、昔、俘囚と爲り、分、當に死に就くべし。陛下、縛を釋き、加ふるに恩禮を以てせり。是の時に當り、臣、心口相誓ひ、更生の餘年を以て陛下の爲めに節を盡さんことを期せり。但だ死所を獲ざらんことを恐るるのみ。今、先驅に備はるを得ば、二兒何ぞ顧みるに足らんや』と。上、歎じて曰はく、『義に狗するの士、一に此に至るか』と。

癸亥、突厥、使を遣はし、潛に王世充に詣る。潞州總管李襲譽、邀へ撃ちて之を敗る。虜牛羊萬計。

驃騎大將軍 可朱渾定遠、『并州總管李仲文、突厥と謀を通じ、洛陽の兵交はるを俟ちて、胡騎を引ききて直に長安に入らんと欲す』と告ぐ。甲戌、皇太子に命じ、蒲反に鎮し、以て之に備へしむ。又、禮部尚書唐儉を遣はし、并州を安撫せしめ、暨く并州總管府を廢し、仲文を徵して入朝せ

- 【四二】 四城。洛陽の四城なり。
- 【四三】 屈突通、時に陝東道行臺左僕射を通判す。
- 【四四】 俘囚と爲り云云。事、一百八十四卷義寧元年十二月に見ゆ。
- 【四五】 可朱渾。虜の三字姓。
- 【四六】 新安。洛州の西七十里に在り。
- 【四七】 南城。皇城の南端門の外に在り。

しむ。壬午、秦王世民、新安に至る。王世充、魏王弘烈を遣はし、襄陽に鎮せしめ、荆王行本をして、虎牢に鎮せしめ、宋王泰をして、懷州に鎮せしめ、齊王世暉をして、南城を檢校せしめ、楚王世偉をして、寶城を守らしめ、太子玄應をして、東城を守らしめ、漢王玄恕をして、含嘉城を守らしめ、魯王道狗をして、曜儀城を守らしめ、世充自ら戰兵を將る、左輔大將軍楊公卿、左龍驤二十八府の騎兵を帥る、右游擊大將軍郭善才、內軍二十八府の歩兵を帥る、左游擊大將軍 跋野綱、外軍二十八府の歩兵を帥る、總て三萬人、以て唐に備ふ。弘烈・行本は世偉の子、泰は世充の兄の子なり。

- 【四八】 寶城。即ち寶城朝堂、蓋し皇城なり。東城の内に在り。
- 【四九】 東城。皇城の東に在り。
- 【五〇】 含嘉城。即ち含嘉倉城。
- 【五一】 曜儀城。東城の東に在り。
- 【五二】 跋野。虜の複姓。
- 【五三】 龍門。伊闕の龍門なり。

梁師都、突厥・稽胡の兵を引ききて入寇す。行軍總管段德操、撃ちて之を破る。斬首千餘級。羅士信、前軍を將ゐて慈澗を圍む。王世充、自ら兵三萬を將ゐて之を救ふ。己丑、秦王、輕騎を將る、前みて世充を覘ひ、猝に之と遇ふ。衆寡、敵せず、道路縣阨にして、世充の圍む所と爲る。世民の左右馳射し、其左建威將軍燕琪を獲たり。世充乃ち退く。世民、營に還る。塵埃、面を覆ふ。軍、復た識らず。之を拒がんと欲す。世民、冑を免ぎて自ら言ひ、乃ち入るを得たり。旦日、歩騎五萬を帥る、進みて慈澗に軍す。世充、慈澗の戍を抜き、洛陽に歸る。世民、行軍總管史萬寶を遣はし、宜陽より、南して龍門に據らしめ、將軍劉德威をして、太行より、東して河内を圍ましめ、上谷公王

君廓をして、洛口より其餉道を断たしめ、懷州總管黃君漢をして、河陰より廻洛城を攻めしめ、大軍、北邙に屯し、營を連ねて以て之に逼る。世充の【四】洧州の長史、繁水の張公謹、刺史雀樞と與に、州城を以て來り降る。

八月丁酉、南寧の西爨蠻、使を遣はして入貢す。初め隋の末、蠻酋【五】爨翫、反して誅せられ、諸子、没して官奴と爲り、其地を弃つ。帝、位に即き、翫の子弘達を以て【六】昆州の刺史と爲し、其父の尸を持して歸葬せしむ。益州の刺史段綸、因つて使を遣はし、其部落を招諭す。皆來り降る。

己亥、竇建徳の【七】共州の縣令唐綱、刺史を殺し、州を以て來り降る。【八】鄧州の土豪、王世充が署する所の刺史を執へて來り降る。

癸卯、梁師都の【九】石堡の留守張舉、千餘人を帥ゐて來り降る。甲辰、黃君漢、校張夜叉を遣はし、舟師を以て廻洛城を襲ひ、之に克ち、其將達奚善定を獲、河陽の南橋を断ちて還り、其堡聚二十餘を降す。世充、太子玄應をして、楊公卿等を帥ゐ、廻洛を攻めしむ。克たず。乃ち月城を其西に築き、兵を留めて之に成せしめ、世充、【一〇】青城宮に陳す。秦

【四】 洧州。世充蓋し扶溝・鄆陵を以て洧州を置く。
【五】 繁水縣は武陽郡に屬す。
【六】 爨翫。一百七十八卷、隋の文帝開皇十七年十八年に見ゆ。
【七】 昆州。本、隋置く。隋亂れて廢す。武徳元年、南中を開きて復た置き、晉寧・秦賊等の縣を領す。
【八】 共州。衛州の共城縣に、武徳元年、共州を置く。
【九】 是年五月、王世充、鄧州を陷る。
【一〇】 石堡。此石堡は蓋し夏州の東に在り、開元・天寶の間に吐蕃と争ひし石堡城に非ず。
【一一】 舟師を以て懷州より河を度り、廻洛を襲ひ破る。
【一二】 青城宮。此青城宮は洛城の西北に在るが若し。

王世民も亦陳を置きて之に當る。世充、水を隔てて世民に謂つて曰はく、「隋室・傾覆し、唐、關中に帝たり、鄭、河南に帝たり。世充未だ嘗て西に侵さざるに、王忽ち兵を擧げて東に來るは、何ぞや」と。世民、宇文士及をして之に應へて曰はしむ、「四海、皆、皇風を仰ぐ。唯だ公獨り聲教を阻む。此が爲めにして來る」と。世充曰はく、「相與に兵を息め好を講ずるも、亦善からずや」と。又、之に應へて曰はく、「詔を奉じて東都を取る。好を講せしめざるなり」と。暮に至り、各、兵を引き還る。

上、使を遣はし、竇建徳と連和す。建徳、【一三】同安長公主を遣り、使者に隨つて俱に還らしむ。

乙卯、劉德威、懷州を襲ひ、其外郭に入り、其堡聚を下す。

九月庚午、梁師都の將劉旻、【一四】華池を以て來り降る。以て林州總管と爲す。
癸酉、王世充の顯州總管、田瓚、所部二十五州を以て來り降る。是より、【一五】襄陽の聲問、世充と絶ゆ。
史萬寶、進みて、【一六】甘泉宮に軍す。丁丑、秦王世民、右武衛將軍王君廓

【一三】 世充、王弘烈をして襄陽に鎮せしむ。襄陽より洛に至るには、路、南陽に出づ。鄧州既に唐に屬し、南陽の路、由る可からざれば、顯州より蔡汝に出で以て洛に至る。顯州、今、又唐に降る、故に襄陽の聲問絶ゆ。
【一四】 甘泉宮。漢の甘泉宮は京兆の醴泉縣に在り。史萬寶、新安より軍を進めて洛陽に逼る。應に漢の甘泉宮に至るべ

を遣はし、(六)輶轅を攻めて之を抜く。王世充、其將魏隱等を遣はし、君廓を撃たしむ。君廓、偽り通れて伏を設け、大に之を破る。遂に東して地を徇へ、(七)管城に至りて還る。是より先、王世充の將廓士衡・許羅漢、唐の境を掠む。君廓、策を以て撃ちて之を却く。詔して、之を勞ひて曰はく、『卿、十三人を以て賊一萬を破る。古より、少を以て衆を制する、未だ之れ有らざるなり』と。世充の尉州の刺史時德寂、所部(八)杞・夏・陳・隨・許・潁・尉七州を帥ゐて來り降る。秦王世民、便宜を以て州縣の官を命じ、竝に世充の署する所に依り、變易する所無し。尉州を改めて南汴州と爲す。是に於て、河南の郡縣、相繼ぎて來り降る。劉武周の降將尋相等、多く叛き去る。諸將、尉遲敬徳を疑ひ、之を軍中に囚ふ。行臺左僕射屈突通、尙書殷開山、世民に言つて曰はく、『敬徳は、驍勇絶倫なり。今既に之を囚ふ。心必ず怨望せん。之を留めば恐らくは後患を爲さん。如かじ遂に之を殺さんには』と。世民曰はく、『然らず。敬徳若し叛かば、豈に尋相の後に在らんや』と。遂に命じて之を釋さしめ、引きて臥内に入れ、之に金を賜ひて曰はく、『丈夫は意氣相期す。小嫌を以て意に介する勿れ。吾、終に讒言を信じて以て忠良を害せず。公宜しく之を體すべ

一一八
からす。隋志に、河南の壽安縣は後魏の甘棠縣にして、顯仁宮あり。或は顯仁宮を以て甘棠宮と爲すならん。泉は恐らくは當に棠に作るべからん。
【六】輶轅。洛州緱氏縣の東南に輶轅故關有り。
【七】管城。滎陽郡管城縣、舊中牟と曰ふ。開皇十六年、析ちて管城縣を置く。時に管州の治所たり。
【八】杞・夏・陳・隨・許・潁・尉。王世充、蓋し杞州を雍丘に、夏州を陽夏に、陳州を宛丘に置く。隨州は考ふる所無し。汴州の誤ならん。許州を長社に、潁州を汝陰に、尉州を尉氏に置く。

し。必ず去らんと欲せば、此金を以て相資し、一時事を共にするの情を表するなり』と。辛巳、世民、五百騎を以て(九)戰地を行る。(一〇)魏の宣武陵に登る。王世充、步騎萬餘を帥ゐ、猝に至りて之を圍む。單雄信、槊を引きて、直に世民に趨く。敬徳、馬を躍らして大に呼び、横さまに雄信を刺して馬より墜す。世充の兵稍却く。敬徳、世民を翼けて圍を出づ。世民、敬徳、更に騎兵を帥ゐて還り戦ひ、世充の陳に出入し、往反、礙ふる所無し。屈突通、大兵を引きて繼ぎ至る。世充、兵大に敗れ、僅に身を以て免る。其冠軍大將軍陳智略を擒にす。斬首千餘級。(一一)排稍の兵六千を獲たり。世民、敬徳に謂つて曰はく、『公何ぞ相報ゆるの速かなるや』と。敬徳に金銀一篋を賜ふ。是より、寵遇日に隆なり。敬徳善く稍を避く。毎に單騎にて敵陳の中に入る。敵、稍を叢めて之を刺す。終に、能く傷つくるもの莫し。又、能く敵の稍を奪ひ、返りて之を刺す。齊王元吉、馬稍を善くするを以て自負す。敬徳の能を聞き、各、刃を去りて相與に勝負を校せんと請ふ。敬徳曰はく、『敬徳は謹みて當に之を去るべし。王は去る勿れ』と。既にして元吉、之を刺し、終に中つる能はず。秦王世民、敬徳に問うて曰はく、『稍を奪ふと稍を避くると、孰れか難き』と。敬徳曰はく、『稍を奪ふこと難し』と。乃ち敬徳に命じて、元吉の稍を奪はしむ。元吉、稍を操り馬を躍らし、志、之を刺すに在り。敬徳、須臾にして三たび其稍を奪ふ。元吉、面のあたり相歎異すと雖も、内甚た之

一一九
【九】陳を置く可き地形を巡視するなり。
【一〇】魏の宣武陵。景陵と曰ふ。北邙山に在り。魏の世宗、宣武帝と諡す。
【一一】排稍。排を執り稍を執るの兵をいふ。稍は槊と同じ。

を恥づ。

叛胡、嵐州を陥る。

初め王世充、酈元真を以て滑州行臺僕射と爲す。濮州の刺史杜才幹は李密の故の將なり。元真が密に叛くを恨み、詐りて其衆を以て之に降る。元真、其官勢を恃み、自ら往きて招慰す。才幹出で迎へ、延き入れて坐に就き、執へて之を數めて曰はく、『汝は本庸才なるに、魏公、汝を元僚に置けり。毫髮の功を建てず、乃ち滔天の禍を構ふ。今來りて死を送る、是れ汝の分なり』と。遂に之を斬り、人を遣はし、其首を齎し、黎陽に至り、密の墓を祭らしむ。壬午、濮州を以て來り降る。

突厥の莫賀咄設、涼州に寇す。總管楊恭仁、之を撃ち、敗る所と爲る。

男女數千人を掠めて去る。

丙戌、田瓚を以て顯州總管と爲し、爵蔡國公を賜ふ。

冬十月甲午、王世充の大將軍張鎮周來り降る。

甲辰、行軍總管羅士信、王世充の碓石堡を襲ひ、之を拔く。士信、

又、千金堡を圍む。堡中の人、之を罵る。士信、夜、百餘人を遣はし、嬰兒數十を抱き、堡下に至

り、兒をして啼呼せしめ、詐りて云はく、『東都より來り、羅總管に歸す』と。既にして相謂つて曰はく、『此れ千金堡なり。吾が屬誤れり』と。即ち去る。堡中以爲へらく、士信已に去り、來る者は洛陽の亡人なりと。兵を出して之を追ふ。士信、兵を道に伏せ、其門の開くを伺ひ、突入して之を屠る。

竇建徳が幽州を圍むや、李藝、急を高開道に告ぐ。開道、二千騎を帥ゐて之を救ふ。建徳の兵引き去る。開道、藝に因りて、使を遣はして來り降る。戊申、開道を以て蔚州總管と爲し、姓李氏を賜ひ、北平郡王に封ず。開道、矢鏃有り頬に在り、醫を召して之を出さしむ。醫曰はく、『鏃深くして、出す可からず』と。開道怒りて之を斬る。

別に一醫を召す。曰はく、『之を出さば恐らくは痛まん』と。又、之を斬る。更に一醫を召す。醫曰はく、『出す可し』と。乃ち骨を鑿ち、楔を其間に置き、骨裂くること寸餘、竟に其鏃を出す。開道、妓を奏し膳を進めて、輟まず。

竇建徳、衆二十萬を帥ゐ、復た幽州を攻む。建徳の兵、已に堞を攀づ。薛萬均・萬徹、敢死の士百人を帥ゐ、地道より其背に出で、之を掩撃す。建徳の兵潰走す。斬首千餘級。李藝の兵、勝に乗じ、其營に薄る。建徳、營中に陳す。塹を填めて出で、奮撃して大に之を破る。建徳、北ぐるを逐ひ、其城下に至り、之を攻む。克たずして還る。

【七四】濮州。東平郡鄆城縣、舊、濮陽郡を置く、開皇十六年、濮州を置く。大業の初、州を廢し、鄆城縣を以て東平に屬す。蓋し李密復た州を置くなり。今の山東省東臨道濮縣。

【七五】密に叛くこと一百八十六卷元年九月に見ゆ。

【七六】李密が以て長史と爲せるを謂ふ。

【七七】碓石。水經注に穀水、新安縣より、東流して千秋亭を逕、又、東して雍谷溪を逕、岫を廻りて榮紆し、石路、峽を阻す、故に亦峽石の稱有り。

【七八】千金堡。古の千金場に於て堡を築くなり。河南縣城の東十五里に千金場あり。

【七九】是年五月、建徳の兵、幽州を攻む。

【八〇】蔚州。隋の鴈門郡の靈丘、上谷郡の飛狐縣の地。

李密が敗るるや、楊慶、洛陽に歸り、姓を楊氏に復す。王世充が帝と稱するに及び、慶、姓を郭氏に復す。世充、以て管州總管と爲し、妻すに兄の女を以てす。秦王世民、洛陽に逼る。慶、潜に人を遣はして、降らんと請ふ。世民、總管李世勣を遣はし、兵を將ゐて往きて其城に據らしむ。慶、其妻と偕に來らんと欲す。妻曰はく、『主上、妾をして巾櫛に侍せしむるは、君の心を結ばんと欲するなり。今、君既に付託に幸き、利に狗ひ、全きを求む。妾、將た君を如何せん。若し長安に至らば、則ち君が家の一婢なるのみ。君何ぞ用ふるを爲さん。願はくは送りて洛陽に至らしめんことを。君の恵なり』と。慶、許さず。慶出づ。妻、侍者に謂つて曰はく、『若し唐遂に鄭に勝たば、則ち吾が家必ず滅びん。鄭若し唐に勝たば、則ち吾が夫必ず死せん。人生此に至りては、何ぞ生を用ふるを爲さん』と。遂に自殺す。庚戌、慶來り降る。姓を楊氏に復す。上柱國・郇國公に拜す。時に世充の太子玄應、虎牢に鎮し、榮・洹の間に軍す。之を聞き、兵を引きて管城に趣く。李世勣、擊ちて之を却く。郭孝恪をして書を爲らしめ、榮州の刺史魏陸に説かしむ。陸、密に降らんと請ふ。玄應、大將軍張志を遣はし、陸に就きて兵を徵せしむ。丙辰、陸、志等四將を擒にし、州を擧げて來り降る。陽城の令王雄、諸堡を帥ゐて來り降る。秦王世民、李世勣をして、兵を引きて之に應せしめ、雄を以て嵩州の刺史と爲す。嵩南の路始めて通す。魏陸、張志をして、詐りて玄應の書を爲り、其東道の兵を停めしめ、其將張慈寶をして、且く汴州に還らしむ。又、密に汴州の刺史王要漢に告げ、慈寶を圖らしむ。要漢、慈寶を斬りて以て降る。玄應、諸州皆叛くと聞き、大に懼れ、奔りて洛陽に還。詔して、要漢を以て汴州總管と爲し、爵郡國公を賜ふ。

- 【八二】 李密が敗るること、一百八十六卷元年九月に見ゆ。
- 【八三】 楊慶が密に歸して姓を改むること、一百八十四卷義寧元年十一月に見ゆ。
- 【八四】 王世充が帝と稱すること、前卷本年四月に見ゆ。
- 【八五】 榮・洹、榮は當に榮に作るべし。榮澤と汴水の間。
- 【八六】 王世充蓋し榮陽縣を以て榮州を置く。榮に作るは亦誤なり。
- 【八七】 陽城縣は洛州に屬す。

嵩州。陽城・嵩陽・陽翟を以て嵩州を置く。

【八八】 嵩南。嵩山以南。

【八九】 金州。西城郡に、梁、梁州を置く。尋ぎて改めて南梁州と曰ふ。西魏、東梁州と改め、尋ぎて金州と改む。總管府を置く。府に長史・司馬を置く。

【九〇】 樊鄧。襄州鄧城縣は、漢の鄧縣、南陽郡に屬す。古の樊城なり。宋、安養縣と改む。此時、樊城鎮は當に安養縣の界に在るべし。今の湖北省襄陽道襄陽縣の地。

【九一】 長沙は潭州の治所。

王弘烈、襄陽に據る。上、金州總管府の司馬涇陽の李大亮をして、樊・鄧を安撫し、以て之を圖らしむ。十一月庚申、大亮、樊城を攻めて之を拔き、其將國大安を斬り、其城柵十四を下す。

蕭銑、性褊狹にして猜忌多し。諸將、功を恃みて恣横にして、好みて誅殺を専らにす。銑、之を患へ、乃ち『兵を罷め農を營まん』と宣言す。實は諸將の權を奪はんと欲するなり。大司馬董景珍の弟、將軍と爲り、怨望し、亂を作さんと謀る。事泄れて誅に伏す。景珍、時に長沙に鎮す。銑、詔を下して之を赦し。召して江陵に還らしむ。景珍懼る。甲子、長沙を以て來り降る。峽州の刺史許紹に詔し、兵を出して之に應せしむ。

雲州總管郭子和、先に突厥の梁師都と相連結す。既にして師都を寧朔城に襲ひ、之に克つ。又、調ひて突厥の豐隙を得、使を遣はして以て聞す。突厥の候騎の獲る所と爲る。處羅可汗、大に怒り、其弟の子升を囚ふ。子和、自ら孤危なるを以て、其民を帥ゐて南に徙らんと請ふ。詔して、延州の故城を以て之を處く。

張舉・劉旻が降るや。梁師都大に懼れ、其尙書陸季覽を遣はし、突厥處羅可汗に説きて曰はく、「比者中原喪亂し、分れて數國と爲り、勢均しく力弱し。故に皆北面して突厥に歸附す。今定楊可汗既に亡び、天下將に悉く唐の有と爲らんとす。師都は灰滅を辭せざれども、亦恐る次に可汗に及ばんことを。若かじ、其の未だ定まらざるに及び、南して中原を取ることに、魏の道武の爲す所の如くせんには。師都請ふ郷導を爲さん」と。處羅、之に従ふ。謀りて莫賀咄設をして、原州より入らしめ、泥步設をして師都と與に延州より入らしめ、突利可汗をして、奚・密・契丹・靺鞨と與に、幽州より入らしめ、竇建徳の師に會し、滄口より西に入り、(100)晉・絳に會せんとす。莫賀咄は、處羅の弟咄苾なり。突利は、始畢の子什

【九二】雲州。定襄縣に、開皇五年、雲州總管府を置き、大利城に治す。

【九三】寧朔縣は夏州に屬す。今の陝西省榆林道榆林縣の南。

【九四】是年八月、張舉降り、九月、劉旻降る。

【九五】是年四月、劉武周敗亡す。

【九六】事、晉の孝武帝紀に見ゆ。

【九七】平涼郡に原州を置く。

【九八】奚契丹は本皆東胡種、烏丸山に保する者、其後を奚と爲す。鮮卑山に保する者、其後を契丹と爲す。嚙は突厥と同俗、冷陁山に保す。靺鞨は肅慎の地に居る。

【九九】滄口。滄水の口、今の河南省河北道臨漳縣の西に在り。

【一〇〇】晉州は隋の臨汾郡。絳州は隋の絳郡。

鉢苾なり。處羅、又、(101)并州を取りて以て、楊政道を居かんと欲す。其羣臣多く諫む。處羅曰はく、「我が父、國を失ひ、隋に頼りて立つを得たり。此恩、忘る可からず」と。將に師を出さんとして卒す。義成公主、其子與射設が醜弱なるを以て之を廢し、更めて莫賀咄設を立て。頡利可汗と號す。乙酉、頡利、使を遣はし、處羅の喪を告ぐ。上、之を禮すること、(102)始畢の喪の如し。

戊子、安撫大使李大亮、王世充の沮・華・二州を取る。

是月、竇建徳、河を濟り、孟海公を撃つ。初め王世充、建徳を黎陽に侵す。建徳襲うて、(103)殷州を破り、以て之に報ゆ。是より二國交、惡しく、信使、通せず。唐の兵が洛陽に逼るに及び、世充、使を遣はし、救を建徳に求む。建徳の中書侍郎劉彬、建徳に説きて曰はく、「天下大に亂れ、唐、關西を得、鄭、河南を得、夏、河北を得、共に鼎足の勢を成せり。今、唐兵を擧げて鄭に臨み、秋より冬に涉り、唐の兵日に増し、鄭の地日に蹙まる。唐彊く鄭弱し。執必ず支へざらん。鄭亡ぶるときは則ち夏、獨立する能はじ。如かじ、仇を解き忿を除き、兵を發して之を救はんには。夏、其外を撃ち、鄭、其内を攻めば、唐を破らんこと必せり。唐の師既に退かば、徐ろに其變を觀、若し鄭、取る可くんば則ち

【一〇一】并州。今の山西省舊太原府。

【一〇二】楊政道は、時に定襄に居る。

【一〇三】事、一百七十八卷隋の開皇十九年に見ゆ。

【一〇四】去年四月、始畢卒す。

【一〇五】沮。襄州南漳縣。後周、沮州を置く。南漳は漢の臨沮縣なり。隋、沮州を廢す。蓋し王世充復た置く。華。漢南縣に、宋、華山郡を置く。西魏、郡を廢す。王世充、宋の郡名を取りて華州を置く。

【一〇六】殷州は獲嘉に治す。此れ皆去年冬の事。

之を取らん。二國の兵を并せ、唐の師の老れたるに乗せば、天下、取る可きなり」と。建徳、之に従ひ、使を遣はして世充に詣らしめ、許すに赴き援くるを以てす。又、其禮部侍郎李大師等を遣はして唐に詣らしめ、洛陽の兵を罷めんことを請ふ。秦王世民、之を留め、答へず。

十二月辛卯、王世充の許亳等の十一州、皆、降らんと請ふ。

壬辰、燕郡王李藝、又、竇建徳の軍を籠火城に撃ち、之を破る。

辛丑、王世充の隨州總管徐毅、州を擧げて降る。

癸卯、峽州の刺史許紹、蕭銑の荆門鎮を攻め、之を拔く。紹の所部、

梁鄭と鄰接す。二境、紹の士卒を得、皆、之を殺す。紹、二境の士卒を

得、皆、資給して之を遣る。敵人心感し、復た侵掠せず。境内以て安し。

蕭銑、其齊王張繡を遣はして長沙を攻めしむ。董景珍、繡に謂つて曰は

く、「前年、彭越を醢にし、往年、韓信を殺せり。卿、之を見ずや。何

爲れぞ相攻むる」と。繡、應へず、兵を進めて之を圍む。景珍、圍を潰し

て走らんと欲し、麾下の殺す所と爲る。銑、繡を以て尙書令と爲す。繡、功を恃みて驕横なり。銑、

又、之を殺す。是に由りて、功臣諸將、皆、離心有り。兵勢益、弱し。

王世充、其の兄の子代王琬、長孫安世を遣はし、竇建徳に詣りて報聘し、且つ師を乞はしむ。

突厥の倫特勒、并州に在り、大に民の患を爲す。并州總管劉世讓、策を設けて之を擒にす。

上、之を聞きて甚だ喜ぶ。張道源、竇建徳に従ひて河南に在り。密に

人を遣はして長安に詣り、兵を出して、洛州を攻め、以て山東を震はせん

と請ふ。丙午、世讓に詔して、行軍總管と爲し、兵を將ゐて、土門を

出で、洛州に趣かしむ。

己酉、瓜州の刺史賀拔行威、驃騎將軍達奚高を執へ、兵を擧げて反

す。

是歲、李子通、江を度り、沈法興を攻め、京口を取る。法興、其僕射

蔣元超を遣はして之を拒がしむ。慶亭に戰ふ。元超、敗死す。法興、

毗陵を棄てて吳郡に奔る。是に於て丹楊・毗陵等の郡、皆、子通に降

る。子通、法興の府掾李百藥を以て内史侍郎・國子祭酒と爲す。杜伏威、

行臺左僕射輔公祏を遣はし、卒數千を將ゐて、子通を攻めしめ、將軍闕稜・

王雄誕を以て之が副と爲す。公祏、江を度り、丹楊を攻めて之に克ち、

進みて、深水に屯す。子通、衆數萬を帥ゐて之を拒ぐ。公祏、精甲千人

を簡び、長刀を執りて前鋒と爲し、又、千人をして其後に踵がしめ、曰は

【一三】是年六月、突厥、倫特勒を并州に留む。

【一四】去年九月、道源、建徳の執ふる所と爲る。

【一五】竇建徳、洛州に都す。

【一六】土門。今の直隸省保定道井陘縣井陘山上に故の井陘關有り、一に土門關と名く。

【一七】瓜州。隋の熒煌郡。

【一八】京口。時に揚州延陵縣に屬す。

【一九】慶亭、毗陵の西北に在り。

【二〇】毗陵より吳郡に至るまで百八十里。

【二一】丹楊郡は江寧に治す、深水縣はこれに屬す。

【二二】深水。本、溧陽縣。開皇十八年、改めて名づく。丹楊より深水に至るまで二百四十里。

く、「退く者有らば、即ち之を斬らん」と。自ら餘衆を帥めて、復た其後に居る。子通、方陳を爲して前む。公祐の前鋒千人、殊死して戦ふ。公祐復た左右の翼を張り、以て之を撃つ。子通、敗走す。公祐、之を逐ひ、反つて敗る所と爲り、還りて壁を閉ちて出でず。王雄誕曰はく、「子通、壁壘無く、又、初めの勝に狂る。其の備無きに乗じて之を撃たば、破る可きなり」と。公祐、從はず。雄誕、其私屬數百人を以て、夜出でて之を撃ち、風に因りて火を縱つ。子通大に敗る。其卒數千人を降す。子通、食盡き、江都を棄て、京口に保す。〔一三〕江西の地、盡く伏威に入る。伏威徙りて丹楊に居る。子通復た東して太湖に走り、亡散を收合し、二萬人を得、沈法興を吳郡に襲ひ、大に之を破る。法興、左右數百人を帥め、城を棄てて走る。吳郡の賊帥 聞人遂安、其將葉孝辯を遣はして之を迎ふ。法興、中途にして悔い、孝辯を殺して更に會稽に向はんと欲す。孝辯、之を覺る。法興窘迫し、江に赴きて溺れ死す。子通、軍勢復た振ひ、徙りて餘杭に都す。盡く法興の地を收め、北は太湖より、南は嶺に至り、東は會稽を包ね、西は宣城に距るまで、皆、之を有つ。

- 【一三】私屬は親兵、大軍の名籍に在らざる者。
- 【一四】江西。盧和等の州は皆江西なり。
- 【一五】太湖。今の江蘇省蘇常道吳縣の東南五十里に在り。
- 【一六】聞人。複姓。
- 【一七】會稽。越州。
- 【一八】餘杭。杭州。
- 【一九】嶺。五嶺なり。
- 【二〇】廣新。南海郡は廣州。信安郡新興縣に、梁、新州を置く。
- 【二一】馮盎、大業の亂に嶺南に歸りしより、未だ朝命を受けず、故に隋の官を書す。
- 【二二】馮盎、其祖母洗夫人より以來、威令、嶺南に行はる、故に然り。

〔一三〕廣新二州の賊帥高法澄・沈實徹、隋の官を殺して州に據り、林士弘に附く。〔一四〕漢陽の太守馮盎、撃ちて之を破る。既にして實徹の兄の子智臣、復た兵を新州に聚む。盎、兵を引きて之を撃つ。戦始めて合ふや、盎、胃を免ぎて大呼して曰はく、「爾、我を識るや」と。賊多く仗を棄て、肉袒して拜す。遂に潰ゆ。實徹・智臣等を擒にす。嶺南遂に定まる。寶建徳の行臺尙書令 恒山の胡大恩、降らんと請ふ。

四年、春正月癸酉、大恩を以て代州總管と爲し、定襄郡王に封じ、姓李氏を賜ふ。代州の石嶺の北、劉武周の亂より、寇盜充斥す。大恩徙りて鴈門に鎮し、討撃して悉く之を平ぐ。稽胡の酋帥劉仝成、部落數萬、邊寇を爲す。辛巳、太子建成に詔して、諸軍を統べて之を討たしむ。

王世充の 梁州總管程嘉會、所部を以て來り降る。杜伏威、其將陳正通・徐紹宗を遣はし、精兵二千を帥め、來りて秦王世民に會し、王世充を撃つ。甲申、梁を攻めて之に克つ。

- 【一三】恒山。恒州。
- 【一四】代州。隋の鴈門郡。
- 【一五】鴈門。漢の廣武縣、隋、名を更む。隋唐の代州、皆、鴈門に治す。
- 【一六】梁州。後魏、梁州を浚儀に置き、古の大梁城に因りて州に名づく。此時浚儀を以て汴州と爲す。而して隋の梁郡は宋城縣に治す。宋城は古の睢陽にして、漢の梁國、之に都す。後魏以來、睢陽を以て梁郡と爲す。王世充、此に梁州を置きしなるべし。
- 【一七】梁縣は伊州に屬す。今の河南省河洛道臨汝縣の西四十里に在り。

丙戌、黔州の刺史田世康、蕭銑の五州・四鎮を攻め、皆之に克つ。

秦王世民、精銳千餘騎を選び、皆（宋）卓衣玄甲し、分ちて左右隊と爲し、秦叔寶・程智節・尉遲敬徳・翟長孫をして、分ちて之に將たらしめ、戰ふ毎に、世民、親ら玄甲を被り、之を帥ゐて前鋒と爲り、機に乗じて進撃し、向ふ所、摧破せざるは無し。敵人、之を畏る。行臺僕射屈突通、贊皇公竇軌、兵を引ききて營屯を按行し、猝に王世充と遇ひ、戰ひて利あらず。秦王世民、玄甲を帥ゐて之を救ふ。世充、大に敗る。其騎將葛彥章を獲、俘斬六千餘人。世充遁れ歸る。

李靖、趙郡王孝恭に説くに、蕭銑を取るの十策を以てす。孝恭、之を

上る。二月辛卯、信州を改めて夔州と爲し、孝恭を以て總管と爲し、大に舟艦を造り水戰を習はしむ。孝恭が未だ軍旅を更ざるを以て、靖を以て行軍總管と爲し、孝恭の長史を兼ねしめ、委ぬるに軍事を以てす。靖、孝恭に説き、悉く巴蜀の酋長の子弟を召し、才を量りて任を授け、之を左右に置き、外は引擢を示し、實は以て質と爲す。

王世充の太子玄應、兵數千人を將る、虎牢より糧を運びて洛陽に入る。秦王世民、將軍李君羨を遣はし、邀へ撃たしめ、大に之を破る。玄應僅に身を以て免る。世民、宇文士及をして奏請せしむ、「進みて東都を圍まん」と。上、士及に謂つて曰はく、「歸りて爾の王に語れ、今、洛陽を取るは、兵を

【五】黔州。隋の黔安郡。古の黔中なり。
【六】卓衣。くるきいろのころも。
【七】贊皇縣は趙州に屬す。開皇十六年置く。今の直隸省保定道贊皇縣。

息むるに止まる。城に克つの日、乘輿法物・圖籍器械、私家の須ふる所に非ざる者は、汝に委ねて之を收めしむ。其餘の子女玉帛は、竝に以て將士に分賜せよ」と。辛丑、世民移りて青城宮に軍す。壁壘未だ立たず。王世充、衆二萬を帥る、方諸門より出で、故の馬防の垣塹に憑り、穀水に臨み、以て唐の兵を拒ぐ。諸將皆懼る。世民、精騎を以て北邨に陳し、魏の宣武陵に登り、以て之を望み、左右に謂つて曰はく、「賊勢窘めり。衆を悉して出で、一戰を徹幸す。今日、之を破らば、後、敢て復た出でざらん」と。屈突通に命じ、歩卒五千を帥る、水を度りて之を撃たしめ、通を戒めて曰はく、「兵交はらば則ち煙を縱て」と。煙作る。世民、騎を引ききて南に下り、身、士卒に先だち、通と勢を合はせて力戰す。世民、世充の陳の厚薄を知らんと欲し、精騎數十と與に、之を衝き、直に其背に出づ。衆皆披靡す。殺傷甚だ衆し。既にして限るに長堤を以てし、諸騎と相失ふ。將軍丘行恭、獨り世民に従ふ。世充の數騎、追うて之に及ぶ。世民の馬、流矢に中りて斃る。行恭、騎を回らし、追ふ者を射る。發すれば中らざる無し。追ふ者敢て前まず。乃ち馬を下り、以て世民に授く。行恭、馬前に於て、歩して長刀を執り、距躍大呼し、數人を斬り、陳を突き出て、大軍に入るを得たり。世充も亦衆を帥ゐて殊死して戰ふ。散じて復た合ふ者數回、辰より午に至り、世充の兵始めて退く。世民、兵を縱ちて之に乗じ、直に城下に抵

【八】青城宮。方諸門。東都城、西、禁苑に連なる。方諸門は蓋し都城より禁苑に出づるの門なり。青城宮は禁苑の中に在り。
【九】穀水。穀洛二水、禁苑の中に會す。
【一〇】距躍。超距跳躍するなり。

り、俘斬七千人、遂に之を圍む。驃騎將軍段志玄、世充の兵と力戦し、深く入り、馬倒れ、世充の兵の擒ふる所と爲る。兩騎、其髻を夾持し、將に洛水を渡らんとす。志玄、身を踴らして奮ふ。二人俱に馬より墜つ。志玄馳せ歸る。追ふ者數百騎、敢て逼らず。初め驃騎將軍王懷文、唐の軍の斥候を爲し、世充の獲る所と爲る。世充、之を慰悦せんと欲し、引きて左右に置く。壬寅、世充、右掖門を出で、洛水に臨みて陳を爲す。懷文忽ち槩を引き、世充を刺す。世充、衷甲し、槩折れて入る能はず。左右猝に不意に出で、皆愕眙し、爲す所を知らず。懷文走りて唐の軍に趣き、寫口に至る。追ひ獲て之を殺す。世充歸り、衷甲を解き去り、袒して羣臣に示して曰はく、「懷文、槩を以て我を刺せども、卒に傷つくる能はず。豈に天の命する所に非ずや」と。是より先、御史大夫 鄭頊、世充に仕ふるを樂しまず。多く疾と稱して、事に預らず。是に至りて、世充に謂つて曰はく、「臣聞く、佛に金剛不壞の身有りと。陛下は眞に是なり。臣、實に幸多く、佛世に生るるを得たり。願はくは官を棄てて髪を削り沙門と爲り、服勤精進し、以て陛下の神武に資せん」と。世充曰はく、「國の大臣にして、聲望素より重し。一旦、道に入らば、將に物聽を駭かさんとす。兵革休息するを俟ち、當に公の志に従ふべし」と。頊固く請へども

【一】 右掖門。東都城南面の三門、中を端門と曰ひ、左を左掖門と曰ひ、右を右掖門と曰ふ。洛水、其前を逕、天津・永濟・中橋の三橋有り。
 【二】 寫口。洛城中の水、此に於て寫放して以て其惡を流す、因りて寫口と名づく。
 【三】 鄭頊。李密の臣、世充の獲る所と爲る。其の許多きを疾む、故に仕ふるを樂しません。
 【四】 詭辭して以て去らんことを求むるなり。

許さず。退きて其妻に謂つて曰はく、「吾、束髮して官に従ひ、志、名節を慕ふ。不幸にして亂世に遭遇し、流離して此に至り、身を猜忌の朝に側て、足を危亡の地に累ね、智力淺薄にして、以て自ら全くする無し。人生は會ず當に死有るべし。早晚何ぞ殊ならん。姑く吾が好む所に従はば、死すとも亦憾み無からん」と。遂に髪を削りて僧服を被る。世充、之を聞き、大に怒りて曰はく、「爾、我を以て必ず敗ると爲し、苟くも免れんと欲するか、之を誅せずんば、何を以てか衆を制せん」と。遂に頊を市に斬る。頊言笑自若たり。觀る者、之を壯とす。詔して、王懷文に上柱國・朔州の刺史を贈る。

并州安撫使唐儉、密に奏す、
 【一七】 眞鄉公李仲文、妖僧志覺と、反を謀るの語有り。又、陶氏の女を娶り、以て桃李の謠に應せんとし、可汗に諂事し、甚だ其意を得、可汗、立てて南面可汗と爲さんことを許す。并州に在るに及びて、賊賄狼籍なり」と。上、裴寂・陳叔達・蕭瑀に命じ、之を雜鞠せしむ。乙巳、仲文、誅に伏す。

【一五】 束髮。幼少總角の時を謂ふ。
 【一六】 朔州。隋の馬邑郡。
 【一七】 眞鄉公。縣公なり。西魏、眞鄉縣を置く、時に綏州に屬す。
 【一八】 去年七月、世充、秦を以て河陽を守らしむ。

庚戌、王泰、河陽を棄てて走る。其將趙復等、城を以て來り降る。別將單雄信・裴孝達、總管王君廓と、洛口に相持す。秦王世民、步騎五千を帥ゐて之を援く。輾轅に至る。雄信等遁れ去る。君廓追うて之を敗る。壬子、延州總管段德操、劉合成を撃ち、之を破り、斬首千餘級。

乙卯、王世充の懷州の刺史陸善宗、城を以て降る。

秦王世民、洛陽の宮城を圍む。城中守禦すること甚だ嚴なり。大礮の飛石、重さ五十斤、二百

歩に擲つ。八弓弩、箭、車輻の如く、鏃、巨斧の如く、五百歩を射る。世民、四面より之を攻め、

晝夜、息まず。旬餘にして克たす。城中、城を翻さんと欲する者、凡そ十三輩、皆、發するを果さずし

て死す。唐の將士、皆、疲弊し、歸らんことを思ふ。總管劉弘基等、師を班さんと請ふ。世民曰はく、

『今大舉して來る。當に一たび勞して永く逸すべし。東方の諸州、已に風を望みて歎服す。唯だ洛陽

の孤城、勢、久しき能はず。功、成るに垂なんとするに在り。奈何ぞ之を棄てて去らん』と。乃ち令

を軍中に下して曰はく、『洛陽未だ破らざれば、師必ず還らじ。敢て「師を班さん」と言ふ者は斬ら

ん』と。衆乃ち敢て復た言はず。上、之を聞き、亦、密に世民に勅して「還らしむ。世民、表して稱

す、『洛陽は必ず克つ可し』』と。又、參謀軍事封德彝を遣はして入朝し、

面のあたり形勢を論せしむ。德彝、上に言つて曰はく、『世充、地を得る

こと多しと雖も、率ね皆、羈屬なり。號令の行はるる所は、唯だ洛陽の

一城のみ。智盡き力窮まる。克たんこと朝夕に在り。今若し師を旋さば、

賊勢復た振はん。更に相連結せば、後必ず圖り難からん』と。上乃ち之に

從ふ。世民、世充に書を遣り、諭すに禍福を以てす。世充、報せず。

【一四】礮は砲と同じ。

【一五】八弓弩。八弓、其一彘なり。古の連弩。後世の划車弩の如き、亦、其類なり。

【一六】參謀の官、蓋し此に始まる。

【一七】羈屬。羈縻して之を屬するのみなるを言ふ。

【一八】李世勣、時に管城に屯す。

戊午、王世充の鄭州の司兵沈悅、使を遣はし、左武侯大將軍李世勣に

詣り、降らんと請ふ。左衛將軍王君廓、夜、兵を引きて虎牢を襲ふ。

悦、内應を爲す。遂に之を抜く。其荊王行本及び長史戴胄を獲たり。悦は

君理の孫なり。

竇建德、周橋に克ち、孟海公を虜にす。

【一九】王君廓、時に洛口に屯す。

【二〇】沈君理は陳に仕へて僕射と爲る。

卷の一百八十九

唐紀五

高祖神堯大聖光孝皇帝中の中

武德四年、三月庚申、（一） 鞞鞞の渠帥突地稽を以て、（二） 燕州の總管と爲す。

太子建成、稽胡千餘人を獲、其酋帥數十人を釋し、授くるに官爵を以てし、還りて其餘黨を招かしむ。劉仝成も亦降る。建成詐りて『州縣を増置し、城邑を築く』と稱し、降胡の年二十以上に命じて皆集まらしめ、兵を以て圍みて之を殺す。死する者六千餘人。仝成、變を覺り、亡げて梁師都に奔る。

行軍總管劉世讓、竇建德の黃州を攻め、之を拔く。洺州・嚴備し、世讓、進むを得ず。會、突厥將に入寇せんとす。上、世讓を召して還らしむ。竇建德が署する所の普樂の

唐高祖神堯大聖光孝皇帝武德四年

【一】 武德四年。西紀六二二年なり。
【二】 鞞鞞に七種有り、粟末鞞鞞、最南に居り、本、高麗に附く。隋の煬帝の初、其渠帥突地稽、其部を率ゐて來り降る。之を柳城に居く。
【三】 燕州。隋、營州の境汝羅故城に於て遼西郡を置き、以て鞞鞞の降人を處く、武德元年、燕州と曰ふ。
【四】 普樂・平恩・永寧。竝に縣の名、洺州に屬す。

令平恩の程名振來り降る。上、遙に名振を永寧の令に除し、兵を將ゐて河北を徇へしむ。名振、夜、鄴を襲ひ、其男女千餘人を俘にす。鄴を去ること八十里、婦人の乳に、（六） 渾有る者九十餘人を閱し、悉く之を縱ち遣る。鄴人、其仁に感じ、之が爲めに僧に飯す。

突厥の 頡利可汗、父兄の資を承け、士馬雄盛にして、中國を憑陵するの志有り。妻は隋の義成公主なり。公主の從弟善經、亂を避けて突厥に在り。王世充の使者王文素と、共に頡利に説きて曰はく、『昔、啓民、兄弟の逼る所と爲り、身を脱して隋に奔り、文皇帝の力に賴り、此土宇を有ち、子孫、之を享く。今、唐の天子は、文皇帝の子孫に非ず。可汗宜しく 楊政道を奉じて以て之を伐ち、以て文皇帝の德に報ゆべし』と。頡利、之を然りとす。上、中國の未だ寧からざるを以て、突厥を待すること甚だ厚し。而して頡利、求請して厭くこと無く、言辭驕慢なり。甲戌、突厥、汾陰に寇す。

唐の兵、洛陽を圍み、塹を掘り壘を築きて之を守る。城中、食に乏しく、絹一匹、粟三升に直り、布十四、鹽一升に直り、服飾珍玩、賤しきこと土芥の如し。民、草根木葉を食ひて皆盡く。相與に浮泥を澄取し、米屑を投じて餅を作りて之を食ふ。皆、身腫脚弱を病み、死する者相枕して道に倚る。（二） 皇泰主が民を遷して宮城に入るや、凡そ三萬家。是に至りて、三千家

- 【五】 鄴縣は相州に屬す。今の河南省河北道臨漳縣の境。
- 【六】 渾、乳汁なり。
- 【七】 頡利は啓民の子、始畢處羅の弟。
- 【八】 事、隋の文帝紀に見ゆ。
- 【九】 楊政道、時に定襄に居る。
- 【一〇】 汾陰縣は、本、蒲州に屬す、時に泰州の治所たり。
- 【一一】 皇泰主云云。一百八十三卷隋の義寧元年四月に見ゆ。

無し。貴きこと公卿たりと雖も、（三） 糠藪だも充たす。尙書郎以下、親自ら負戴し、往往餓死す。（三三） 粟、麥糠の中破れざる者なり。（三二） 負は肩背を以てし、戴は首を以てす。（三四） 酸棗縣、隋、鄴州に屬す、此時、東梁州に屬す。（三五） 石州、隋の離石郡。（三六） 滎陽縣は、鄴州に屬す。（三七） 陽翟縣は、隋、汝州に屬す、時に嵩州に屬す。（三八） 徐州、隋の彭城郡。（三九） 成阜、即ち虎牢。（四〇） 東原、即ち東廣武。（四一） 河水、成阜を過ぎて東して汜水に合し、又東して板城の北を逕。津有り之を板城渚口と謂ふ。（四二） 武牢、唐、虎を諱みて虎牢を改めて武牢と爲す。

壬午、突厥、石州に寇す。刺史王集擊ちて之を却く。

寶建德、管州を陷れ、刺史郭士安を殺し、又、滎陽、陽翟等の縣

を陷れ、水陸並び進み、舟を汎べて糧を運び、河に沂りて西上す。王

世充の弟、徐州行臺世辯、其將郭士衡を遣はし、兵數千を將ゐて之に

會せしむ。合はせて十餘萬、三十萬と號し、成阜の東原に軍し、宮

を板渚に築き、使を遣はして王世充と相聞す。是より先、建德、秦王世

民に書を遣り、退きて潼關に軍し、鄭の侵地を返し、復た前好を修めんと請

ふ。世民、將佐を集めて之を議す。皆、其の鋒を避けんを請ふ。郭孝恪曰

はく、『世充、窮蹙し、將に面縛せんとするに垂なんとし、建德遠く來りて之

を助く。此れ天意、兩ながら之を亡ぼさんと欲するなり。宜しく武牢の

險に據りて以て之を拒ぎ、間を伺ひて動くべし。之を破らんこと必せり』と。

記室薛收曰はく、『世充、

東都に保據し、府庫充實す。將ある所の兵は、皆江淮の精銳なり。即日の患は、但だ糧食に乏しきのみ。是の故を以て、我の持する所と爲り、戰を求むれども得ず、守るときは則ち久しく難し。建徳親ら大衆を帥る、遠く來りて赴き援く。亦當に其精銳を極むべし。若し之を縦して此に至らしめ、兩寇合従し、河北の粟を轉じて以て洛陽に饋るときは、則ち戰爭方に始まり、兵を偃すること日無く、混一の期、殊えて未だ涯有らざらん。今宜しく兵を分ちて洛陽を守り、溝を深くし壘を高くすべし。世充、兵を出すとも、慎みて・與に戰ふ勿れ。大王親ら驍銳を帥る、先づ成阜に據り、兵を厲ぎ士を訓へ、以て其の至るを待ち、逸を以て勞を待たば、決して・克つ可きなり。建徳既に破れなば、世充自ら下らん。二句を過ぎずして、兩主、縛に就かん」と。世民、之を善しとす。收は【三】道衡の子なり。蕭瑀・屈突通・封德彝、皆曰はく、「吾が兵疲老し、世充、堅城に憑守し、未だ猝に拔き易からず。建徳、勝に席りて來り、鋒銳く氣盛なり。吾、腹背、敵を受くるは、完き策に非ざるなり。若かじ、退きて新安に保し、以て其弊を承けんには」と。世民曰はく、「世充、兵擢け食盡き、上下、心を離す。力攻を煩はさず、以て坐ながら克つ可し。建徳新に海公を破り、將驕り卒惰る。吾、武牢に據り、其咽喉を扼せんに、彼若し險を冒し鋒を争はば、吾、之を取ること甚だ易からん。若し狐疑して戰はずんば、旬月の間に、世充自ら潰えん。城破れ兵彊く、氣勢自ら倍せん。一舉して兩克せんこと

【三】 薛道衡は隋の煬帝の殺す所と爲る。隋の陳を伐つや、道衡、其の必ず克たんことを知る。收が時を識り勢を察かにすること、蓋し父の風有り。

此行に在り。若し速かに進まず、賊、武牢に入らば、諸城の所に附けるもの、必ず守る能はじ。兩賊、力を併せば、其の勢、必ず彊からん。何の弊をか之れ承けん。吾が計決せり」と。通等又請ふ、「圍を解き險に據り、以て其變を観ん」と。世民、許さず、麾下を中分し、通等をして、齊王元吉に副とし、東都を圍守せしめ、世民、驍勇三千五百人を將る、東して武牢に趣く。時に正晝、兵を出し、北邙を歴、河陽に抵り、【四】鞏に趣きて去る。王世充、城に登りて望見し、之を測る莫く、竟に敢て出でず。癸未、世民、武牢に入る。甲申、驍騎五百を將る、武牢の東二十餘里に出で、建徳の營を覘ひ、緣道に従騎を分ち留め、李世勣・程知節・秦叔寶をして、分ちて之に將たらしめ、道の旁に伏せ、纔に四騎を餘し、之と偕に進む。世民、尉遲敬徳に謂つて曰はく、「吾、弓矢を執り、公、槊を執りて相隨はば、百萬の衆と雖も、我を若何せん」と。又曰はく、「賊、我を見て還らば、上策なり」と。建徳の營を去ること三里所。建徳の遊兵、之に遇ひ、以て斥候と爲す。世民、大呼して曰はく、「我は秦王なり」と。弓を引きて之を射、其一將を斃す。建徳の軍中大に驚き、五六千騎を出して之を逐ふ。從者咸色を失ふ。世民曰はく、「汝弟だ前み行け。吾自ら敬徳と與に殿を爲さん」と。是に於て轡を按じて徐行す。追騎將に至らんとすれば、則ち弓を引きて之を射、輒ち一人を斃す。追ふ者懼れて止まる。止まりて復た來る。是の如くすること再三。來る毎に、必ず斃るる者有り。世民、前後、數人を射殺し、敬徳、十許人を殺す。

【四】 鞏。東都の東一百十里に在り。

【五】 弟。第と通す。但なり。

追ふ者、敢て復た逼らず。世民、逡巡して稍却き、以て之を誘ひ、伏内に入る。世勣等奮撃し、大に之を破る。斬首三百餘級、其驍將殷秋・石瓚を獲、以て歸る。乃ち書を爲りて建德に報じ、諭して以はく、「趙魏の地、久しく我が有たり。足下の侵奪する所と爲れり。但だ、淮安が禮せられ、公主が歸るを得るを以ての故に、相與に坦懷にして怨を釋く。世充、頃、足下と好を修む。已に嘗て反覆す。今亡ぶること朝夕に在り。更に辭を飾りて相誘ふ。足下乃ち三軍の衆を以て、哺を他人に仰ぎ、千金の資、坐ながら外費に供するは、良に上策に非ず。今、前茅相遇ひ、彼遽に崩摧せり。【三〇】郊勞未だ通せず、能く愧を懷く無からんや。故に鋒銳を抑止し、善を擇ぶを聞かんことを冀ふ。若し命を獲ずんば、恐らくは悔ゆと雖も追ひ難からん」と。

秦王世民の子泰を立てて衛王と爲す。
夏四月己丑、【三一】豐州總管張長遜・入朝す。時に、事を言ふ者多く云ふ、「長遜久しく豐州に居り、突厥の厚くする所と爲る、國家の利に非ず」と。長遜、之を聞き、入朝せんと請ふ。上、之を許す。會、太子建成、北し

【二六】淮安云云。武德二年、寶建德、盡く趙魏を取り、淮安王神通及び同安公主を虜にし、淮安を待つに客禮を以てし、次年八月、公主を遣り歸す。

【二七】武德二年、王寶、好を結ぶ。世充冀するや、建德、之を絶つ。尋ぎて疆場の争有り。

【二八】千金の資。兵法に曰はく、師を興すこと十萬、日に千金を費すと。

【二九】前茅。斥候なり。茅を以て旌と爲し、前に敵有れば、旌を擧げて後軍に報す。

【三〇】郊勞未だ通せず。古者諸侯相見るに、郊勞の禮有り。建德來りて世充を救ふに、唐の兵に阻まれ、使命、通するを得ざるを言ふ。

【三一】之をして善を擇びて從はしめんと欲するなり。

【三二】豐州。長安に至るまで二

千六百六十里。張長遜、隋末に豐州を守る。唐興りて來り降る。是に至りて入朝す。
【三三】平州。洛州河陰縣（今の河南省河北道孟津縣の東）は古の平陰なり。王世充、此に於て平州を置けるなるべし。

て稽胡を伐つ。長遜、所部を帥ゐて之に會す。因つて入朝す。右武侯將軍に拜す。益州行臺左僕射竇軌、巴蜀の兵を帥ゐ、來りて秦王に會し、王世充を撃つ。長遜を以て益州行臺右僕射を檢校せしむ。

己亥、突厥の頡利可汗、鴈門に寇す。李大恩、撃ちて之を走らす。

壬寅、王世充の騎將楊公卿・單雄信、兵を引き出て戰ふ。齊王元吉、之を撃ち、利あらず。行軍總管盧君諤、戰死す。

太子、長安に還る。

王世充の【三四】平州の刺史周仲隱、城を以て來り降る。

戊申、突厥、并州に寇す。初め處羅可汗、劉武周と相表裏し、并州に寇す。上、太常卿鄭元璣を遣はし、往きて諭すに禍福を以てす。處羅、從はず。未だ幾くならずして、處羅、疾に遇うて卒す。國

人、元璣が之を毒せりと疑ひ、留めて遣らす。上、又、漢陽公瓌を遣はし、頡利可汗に賂ふに金帛を以てす。頡利、瓌をして拜せしめんと欲す。瓌、從はず。亦、之を留む。又、左驍衛大將軍長孫

順德を留む。上怒り、亦、其使者を留む。瓌は【三五】孝恭の弟なり。

甲寅、皇子元方を封じて周王と爲し、元禮を鄭王と爲し、元嘉を宋王と爲し、元則を荆王と爲し、元茂を越王と爲す。

竇建德、武牢に迫られ、進むを得ず、留まり屯すること累月、戰數利あらず、將士、歸るを思ふ。丁巳、秦王世民、王君廓を遣はし、輕騎千餘を將ゐて、其糧運を抄めしむ。又、之を破り、其大將軍張青特を獲たり。凌敬、建德に言つて曰はく、「大王、兵を悉して河を濟り、攻めて懷州・河陽を取り、重將をして之を守らしめ、更に鼓を鳴らし旗を建て、太行を踰え、上黨に入り、汾晉を徇へ、蒲津に趣かんに、此の如くせば、三利有り。一は則ち無人の境を踏み、勝を取ること以て萬全なる可し。二は則ち地を拓き衆を收め、形勢益々疆からん。三は則ち關中震駭し、鄭の圍自ら解けん。今の策を爲すに、以て此に易ふる無し」と。建德、將に之に従はんとす。

而るに王世充、使を遣はして急を告ぐることを、道に相繼ぐ。王琬・長孫安世、朝夕涕泣し、洛陽を救はんと請ふ。又、陰に金玉を以て建德の諸將に啗はせ、以て其謀を撓ます。諸將皆曰はく、「凌敬は書生なり。安んぞ戰事を知らん、其言豈に用ふ可けんや」と。建德乃ち敬に謝して曰はく、「今、衆心甚だ銳し。天、我を贊くるなり。之に因りて決戦せば、必ず將に大捷せん」と。公の言に従ふを得ず」と。敬固く之を争ふ。建德怒り、扶けて出でしむ。其妻曹氏、建德に謂つて曰はく、「祭酒の言は、違ふ可からざるなり。今、大王、滏口より、唐國の虛に乗じ、營を連ねて漸く進み、以て山北を取り、又、突厥に因りて、西のかた關中を抄めば、唐必ず師を還して自ら救はん。鄭の圍、何ぞ解けざるを憂へん。若し兵を此に頼めば、師を老らし財を費し、成功を求めんと欲するとも、何の日に在らん」と。建德曰はく、「此れ女子の知る所に非ず。吾來りて鄭を救ふ。鄭、今倒懸し、亡びんこと朝夕に在り。吾乃ち之を捨てて去らば、是れ敵を畏れて信を棄つるなり。不可なり」と。諜者告げて曰はく、「建德、唐の軍の芻盡き、馬を河北に牧するを伺ひ、將に武牢を襲はんとす」と。五月

【三】 凌敬は蓋し建德の國子祭酒たり。

【三六】 山北。建德、洛州に都し、時に山南に在り。并・代・汾・晉は皆山北なり。

戊午、秦王世民、北して河を濟り、南のかた廣武に臨み、敵の形勢を察し、因つて馬千餘匹を留め、河渚に牧し、以て之を誘ひ、夕に武牢に還る。己未、建德果して衆を悉して至り、板渚より牛口に出で陳を置き、北は大河に距り、西は汜水に薄り、南のかた鵠山に屬き、二十里に互り、鼓行して進む。諸將皆懼る。世民、數騎を將ゐ、高丘に升りて之を望み、諸將に謂つて曰はく、「賊、山東に起り、未だ嘗て大敵を見ず。今、險を度りて囂しきは、是れ紀律無きなり。城に逼りて陳するは、我を輕んずる心有るなり。我、兵を按じて出でずんば、彼、勇氣自ら衰へん。陳久しく卒飢ゑ、勢將に自ら退かんとす。追うて之を撃たば、克たざる者無からん。公等と約す、甫に日中を過ぎなば、必ず之を破らん」と。建德、意、唐の軍を輕んじ、三百騎を遣はして、汜水を涉り、唐の營を距ること一里所にして止まらしめ、使を遣はして世民と相聞して曰はく、「請ふ銳士數百を選

【三七】 此れ西廣武なり。

【三八】 胡三省曰はく、此れ謂はゆる善く戰ふ者は、其勢に因りて之を利導するなりと。

【三九】 汜水。水經注に、汜水は、南、浮戲山に出づ。亦、之を方山と謂ふ。北して虎牢城の東を逕、又、北流して河に注ぐと。

【四〇】 其の衆きを懼るるなり。

【四一】 甫。始めて也、纔に也。

び、之と劇れん」と。世民、王君廓を遣はし、長槩二百を將ゐて以て之に應せしむ。相與に交戦し、乍ち進み乍ち退き、兩つながら勝負無く、各引き還る。王琬、隋の煬帝の驄馬に乗り、鎧仗甚だ鮮かなり。廻に陳前に出で、以て衆に誇る。世民曰はく、「彼が乗る所は眞に良馬なり」と。尉遲敬德、往きて之を取らんと請ふ。世民、之を止めて曰はく、「豈に一馬を以て猛士を喪ふ可けんや」と。敬德、從はず、高甌生・梁建方と與に、三騎、直に其陳に入り、琬を擒にし、其馬を引きて馳せ歸る。衆、敢て當る者無し。世民、河北の馬を召さしめ、其の至るを待ちて乃ち出で戦ふ。建德、陳を列し、辰より午に至り、士卒飢倦し、皆坐列す。又争うて水を飲み、遂巡して退かんと欲す。世民、宇文士及に命じ、三百騎を將ゐて、建德の陳を經、西に馳せて南に上らしめ、之を戒めて曰はく、「賊若し動かすんば、爾宜しく引き歸るべし。動かば則ち兵を引ききて東に出でよ」と。士及、陳前に至る。陳果して動く。世民曰く、「撃つ可し」と。時に河渚の馬も亦至る。乃ち命じて出で戦はしむ。世民、輕騎を帥ゐて先づ進み、大軍、之に繼ぎ、東して汜水を涉り、直に其陳に薄る。建德の羣臣方に朝調す。唐の騎猝に來る。朝臣趨りて建德に就く。建德、騎兵を召し、唐の兵を拒がしむ。騎兵、朝臣に阻まれ、過ぐるを得ず。建德、朝臣を揮し、却かしむ。進退の間に、唐の兵已に至る。建德、窘迫し、退きて東陂に依る。竇抗、兵を引ききて之を撃つ。戰小しく利あらず。世民、騎を帥ゐて之に赴く。向ふ所皆

【三】劇。戲なり。
 【四】坐列す。鬪志無きを言ふなり。
 【五】以て敵を嘗みる也。

靡く。淮陽王道玄、身を挺でて陳を陥れ、直に其後に出で、復た陳を突きて歸る。再び入り再び出で、飛矢、其身に集まること、蝟毛の如し。勇氣、衰へず。人を射れば皆弦に應じて仆る。世民、給するに副馬を以てし、己に従はしむ。是に於て諸軍大に戦ひ、塵埃、天に漲る。世民、史大奈・程知節・秦叔寶・宇文歆等を帥ゐ、旆を卷きて入り、其陳後に出で、唐の旗幟を張る。建德の將士、顧み之を見、大に潰ゆ。奔るを追ふこと三十里、斬首三千餘級。建德、槩に中り、牛口渚に竄匿す。車騎將軍白士讓・楊武威、之を逐ふ。建德、馬より墜つ。士讓、槩を援り、之を刺さんと欲す。建德曰はく、「我を殺す勿れ。我は夏王なり。能く汝を富貴にせん」と。武威、下りて之を擒にし、載するに従馬を以てし、來りて世民に見ゆ。世民、之を讓めて曰はく、「我自ら王世充を討つ。何ぞ汝の事に預りて、來りて境を越え、我が兵鋒を犯すや」と。建德曰はく、「今、自ら來らずんば、恐らくは遠く取るを煩はさん」と。建德の將士皆潰え去る。俘獲する所五萬人。世民、即日、之を散遣し、郷里に還らしむ。封德彝入りて賀す。世民笑うて曰はく、「公の言を用ひず、今日有るを得たり。智者も千慮に一失を免れざるか」と。德彝甚だ慙づ。建德の妻曹氏、左僕射齊善行と與に、數百騎を將ゐて、遁れて洛州に歸る。甲子、世充の偃師・鞏縣、皆降る。乙丑、太子左庶子鄭善果を以て山東道撫慰大使と爲す。

【四】蝟。豪猪に似て小なり。はりれずみ。
 【五】我を得て以て獻せば富貴なるを得ん。
 【六】馬を下りて之を擒にする也。
 【七】智者云云。李左車の言を用ふ。

世充の將王徳仁、故の洛陽城を棄てて遁る。亞將趙季卿、城を以て降る。秦王世民、竇建徳・王琬・長孫安世・郭士衡等を囚へ、洛陽城下に至り、以て世充に示す。世充、建徳と與に語りて泣く。仍て安世等を遣はして城に入り、敗状を言はしむ。世充、諸將を召し、圍を突きて南して襄陽に走らんと議す。諸將皆曰はく、「吾が恃む所の者は夏王なり。夏王今已に擒と爲る。出づるを得と雖も、終に必ず成る無からん」と。丙寅、世充・素服し、其太子・羣臣二千餘人を帥る、軍門に詣りて降る。世民、之を禮接す。世充、俯伏して汗を流す。世民曰はく、卿「常に童子を以て處せらる。今、童子を見るに、何ぞ恭しきの甚だしきや」と。世充・頓首して罪を謝す。是に於て、諸軍を部分し、先づ洛陽に入り、市肆を分ち守らしめ、侵掠を禁止す。敢て犯す者無し。丁卯、世民、宮城に入り、記室房玄齡に命じ、中書・門下省に入り、隋の圖籍・制詔を收めしむ。已に世充の毀る所と爲り、獲る所無し。蕭瑀・竇軌等に命じ、府庫を封じ、其金帛を收め、諸士に頒賜せしむ。世充の黨の罪の尤も大なる者段達・王隆、崔洪丹・薛德音・楊汪・孟孝義・單雄信・楊公卿・郭什柱・郭士衡・董叡・張童兒・王徳仁・朱粲・郭善才等十餘人を收め、洛水の上に斬る。初め李世勣、單雄信と友とし善く、生死を同じくするを誓ふ。洛陽平ぐに及び、世勣、雄信が驍健絶倫なるを言ひ、盡く己の官爵を輸して以て之を贖はんと請ふ。世民、許さず、世勣固く請へども得る能はず、涕泣

【四九】 故の洛陽城。此れ漢魏の故都の城なり。
 【五〇】 襄陽に走る。王弘烈・王泰に就かんと欲するなり。
 【五一】 洪丹。温公、國諱を避け、弘丹を改めて洪丹と爲す。

して退く。雄信曰はく、「我固より汝が事を辨せざるを知る」と。世勣曰はく、「吾、餘生を惜まず、兄と俱に死せん。但だ既に此身を以て國に許す。事、兩つながら遂ぐる無し。且つ吾が死するの後、誰か復た兄の妻子を視んや」と。乃ち股肉を割きて以て雄信に啗はしめて曰はく、「此肉をして兄に随つて土と爲らしめば、庶幾はくは昔の誓に負かざらん」と。士民、朱粲の殘忍なるを疾み、競うて瓦礫を投じて其尸を撃つ。須臾にして冢の如し。韋節・楊續・長孫安世等十餘人を囚へ、長安に送る。士民の罪無くして世充の囚ふる所と爲る者は、皆之を釋し、殺す所の者は、祭りて之を誅す。初め秦王の府屬杜如晦の叔父淹、王世充に事ふ。淹素より如晦兄弟と協はず。如晦の兄を誣して之を殺し、又、其弟楚客を囚へ、饑ゑて幾ど死せんとす。楚客終に怨色無し。洛陽平ぐに及び、淹、死に當る。楚客・涕泣し、如晦に之を救はんことを請ふ。如晦、從はず。楚客曰はく、「曩者、叔已に兄を殺せり。今兄又叔を殺さば、一門の内、自ら相殘ひて盡きん。豈に痛ましからずや」と。自ら劉焯と欲す。如晦乃ち之が爲めに世民に請ふ。淹、死を免るを得たり。秦王世民、閻闔門に坐す。蘇威、見えんと請ひ、老病にして拜する能はずと稱す。世民、人を遣はし之を數めて曰はく、「公は隋室の宰相にして、危けれども扶くる能はず、君をして弑せられ國をして亡びしむ。李密・王世充を見るに、皆

【五二】 誅。古、卿大夫没するときは、君、有司に命じて、其功德を累ねて、文を爲らしめ、以てこれを哀む、これを誅と曰ふ。今、これを誅するは、其罪無くして死するを哀むなり。
 【五三】 閻闔門。晉、洛陽に都す、其城の西面北來の第三門を閻闔と曰ふ。

拜伏舞蹈せり。今既に老病ならば、相見るを勞する無し」と。長安に至るに及び、又、見えんと請ふ。許さず。既に老い且つ貧しく、復た官爵無く、家に卒す。年八十二。秦王世民、隋の宮殿を觀、歎じて曰はく、「侈心を逞しくし、人欲を窮む。亡ぶる無からんとすとも得んや」と。命じて端門樓を撤し、乾陽殿を焚き、則天門及び闕を毀ち、諸の道場を廢せしめ、城中の僧尼、名徳有る者各三十人を留め、餘は皆初に返す。前の眞定の令周法明は、法尙の弟なり。隋の末、客を結びて、襲うて黃梅に據り、族子孝節を遣はして、蕲春を攻めしめ、兄の子紹則をして、安陸を攻めしめ、子紹徳をして、沔陽を攻めしめ、皆之を拔く。庚午、四郡を以て來り降る。

壬申、齊善行、洛・相・魏等の州を以て來り降る。時に建徳の餘衆、走りて洛州に至り、建徳の養子を立てて主と爲し、兵を徵して以て唐を拒がんと欲す。又、居民を剽掠し、還りて海隅に向ひ盜を爲さんと欲す。善行獨り以て不可と爲して曰はく、「隋の末喪亂す。故に吾が屬、草野に相聚まり、苟くも生を求むるのみ。夏王の英武にして、河朔を平定し、士馬精彊な

- 【五】 端門。東都の皇城の南面の三門、中を端門と曰ふ。
- 【五五】 乾陽殿。後、此に於て乾元殿を起す。
- 【五六】 唐の宮城の南面の三門の中なるを應天門と曰ふ。蓋し隋の則天門なり。
- 【五七】 初に返す。初服に返すなり。還俗せしむるをいふ。
- 【五八】 眞定縣、隋、恒山郡を帶ぶ。唐、郡を改めて恒州と爲す。
- 【五九】 周法尙は陳より隋に入りて將と爲る。
- 【六〇】 黃梅縣、舊、永興と曰ふ。開皇の初、改めて新蔡と曰ふ。十八年改めて黃梅と曰ふ。黃梅山に因りて名づく。
- 【六一】 蕲春。漢の縣、江夏郡に屬す。吳、蕲春郡と爲す。
- 【六二】 安陸。漢の縣、江夏郡に屬す。宋分ちて安陸郡を置く。

るを以てさへ、一朝にして擣と爲り、易きこと掌を反すが如くなりき。豈に天命の屬する所有り、人力の能く争ふ所に非ざればなるに非ずや。今喪敗すること此の如し。守るも亦成る無く、逃るるも亦免れじ。等しく亡國と爲らば、豈に復た毒を民に遺す可けんや。若かじ、心を悉して命を唐に請はんには、必ず、緇帛を得んと欲せば、當に盡く府庫の物を散じ、復た民を殘ふ勿かるべし」と。是に於て府庫の帛數十萬段を運び、萬春宮の東街に置き、以て將卒に散す。凡そ三晝夜にして乃ち畢る。仍ほ兵を布きて坊巷を守らしめ、物を得る者は即ち出で、更に人家に入るを得る無からしむ。士卒散じ盡き、然る後僕射裴矩、行臺曹旦と與に、其百官を帥る、建徳の妻曹氏及び傳國の八璽、并に宇文化及を破りて得たる所の珍寶を奉じ、降を唐に請ふ。上、善行を以て秦王の左二護軍と爲し、仍ほ厚く之に賜ふ。初め竇建徳が宇文化及を誅するや、隋の南陽公主、子有り、禪師と曰ふ。建徳の虎賁郎將、於士澄、之に問うて曰はく、「化及は大逆なり。兄弟の子、皆當に從坐すべし。若し禪師を捨く能はずんば、當に相爲めに之を留むべし」と。公主泣きて曰はく、「虎賁は既に隋室の貴臣なり。茲事何ぞ問はるるを須ひん」と。建徳竟に之を殺す。公主、尋ぎて、尼と爲らんと請ふ。建徳敗

- 【六三】 沔陽。漢の竟陵縣の地。江夏郡に屬す。後周、復州を置き、大業の初め、沔州と改め、尋ぎて沔陽郡と爲す。
- 【六四】 萬春宮。竇建徳の築く所。
- 【六五】 八璽珍寶。武徳二年、建徳、化及を破り、八璽及び珍寶を得。
- 【六六】 護軍。秦王の統ぶる所、左三府・右三府を置き、命じて統軍護軍と爲す。
- 【六七】 於士澄。大業の初、龍舟を造るや、於士澄、已に上儀同たり、江南に往きて木を採る。

るに及び、公主將に長安に歸らんとし、宇文士及と洛陽に遇ふ。士及、與に相見んと請ふ。公主、可かず。士及、戶外に立ち、復た夫婦と爲らんと請ふ。公主曰はく、『我と君とは仇家なり。今、君を手刃せざる所以は、但だ逆を謀るの日、君が預り知らざるを察すればなるのみ』と。訶して、速かに去らしむ。士及固く請ふ。公主怒りて曰はく、『必ず死に就かんと欲せば、相見る可きなり』と。士及、屈す可からざるを知り、乃ち拜辭して去る。

乙亥、周法明を以て 黃州總管と爲す。

戊寅、王世充の徐州行臺杞王世辯、徐・宋等三十八州を以て、河南道安撫大使任瓊に詣り、降らんと請ふ。世充の故の地悉く平ぐ。

寶建徳の 博州の刺史馮士羨、復た淮南王神通を推して慰撫山東使と爲し、三十餘州を徇へ下す。建徳の地悉く平ぐ。

己卯、代州總管李大恩、苑君璋を撃ちて之を破る。

突厥、邊に寇す。長平の靖王叔良、五將を督して之を撃つ。叔良、流矢に中る。師旋る。六月戊子、道に卒す。

戊戌、孟海公の餘黨蔣善合、鄆州を以て、孟噉鬼、曹州を以て來り降る。噉鬼は海公の從兄なり。

庚子、營州の人石世則、總管晉文衡を執へ、州を擧げて叛し、靺鞨の突地稽を奉じて主と爲す。

黃州總管周法明、蕭銑の 安州を攻めて之を拔き、其總管馬貴遷を獲たり。

乙巳、右驍衛將軍盛彥師を以て宋州總管と爲し、河南を安撫せしむ。

乙卯、海州の賊帥臧君相、五州を以て來り降る。海州總管に拜す。

秋七月庚申、王世充の行臺王弘烈・王泰・左僕射豆盧行褒・右僕射蘇世長、襄州を以て來り降る。上、行褒・世長と、皆、舊有り。是より先、屢、書を以て之を招く。行褒輒ち使者を殺す。既に長安に至る。上、行褒を誅し、而して世長を責む。世長曰はく、『隋、其鹿を失ひ、天下共に之を逐ふ。陛下既に之を得たり。豈に復た同獵の徒を怨り、肉を争ふの罪を問ふべけんや』と。上笑つて之を釋し、以て諫議大夫と爲す。嘗て從つて高陵に

校獵し、大に禽獸を獲たり。上、羣臣を顧みて曰はく、『今日の敗は樂しきか』と。世長對へて曰はく、『陛下遊獵し、薄く萬機を廢す。十旬に満たず。未だ樂と爲すに足らず』と。上、色を變ず。既にして笑つて曰はく、『狂態復た發するか』と。對へて曰はく、『臣に於ては則ち狂なり。陛下に於ては甚だ忠なり』と。嘗て宴に披香殿に侍す。酒酣にして、上に謂つて曰はく、『此殿は煬帝の爲る所か』と。上曰はく、『卿の諫むるは

- 【七二】營州。隋の遼西郡。
- 【七三】安州。蕭銑、蓋し亦安州を隋の安陸郡の界に置く。
- 【七四】海州。隋の東海郡、魏の武定七年、海州を置く。
- 【七五】襄州。隋の襄陽郡、春秋穀鄧盧羅都の地。
- 【七六】校獵。大に關校を爲りて以て禽獸を遮り、而して獵取するなり。
- 【七七】披香殿。慶善宮に在り。慶善宮は高祖の舊第なり。

直に似たれども、實は詐多し。豈に此殿は朕が爲る所なるを知らずして、對へて曰はく、『臣、實に知らず、但だ、其の華侈なること、傾宮・鹿臺の如く、興王の爲す所に非ざるを見るが故なり。若し陛下、之を爲らば、誠に宜しき所に非ず。臣、昔、陛下に武功に侍し、居る所の宅を見るに、僅に風雨を庇ふのみ。當時、亦、以て足れりと爲せり。今、隋の宮室に因り、已に侈を極め、而して又之を増す。將た何を以て其失を矯めんや』と。上深く之を然りとす。

甲子、秦王世民、長安に至る。世民、黄金甲を被り、齊王元吉・李世勣等二十五將、其後に從ひ、鐵騎萬匹、前後部、鼓吹す。俘王世充・竇建德及び隋の乘輿御物を、太廟に獻じ、飲至の禮を行ひ、以て之を饗す。乙丑、高句麗王建武、使を遣はして入貢す。建武は、元の弟なり。上、王世充を見て之を數む。世充曰はく、『臣の罪は固より誅に當る。然れども秦王、臣に死せざるを許せり』と。丙寅、世充を赦して庶人と爲し、兄弟子姪と與に蜀に處らしめ、竇建德を市に斬る。丁卯、天下略ぼ定まるを以て大赦し、百姓、復一年を給す。

- 【七六】 村、傾宮・鹿臺を爲る。
- 【七九】 鼓吹、軍樂なり。
- 【八〇】 飲至の禮、戰勝ちて歸りて宗廟に飲むの禮。
- 【八一】 高元は隋紀に見ゆ。
- 【八二】 陝州は陝に治す。今の河南省河洛道陝縣。
- 【八三】 鼎、湖城、武德元年、鼎州と曰ふ。
- 【八四】 函、武德三年、永寧嶺を以て函州を置く。虢、義寧元年、盧氏・長水・桃林を分ちて虢郡を置く。武德元年、虢州と曰ふ。
- 【八五】 虞、義寧元年、安邑・虞郷・夏を以て安邑郡を置く。武德元年、虞州と曰ふ。
- 【八六】 芮、武德二年、芮城・河北・永樂を以て芮州を置く。
- 【八七】 函、虢、虞、芮の六

州、轉輸勞費し、幽州の管内、久しく寇戎に隔たる。竝に復二年を給す。律令格式は、且く開皇の舊制を用ふ。赦令既に下りたれども、王寶の餘黨、尙ほ遠く徙る者有り。治書侍御史孫伏伽、上言す、『兵・食は去る可し、信は去る可からず。陛下已に赦し、而して復た之を徙す。是れ自ら本心に違ふ。臣民をして何の憑依する所あらしむる。且つ世充すら尙ほ寛宥を蒙る。況んや餘黨に於てをや、宜しく縱釋すべき所なり』と。上、之に從ふ。王世充、防夫未だ備はらざるを以て、雍州の廨舍に置く。獨孤機の子定州の刺史修德、兄弟を帥めて其所に至り、矯りて救と稱し、鄭王と呼ぶ。世充、兄世暉を以て趨り出づ。修德等、之を殺す。詔して修德の官を免す。其餘の兄弟子姪等、道に於て、亦、反を謀るを以て誅せらる。隋の末、錢弊濫薄にして、皮を裁ち紙に糊して之を爲るに至る。民間、其弊に勝へず。是に至りて、初めて開元通寶錢を行ふ。重さ二銖四釐。十錢を積みて重さ一兩。輕重大小、最も折衷と爲す。遠近、之を便とす。給事中歐陽詢に命じて、其文を撰し、并に書せしむ。廻環して讀む可し。屈突通を以て陝東道大行臺右僕射と爲し、洛陽に鎮せしめ、淮陽王道玄を以て洛州總管と爲す。李世勣の父蓋、竟に恙無くして還る。詔して、其官爵を復す。竇軌、益州に還る。軌、兵を將る

- 【八七】 雍州の廨舍は、後、京兆府と爲す。光德坊に在り。
- 【八八】 武德二年正月、獨孤機兄弟、世充の殺す所と爲る。故に修德、仇を報するなり。
- 【八九】 弊、當に幣に作るべし。蓋し傳寫の誤なり。
- 【九〇】 李蓋が虜にせらるる事、一百八十七卷武德二年十月に見ゆ。
- 【九二】 洛を平ぐるより還るなり。

て征討するに、或は旬月を経るも、甲を解かず、性嚴酷にして、將佐、犯す有れば、貴賤と無く、立ちどころに之を斬り、吏民を鞭撻し、常に流血、庭に滿つ。所部、足を重ね息を屏む。癸酉、錢監を洛・并・幽・益等諸州に置く。秦王世民、齊王元吉、三鑑を賜はり、裴寂、一鑑を賜はり、錢を鑄るを聽す。自餘敢て盜鑄する者は、身死し、家口配没せらる。

河北既に平ぎ、上、陳君賓を以て洛州の刺史と爲し、將軍秦武通等をして、兵を將ゐて洛州に屯せしめ、分ちて東方の諸州を鎮せしめんと欲す。又、鄭善果等を以て慰撫大使と爲し、洛州に就き、山東の州縣の官を選補せしむ。竇建德が敗るるや、其諸將多く庫物を盜匿し、及び閭里に居り、暴横にして民の患を爲す。唐の官吏、法を以て之を繩し、或は捶撻を加ふ。建德の故將、皆驚き懼れて、安んぜず。高雅賢・王小胡、家、洛州に在り。其家を竊みて以て逃れんと欲す。官吏、之を捕ふ。雅賢等亡命して、貝州に至る。會、上、建德の故將范願・董康買・曹湛及び雅賢等を徵す。是に於て、願等相謂つて曰はく、『王世充、洛陽を以て唐に降るや、其將相大臣段達・單雄信等皆夷滅せらる。吾が屬、長安に至らば、必ず免れざらん。吾が屬、十年より以來、身、百戰を経、當に死すべきこと久し。今何ぞ餘生を惜み、之を以て事を立てざる。且つ夏王、淮安王を得、遇するに客禮を以てす。唐は夏王を得、即ち之を殺せり。吾が屬、皆、夏王に厚くせらる。今、之が爲めに仇を報いずん

【九二】賜ふに官鑑を以てするなり。鑑は治なり。
【九三】貝州。隋の清河郡。
【九四】淮安王云云。一百八十七卷二年十月に見ゆ。

ば、將に以て天下の士を見る無からんとす』と。乃ち亂を作さんと謀る。之を卜するに、劉氏を以て主と爲さば吉と。因つて相與に、漳南に之き、建德の故將劉雅を見、其謀を以て之に告ぐ。雅曰はく、『天下適安定す。吾將に耕桑に老いんとす。復た兵を起すを願はず』と。衆怒り、且つ其謀を泄らさんことを恐れ、遂に之を殺す。故、漢東公劉黑闥、時に漳南に屏居す。諸將往きて之に詣り、告ぐるに其謀を以てす。黑闥、欣然として之に従ふ。黑闥方に蔬を種う。即ち耕牛を殺し、之と共に飲食し、計を定め、衆を聚めて百人を得たり。甲戌、漳南縣を襲うて之に據る。是時、諸道、事有れば、則ち行臺尙書省を置き、事無ければ則ち之を罷む。朝廷、黑闥が亂を作すを聞き、乃ち山東道行臺を洛州に置き、魏・冀・定・滄に、竝に總管府を置く。丁丑、淮安王神通を以て、山東道行臺右僕射と爲す。辛巳、襄州道安撫使郭行方、蕭銑の、都州を攻め、之を拔く。孟海公、竇建德と同じく誅に伏す。戴州の刺史孟噉鬼、自ら安んぜず。海公の子義を挾みて、曹・戴・二州を以て反し、二州の令蔣善合を以て腹心と爲す。善合、其左右と同じく謀りて之を斬る。

【九五】漳南縣は、貝州に屬す。漢の東陽縣なり。隋の開皇十八年、棗強・清平二縣の地を分ちて漳南縣を古の東陽城に置く。
【九六】漢東公。竇建德が封する所の爵なり。
【九七】襄州。當に襄州に作るべし。
【九八】都州。武德四年、竟陵の樂鄉及び襄州の率道・上洪を以て都州を置く。
【九九】戴州。武德四年、曹州の成武・宋州の單父・楚丘を以て戴州を置く。
【一〇〇】禹城縣は齊州に屬す。隋の祝阿なり。今の山東省東臨道禹城縣。

八月丙戌朔、日、之を食する有り。

丁亥、太子に命じて北邊を安撫せしむ。

丁酉、劉黑闥、(101)郟縣を陷る。(102)魏州の刺史權威・貝州の刺史戴元祥、與に戦ひ、皆敗死す。

黑闥、悉く其餘衆及び器械を取る。寶建徳の舊黨、稍稍出でて之に歸し、衆、二千人に至る。壇を漳

南に爲りて建徳を祭り、告ぐるに兵を擧ぐるの意を以てし、自ら大將軍と

稱す。詔して、關中の歩騎三千を發し、將軍秦武通・定州總管 藍田の

李玄通をして、之を撃たしむ。又、幽州總管李藝に詔し、兵を引ききて會

して黑闥を撃たしむ。

癸卯、突厥、代州に寇す。總管李大恩、行軍總管王孝基を遣はして之を

拒がしむ。軍を擧げて皆没す。甲辰、進みて(103)崞縣を圍む。乙巳、王孝

基、突厥より逃げ歸る。李大恩、衆少く、城に據りて自ら守る。突厥、敢

て逼らず。月餘にして引き去る。

上、南方の寇盜尙ほ多きを以て、丙午、左武侯將軍張鎮周を以て淮南道行軍總管と爲し、大將軍陳

智略を、嶺南道行軍總管と爲し、之を鎮撫せしむ。

丁未、劉黑闥、(104)歷亭を陷れ、屯衛將軍王行敏を執ふ。之をして拜せしむ。可かず。遂に之を

殺す。

初め洛陽既に平ぐや、徐圓朗、降らんと請ふ。(105)兗州總管に拜し、魯郡公に封ず。劉黑闥、亂を

作すや、陰に圓朗と謀を通す。上、葛公盛彦師をして、河南を安集せしむ。行きて(106)任城に至

る。辛亥、圓朗、彦師を執へ、兵を擧げて反す。黑闥、圓朗を以て大行臺

元帥と爲す。兗・鄆・陳・杞・伊・洛・曹・戴等八州の豪右、皆之に應ず。圓朗

厚く彦師を禮し、書を作りて其弟に與へしめ、(107)虞城を擧げて降らし

む。彦師、書を爲りて曰はく、『吾、使を奉ずること無狀にして、賊の擒

ふる所と爲る。臣と爲りて不忠なり。之を誓ふに死を以てす。汝善く老母

に侍し、吾を以て念と爲す勿れ』と。圓朗初め色動く。而るに彦師自若た

り。圓朗乃ち笑つて曰はく、『盛將軍、壯節有り。殺す可からざるなり』

と。之を待つこと舊の如し。河南道安撫大使任瓌、行きて(108)宋州に至る。

屬、圓朗・反す。副使柳濬、瓌に勸めて退きて(109)汴州を保せしむ。瓌笑

つて曰はく、『柳公何ぞ怯なるや』と。圓朗、又、(110)楚丘を攻め陷れ、

兵を引ききて將に虞城を圍まんとす。瓌、部將崔樞・張公謹を遣はし、(111)鄆陵より、諸豪右の質子百餘

人を帥ゐて虞城を守らしむ。濬曰はく、『樞と公謹と、皆、王世充の將なり。諸州の質子、父兄皆反

- 【101】郟縣。貝州に屬す。
- 【102】魏州。隋の武陽郡。
- 【103】藍田縣は雍州に屬す。今の陝西省關中道藍田縣。
- 【104】崞縣。代州に屬す。今の山西省雁門道崞縣。
- 【105】歷亭。漢の東陽の地。隋の開皇十六年、郟縣を分ちて置く。時に貝州に屬す。今の山東省東臨道恩縣の西四十里。

- 【106】兗州。隋の魯郡。
- 【107】任城縣は兗州に屬す。
- 【108】虞城縣は宋州に屬す。隋、下邑縣を分ちて置く。時に東虞州を置く。
- 【109】宋州。睢陽に治す。時に宋城縣と爲す。
- 【110】宋州より西のかた汴州に至るまで二百八十五里。
- 【111】楚丘縣は時に戴州に屬す。今の山東省濟寧道曹縣の東南。
- 【112】鄆陵縣は時に洧州に屬す。

す。恐らくは必ず變を爲さん」と。瓌、應へず。樞、虞城に至り、質子を分ち、士人と與に隊を合はせて共に城を守らしむ。賊稍近づく。質子、叛く者有り。樞、其隊帥を斬る。是に於て、諸隊帥皆懼れ、各其質子を殺す。樞、禁せず。其首を門外に梟し、使を遣はして瓌に白す。瓌、陽りて怒りて曰はく、「吾、質子と俱にせしむる所以は、其父兄を招かんと欲すればなるのみ。何の罪ありて之を殺せる」と。退きて潛に謂つて曰はく、「吾固より崔樞の能く此を辨せんことを知れり。縣人既に質子を殺し、賊と深仇たり。吾何ぞ患へんや」と。賊、虞城を攻む。果して克たずして去る。

初め竇建德、〔二二〕 鄆陽の崔元遜を以て、深州の刺史と爲す。劉黑闥が反するに及び、元遜、其黨數十人と與に、野に謀り、甲士を車中に伏せ、禾を以て其上を覆ひ、直に聽事に入り、禾中より呼譟して出で、刺史裴晷を執へて之を殺し、首を黑闥に傳ふ。

九月乙卯、〔二二〕 文登の賊帥淳于難、降らんと請ふ。登州を置き、難を以て刺史と爲す。突厥、并州に寇す。左屯衛大將軍竇琮等を遣はして之を撃たしむ。戊午、突厥、原州に寇す。行軍總管尉遲敬德等を遣はして之を撃たしむ。

辛酉、徐圓朗、自ら魯王と稱す。

隋の末に、〔二二〕 歙州の賊帥汪華、黟、歙等五州に據り、衆一萬有り、自ら吳王と稱す。甲子、使を遣はして來り降る。歙州總管に拜す。

隋の末に、〔二二〕 弋陽の盧祖尚、壯士を糾合し、以て郷里を衛る。部分嚴整にして、羣盜、之を畏る。煬帝が弒に遇ふに及び、郷人、之を奉じ、光州の刺史と爲す。時に年十九。表を皇泰主に奉す。王世充が自立するに及び、祖尚來り降る。丙子、祖尚を以て光州總管と爲す。

己卯、詔して、天下の戶口を括す。

徐圓朗、〔二二〕 濟州に寇す。〔二二〕 治中吳兢論、撃ちて之を走らす。癸未、詔して以はく、「太常の樂工、皆、前代、罪に因りて配没せられ、子孫相承け、多く年所を歴たり。良に哀愍す可し。宜しく竝に蠲除して民と爲すべし」と。且つ執事に令し、若し仕宦して、流に入らば、更に追集する勿らしむ。

甲申、靈州總管楊師道、突厥を撃ちて之を破る。師道は、〔二二〕 恭仁の弟なり。

〔二三〕 鄆陽縣は饒州に屬す。
 〔二四〕 深州。隋の開皇十六年、定州の安平を以て、深州を置く。大業の初、廢す。武德四年、定州の安平・瀛州の饒陽を以て深州を置く。
 〔二五〕 文登。本、漢の牟平縣の地、後齊、文登縣を置く、文登山に因りて名づく。隋、東萊郡に屬す。今の山東省膠東道文登縣。時に登州を置き、萊州の觀陽縣を兼ね領す。

〔二六〕 歙州。本、新安郡、隋、陳を平げて置く。黟歙の二縣これに屬す。今の安徽省蕪湖道歙縣。
 〔二七〕 弋陽。漢の縣、南齊、郡と爲し、梁、光州を置く。今の河南省汝陽道潢川縣。

〔二八〕 濟州。隋の濟北郡。
 〔二九〕 治中。官名。武德元年、郡の太守を改めて州の刺史と曰ひ、郡丞を別駕と曰ふ。未だ嘗て治中を置かず。此に治中と書するは、別駕を以て治中と爲すならんか。蓋し此時、官稱未だ一に定まざるなり。

〔三〇〕 流に入る。流内の官と爲るをいふ。
 〔三一〕 楊恭仁は、時に涼州に鎮す。

詔して、巴蜀の兵を發し、趙郡王孝恭を以て〔三三〕荆湘道行軍總管と爲し、李靖をして行軍長史を攝せしめ、十二總管を統べ、夔州より、流に順ひて東下せしめ、廬江王〔三四〕瑗を以て、荆郢道行軍元帥と爲し、〔三五〕黔州の刺史田世康をして、辰州道に出でしめ、黃州總管周法明をして、夏口道に出でしめ、以て蕭銑を撃つ。是月、孝恭、夔州を發す。時に〔三六〕峽江方に漲る。諸將、水の落つるを俟ちて軍を進めんと請ふ。李靖曰はく、『兵は神速を貴ぶ。今、吾が兵始めて集まり、銑、尙ほ未だ知らず、若し江の漲るに乗じて、倏忽として其城下に抵り、其の備へざるを掩はば、此れ必ず擒と成らん。失ふ可からざるなり』と。孝恭、之に従ふ。

淮安王神通、關内の兵を將ゐて冀州に至り、李藝の兵と合し、又、邢・洛・相・魏・恒・趙等の兵を發し、合はせて五萬餘人、劉黑闥と、饒陽城〔三七〕の南に戰ふ。陳を布くこと十餘里。黑闥、衆少く、隄に依り單行にて陳し、以て之に當る。會、風雪あり。神通、風に乗じて之を撃つ。既にして風返る。神通大に敗れ、土馬軍資、三分の二を失亡す。李藝、西偏に居り、奔るを逐ふこと數里、大軍の利あらざるを聞き、退きて〔三八〕藁城に保す。高雅賢を撃ちて之を破

【三三】荆湘道。荆州は南郡、湘州は長沙郡。荆湘道は南朝の荆湘の所部なるを以て之を言ふ。下の荆郢道も此に類す。
 【三四】黔州は隋の竟陵郡。
 【三五】辰州。漢の辰陽縣、隋、辰溪縣と爲す。唐改めて辰州と爲す。
 【三六】夏口。即ち漢口。
 【三七】峽江。蜀江、二峽を遷、之を峽江と謂ふ。
 【三八】饒陽。漢の縣。今の直隸省保定道饒陽縣。
 【三九】藁城縣。本、恒州に屬す。時に廉州に屬す。今の直隸省保定道藁城縣。

藝も亦敗る。薛萬均・萬徹、皆虜にせらる。髮を截りて之を驅る。萬均兄弟亡げ歸る。藝、兵を引きて幽州に歸る。黑闥の兵勢大に振ふ。

上、以へらく、秦王は功大なり、前代の官、皆、以て之を稱するに足らずと。特に天策上將を置き、位、王公の上に在り。冬十月、世民を以て天策上將と爲し、司徒・陝東道大行臺・尚書令を領せしめ、〔三九〕邑二萬戸に増す。仍て〔四〇〕天策府を開き、官屬を置く。齊王元吉を以て司空と爲す。

世民、海内浸く平げるを以て、乃ち館を宮西に開き、四方の文學の士を延き、教を出し、王府の屬杜如晦・記室房玄齡・虞世南・文學褚亮・姚思廉・主簿李玄道・參軍蔡允恭・薛元敬・顏相時・諮議典籤蘇勗・天策府の從事中郎于志寧・軍諮祭酒蘇世長・記室薛收・倉曹李守素・國子助教陸德明・孔穎達・信都の蓋文達・宋州總管府の戶曹許敬宗を以て、竝に本官を以て、文學館學士を兼ねしめ、分ちて三番と爲し、更日に直宿せしめ、珍膳を供給し、恩禮優厚なり。世民、朝謁公事の暇には、輒ち館中に至り、諸學士を引き、文籍を討論し、或は夜分にして乃ち寢ぬ、又〔四一〕庫直閣立本をして像を圖し、褚亮をして贊を爲らしめ、十八學士と號す。士大夫、其選に預るを得る者、時人、之を〔四二〕登瀛州

【三九】邑二萬戸。唐の爵九等、王食邑は萬戸。今之に倍す。
 【四〇】天策府に長史司馬各一人、從事中郎二人を置く、竝に府事を通判するを掌る。軍諮祭酒二人、軍事を謀り、禮儀を贊相し、賓客に應接す。典籤四人、宣傳導引の事を掌る。主簿二人、教命を省覆するを掌る。錄事二人、記室參軍事二人、書疏表啓、教命を宣行するを掌る。功倉兵騎監士六曹參軍各二人、參軍事六人。
 【四一】庫直。親事府に隸す。
 【四二】登瀛州。自來相傳ふ、海中に三神山有り蓬萊、方丈、瀛州。人、至る能はず、至るときは仙と成ると。故に以て喻と爲す。

と謂ふ。允恭は (一三) 大寶の弟の子、元敬は收の從子、相時は (一四) 師古の弟、立本は (一五) 毗の子なり。初め杜如晦、秦王府の兵曹參軍と爲り、俄に陝州の長史に遷る。時に府僚多く外官に補せらる。世民、之を患ふ。房玄齡曰はく、「餘人は惜むに足らず。杜如晦に至りては、王佐の才なり。大王、四方を經營せんと欲せば、如晦に非ざれば不可なり」と。世民驚きて曰はく、「公の言微かりせば、幾ど之を失はんとせり」と。即ち奏して府屬と爲す。玄齡と與に、常に世民の征伐に従ひ、帷幄に參謀す。軍中多事なり。如晦、剖決すること流るるが如し。世民、軍を破り城に克つ毎に、諸將佐は争うて寶貨を取る。玄齡獨り人物を収采し、之を幕府に致す。又、將佐の勇略有る者は、玄齡必ず之と深く相結び、世民の爲めに死力を盡さしむ。世民、玄齡をして入りて事を奏せしむる毎に、上・歎じて曰はく、「玄齡、吾が兒の爲めに事を陳すること、千里を隔つと雖も、皆、面談するが如し」と。李玄道嘗て李密に事へて記室と爲る。密敗るるや、官屬、王世充の虜にする所と爲り、死を懼れ、皆、曙に達るまで寐ねず、獨り玄道、起居自若として曰はく、「死生は命有り。憂へて免る可きに非ず」と。衆、其識量に服す。

庚寅、劉黑闥、瀛州を陥れ、刺史盧江叙を殺す。 (一六) 觀州の人、刺史雷德備を執へ、城を以て之に

【一三】蔡大寶は後梁主蕭岌を輔く。
 【一四】額師古は碩學を以て名あり。
 【一五】閻毗は巧思を以て隋の煬帝に事ふ。
 【一六】觀州、隋、東光縣を以て觀州を置く。大業の初、廢す。武德四年、德州の弓高・胡蘇・東光・冀州の阜陵・蓆・安陵・觀津を以て觀州を置く。

降る。
 辛卯、蕭銑の (一七) 鄂州の刺史雷長穎、魯山を以て來り降る。趙郡王孝恭、戰艦二千餘艘を帥ひて東下す。蕭銑、江水方に漲るを以て、殊えて備を爲さず。孝恭等、其荆門 (一八)、宜都二鎮を拔き、進みて夷陵に至る。銑の將文士弘、精兵數萬を將ひて、 (一九) 清江に屯す。癸巳、孝恭擊ちて之を走らし、戰艦三百餘艘を獲、殺溺死者萬計。奔るを追うて (二〇) 百里洲に至る。士弘、兵を收めて復た戰ふ。又、之を敗り、進みて北江に入る。銑の (二一) 江州總管蓋彥舉、五州を以て來り降る。

【一七】鄂州、隋、陳を平げ、江夏郡を以て鄂州を置き、江南の江夏に治す。大業の初、復た郡と爲す。蕭銑蓋し州を魯山に置く。今の河南省河洛道魯山縣。
 【一八】宜都、蕭銑、宜都鎮を峽州夷道縣に置く。
 【一九】夷陵縣は峽州を帶ぶ。
 【二〇】清江、即ち假山の夷水なり。水色清し。
 【二一】百里洲、枝江縣(今の湖北省荆南道)の江中に在り。

毛州の刺史趙元愷、性嚴急にして、 (二二) 下、命に堪へず。癸卯、州民董燈明等、亂を作し、元愷を殺し、以て劉黑闥に應ず。盛彥師、徐圓朗の所より逃れ歸る。王薄、因つて青・萊・密の諸州に説き、皆、之を下す。

蕭銑が (二三) 兵を罷め農を營むや、纔に宿衛數千人を留む。唐の兵至り文士弘敗ると聞き、大に懼れ、倉猝に兵を徵す。皆、江嶺の外に在り、道塗阻遠にして、遽に集まる能はず。乃ち見兵を悉し、出でて拒ぎ戰はしむ。

【二二】北江、江水、枝江縣に至りて分流し、百里洲の北に出でて東流する者、因つて之を北江と謂ふ。
 【二三】江州、宜昌縣に、後周、江州を置く。隋、廢して巴山縣と爲し、清江郡に屬す。蕭

孝恭將に之を撃たんとす。李靖、之を止めて曰はく、『彼は敗を救ふの師、策。素より立つに非ず、勢、久しき能はじ。且く、南岸に泊するに若かず。之を緩くすること一日ならば、彼必ず其兵を分ち、或は留まりて我を拒ぎ、或は歸りて自ら守り、兵分れ、勢弱からん。我、其の懈れるに乗じて之を撃たば、勝たざる蔑からん。今若し之を急にせば、彼則ち力を併せて死戦せん。楚の兵は剽銳なり。未だ當り易からざるなり』と。孝恭、從はず。靖を留めて營を守らしめ、自ら銳師を帥ゐて出で戦ふ。果して敗れ、走りて南岸に趣く。銑の衆、舟を委て、軍資を收掠し、人、皆、重きを負ふ。靖、其衆の亂るを見、兵を縦ちて奮撃し、大に之を破る。勝に乗じて直に江陵に抵り、其外郭に入り、又、水城を攻めて之を抜き、大に舟艦を獲たり。李靖、孝恭をして盡く之を江中に散せしむ。諸將皆曰はく、『敵を破りて獲る所なり。當に其用を藉るべし。奈何ぞ棄てて以て敵を資くる』と。靖曰はく、『蕭銑の地、南は嶺表に出で、東は洞庭に距る。吾、懸軍深く入り、若し城を攻めて未だ抜けずんば、援軍四より集まり、吾、表裏に敵を受け、進退すること獲ず、舟楫有り」と雖も、將た安んぞ之を用ひん。今、舟艦を棄て、江を塞ぎて下らしめば、援兵、之を見、必ず、江

銑、蓋し復た江州を此に置く。
 【四四】毛州。魏州館陶縣に、舊毛州を置く。隋の大業の初、州廢す。寶建德復た置く。唐、之に因る。魏州の館陶。冠氏・博州の堂邑・貝州の臨清・清水を領す。
 【四五】萊州。東萊郡。後魏の光州なり。
 【四六】密州。高密郡。後魏の膠州なり。
 【四七】兵を龍め農を營むこと前卷三年に見ゆ。
 【四八】南岸。江陵の南岸即ち馬頭岸なり。
 【四九】洞庭湖。今の湖南省武陵道岳陽縣に在り。

陵已に破れたりと謂ひ、未だ敢て輕しく進まず、往來覘伺し、動もすれば旬月を淹まらん。吾、之を取らんこと必せり』と。銑の援兵、舟艦を見、果して疑うて進まず。其(二五)交州の刺史丘和・長史高士廉・司馬杜之松、將に江陵に朝せんとす。銑敗れぬと聞き、悉く孝恭に詣りて降る。孝恭、兵を勸して江陵を圍む。銑、内外阻絶す。策を中書侍郎岑文本に問ふ。文本、銑に降らんことを勸む。銑乃ち羣下に謂つて曰はく、『天、梁に祚せず。復た支ふ可からず。若し必ず力の屈するを待たば、則ち百姓、患を蒙らん。奈何ぞ我一人の故を以て、百姓を塗炭に陥れんや』と。乙巳、銑、太牢を以て太廟に告げ、令を下し、門を開きて出で降る。城を守る者皆哭す。銑、羣臣を帥ゐ、總纒布幘し、軍門に詣りて曰はく、『死に當る者は唯だ銑のみ。百姓は罪無し。願はくは殺掠せざらんことを』と。孝恭、入りて其城に據る。諸將、大に掠めんと欲す。岑文本、孝恭に説きて曰はく、『江南の民、隋の末より以來、虐政に困しみ、重ぬるに羣雄の虎争するを以てす。今の存する者は、皆鋒鏑の餘、踵を跛げ頸を延ばし、以て眞主を望む。是を以て、蕭氏の君臣、江陵の父老、計を決して命に歸し、肩を息むる所有らんことを庶幾ふ。今若し兵を縦ちて俘掠せば、恐らくは此より以南、復た化に向ふの心無からん』と。孝恭、善しと稱し、遽に之を禁止す。諸將又言はく、『梁の將帥、官軍と拒ぎ鬪ひて死する者は、其の罪既に深し。請ふ其家を籍没し、以て將士を賞せん』と。李靖曰はく、『王者の師は、宜しく義聲をして路に先だたしむべし。

【二五〇】交州。隋の交趾郡。

彼、其主の爲めに鬪ひて死す。乃ち忠臣なり。豈に叛逆の科に同じくして、其家を籍す可けんや」と。
 是に於て城中安堵し、秋毫も犯す無し。南方の州縣、之を聞き、皆、風を望みて歎附す。銑降りて數日、援兵の至る者十餘萬、江陵守られずと聞き、皆、甲を釋きて降る。孝恭、銑を長安に送る。上、之を數む。銑曰はく、「隋、其鹿を失ひ、天下共に之を逐ふ。誅、天命無し、故に此に至れり。若し以て罪と爲さば、死を逃るる所無し」と。竟に都市に斬る。詔して、孝恭を以て荊州總管と爲し、李靖を上柱國と爲し、爵、永康縣公を賜ひ、仍ほ之をして嶺南を安撫し、制を承けて拜授するを得しむ。是より先、銑、黃門侍郎江陵の劉洎を遣はし、地を嶺表に略せしむ。五十餘城を得。未だ還らざるに、銑敗る。洎、得る所の城を以て來り降る。〔三五〕南康州都督府の長史に除す。

【三五】永康縣。婺州に屬す。
 【三六】南康州。是年、端州の端溪を分ちて南康州を置き、仍ほ都督府を置き、端・康・封・新・宋・瀧等の州を督す。時に總管府を改めて都督府と爲す。
 【三七】須昌。圓朗、蓋し鄆州の須昌を以て昌州を置く。
 【三八】護軍は惟だ秦齊の二府のみ之れ有り。他國は置くを得ず。親王親事府は各々典軍二人を置く、正五品上、副典軍二人、從五品上。

庚戌、詔して、陝東道大行臺尙書省は、令僕より郎中・主事に至るまで、品秩、皆、京師に同じくし、而して員數差少し。山東の行臺及び總管府の諸州、竝にこれに隸す。其益州・襄州・山東・淮南・河北等の道は、令僕以下、各々京師に降ること一等、員數又これよりも減す。行臺尙書令は、制を承けて補署するを得、其秦王・齊王府の官の外、各々〔三九〕左右六護軍府及び左右親事帳內府を置く。

閏月乙卯、上、〔四〇〕稷州に幸す。己未、武功の舊墅に幸す。壬戌、〔四一〕好時に獵す。乙丑、〔四二〕九巖に獵す。丁卯、仲山に獵す。戊辰、〔四三〕清水谷に獵す。遂に〔四四〕三原に幸す。辛未、周氏陂に幸す。壬申、長安に還る。

十一月甲申、上、〔四五〕圓丘に祀る。
 杜伏威、其將王雄誕をして李子通を撃たしむ。子通、精兵を以て〔四六〕獨松嶺を守る。雄誕、其將陳當を遣はし、千餘人を將ゐて、高きに乗じ險に據りて以て之に逼らしめ、多く旗幟を張り、夜は則ち炬火を樹に縛し、山澤に布滿す。子通懼れ、營を燒き、走りて杭州に保す。雄誕、之を追撃し、又之を城下に敗る。庚寅、子通、窮蹙し、降らんと請ふ。伏威、子通を執へ、其左僕射樂伯通を并せて長安に送る。上、之を釋す。是より先、汪華、黟〔四七〕歙に據り、王と稱すること十餘年。雄誕、軍を還して之を撃つ、華、之を〔四八〕新安の洞口に拒ぐ。甲兵甚だ銳し。雄誕、精兵を山谷に伏せ、羸弱數千を帥ゐ、其陳を犯す。戰纔に合ひ、陽りて勝たず、走りて營に還る。華進みて之を攻む。克つ能はず。會、日暮れ、引き還る。伏兵已に其洞口に據る。華、入る能はず、窘迫して降らんと請ふ。聞人

【四〇】稷州。武德三年、京兆の武功・好時・整屋を以て稷州を置き、又、郿州を廢し、郿・鳳泉二縣を以てこれに屬す。
 【四一】好時。武德二年、醴泉を分ちて好時縣を置く、雍州に屬す。
 【四二】九巖山。雍州醴泉縣（今の陝西省關中道）に在り。
 【四三】清水谷。隋志に、京兆宜君縣に清水有り。
 【四四】三原。本、漢の池陽縣界に屬す。後周、建忠郡を置く。隋、三原縣を置く。唐、雍州に屬す。今、陝西省關中道に屬す。
 【四五】圓丘云云。貞觀禮に、冬至、昊天上帝を圓丘に祀る。
 【四六】獨松嶺。宣州廣德縣より、東南して獨松嶺を過ぎて

遂安、崑山に據り、屬する所無し。伏威、雄誕をして之を撃たしむ。雄誕、崑山は險隘にして力を以て勝ち難きを以て、乃ち單騎にて其城下に造り、
【二六〇】國の威靈を陳べ、示すに禍福を以てす。遂安、感悅し、諸將を帥めて出で降る。是に於て、伏威盡く淮南・江東の地を有ち、南は嶺に至り、東は海に距る。雄誕、功を以て歙州總管に除せられ、爵、宜春郡公を賜はる。

壬辰、
【二六一】林州總管劉旻、劉合成を撃ち、大に之を破る。合成僅に身を以て免る。部落皆降る。

李靖、嶺を度り、使を遣はし、道を分ちて諸州を招撫せしむ。至る所皆下る。蕭銑の
【二六二】桂州總管李襲志、所部を帥めて來り降る。趙郡王孝恭、即ち襲志を以て桂州總管と爲す。明年、入朝す。李靖を以て嶺南撫慰大使・檢校桂州總管と爲す。兵を引きて九十六州を下し、戶六十餘萬を得たり。

壬寅、劉黑闥、定州を陷れ、總管李玄通を執ふ。黑闥、其才を愛し、以て大將と爲さんと欲す。玄通、可かず。故吏、酒肉を以て之に饋る者有り。玄通曰はく、「諸君、吾が幽辱を哀れみ、幸に酒肉を以て來りて相關慰す。當に諸君の爲めに一醉すべし」と。酒酣にして、守者に謂つて曰はく、

「吾能く劍舞す。願はくは吾が刀を假せ」と。守者、之を與ふ。玄通舞ひ竟り、太息して曰はく、「大丈夫、國の厚恩を受け、方面を鎮撫し、守る所を保全する能はず。亦、何の面目ありて世間に視息せんや」と。即ち刀を引ききて自ら刺し、腹を潰りて死す。上聞き、之が爲めに流涕し、其子伏護を拜して大將と爲す。

庚戌、杞州の人周文舉、刺史王文矩を殺し、城を以て徐圓朗に應ず。

幽州大に饑う。高開道、粟を以て之を賑さんことを許す。李藝、老弱を遣はし、開道に詣りて食に就かしむ。開道皆厚く之を遇す。藝喜ぶ。是に於て、民三千人・車數百乘・驢馬千餘匹を發し、往きて粟を受けしむ。開道悉く之を留め、絶を藝に告げ、復た燕王と稱す。北は突厥を連ね、南は劉黑闥と結び、兵を引ききて易州を攻む。克たず。大に掠めて去る。又、其將謝稜を遣はし、詐りて藝に降り、兵をもて援接せんことを請はしむ。將に「懷戎に至らんとす。稜、襲撃して之を破る。開道、突厥と兵を連ね、數入りて寇を爲す。恒・定・幽・易、咸、其患を被る。」

十二月乙卯、劉黑闥、冀州を陷れ、刺史麴稜を殺す。黑闥既に淮安王神通を破り、書を趙・魏に移す。故の竇建德の將卒、争うて唐の官吏を殺し、以て黑闥に應ず。庚申、右屯衛大將軍義安王孝

湖州に至る。嶺格險狹なり。
【二六一】陳當の下に當に世の字有るべし、蓋し唐史、太宗の諱を避けて世の字を去るなり。

【二六二】唐の歙州は隋の新安郡なり。
【二六三】新安の洞口。即ち歙州の隘道の口。

【二六四】唐國の威靈を陳ぶるなり。
【二六五】宜春郡は袁州なり。

【二六六】隋の慶州華池縣に、武德四年、林州總管府を置く。

【二六七】桂州。隋の始安郡。

【二六八】懷戎。北燕州懷戎縣は、後漢の上谷の潘縣なり、北齊改めて懷戎と爲す。貞觀八年、北燕州を改めて媯州と爲す。今の直隸省口北道懷來縣。
【二六九】この趙魏は戰國の時の趙魏の大界を以て之を言ふ。

常を遣はし、兵を將ゐて黑闥を討たしむ。黑闥、兵數萬を將ゐて、進みて
 宗城に逼る。黎州總管李世勣、先に宗城に屯し、城を棄てて走り、
 洺州に保す。甲子、黑闥、追うて世勣等を撃ち、之を破り、歩卒五千人を
 殺す。世勣、僅に身を以て免る。丙寅、洺州の土豪、城を翻して黑闥に
 應ず。黑闥、城の東南に於て、天に告げ、及び竇建德を祭り、而して後に入
 る。後旬日、兵を引き、攻めて相州を抜き、刺史房晃を執ふ。右武衛將軍
 張士貴、圍を潰して走る。黑闥、南のかた黎・衛・二州を取る。半歲の間に、
 盡く建德の舊境を復す。又、使を遣はして北のかた突厥を連ぬ。頡利可
 汗、俟斤宋邪那を遣はし、胡騎を帥ゐて之に従はしむ。左武衛將軍秦武
 通、洺州の刺史陳君賓、永寧の令程名振、皆、河北より、遁れて長安に
 歸る。

丁卯、秦王世民・齊王元吉に命じて黑闥を討たしむ。

昆彌、使を遣はして内附す。昆彌は即ち漢の昆明なり。嵩州の治

中吉弘緯、南寧に通じ、其國に至りて之を説く。遂に來り降る。

己巳、劉黑闥、邢州・趙州を陷る。庚午、魏州を陷れ、總管潘道毅を

【七〇】宗城、本、廣宗縣、隋の仁壽の初、改めて宗城縣と爲す。清河郡に屬す。時に宗州を置く。今の直隸省大名道威縣の東。

【七一】黎州、武德二年、黎陽縣を以て黎州を置く。

【七二】永寧、當に永年に作るべし。

【七三】昆彌、昆明蠻は曇蠻の西に在り、西洱河を以て境と爲す。西洱河は即ち葉榆河なり。

【七四】嵩州、漢の越嶲郡の地、後周、嚴州を置く。開皇六年、西寧州と改む。十八年、嵩州と改む。

【七五】南寧、武德四年、南寧州を置く。今の雲南省滇中道曲靖縣。

【七六】莘州、隋の開皇十六年、魏州の莘縣を以て莘州を置く。大業の初、廢す。是年、復た魏州の莘・臨黃・武陽・博

殺す、辛未、莘州を陷る。

壬申、宋王元嘉を徙して徐王と爲す。

州の武水を以て莘州を置く。今の山東省東臨道莘縣。